

はじめに

国際協力機構（JICA）は日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関であり、約 150 の国・地域で国際協力を展開しています。日本国内においては、これら国際協力を通じて得た知見を生かし、教育現場を対象に「持続可能な社会の創り手」の育成を目指す学習指導要領などの学校教育の動向を踏まえ、国際理解教育 / 開発教育を支援する様々な事業を行っています

近年、日本で暮らす外国人は増加の一途をたどっており、外国につながる児童生徒も年々増加しています。日本政府は、「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策」（令和 5 年度改訂）を策定し、教育現場においても様々な取り組みが求められています。この対応策は、日本人と外国人が安心・安全かつ尊厳を持って暮らせる共生社会の実現のために目指すべき方向性を示したものです。教育に関してはライフステージに応じた日本語学習支援や環境整備、日本の学校生活への順応、進学及びキャリア教育、そして外国につながる児童生徒を受け持つ教員等の資質・能力の向上などへの取り組みの必要性が明記されています。

このような背景を踏まえ、JICA は 2021 年度より教育関係者を対象に「多文化共生の文化」共創プログラムを実施しています。4 年目を迎えた 2024 年度は、JICA 横浜を会場に全国の教員 20 名が参加し、多文化共生に取り組む団体や横浜市内の学校管理職の方々による講演、移住者がどのようにお互いの文化を尊重し共存を目指したかを学ぶための海外移住資料館の見学、参加者同士での対話を含む全 2 回 3 日間のプログラムを行いました。今回の研修では『多文化共生の文化』をつくるために私たちにできることは何か』をテーマに、参加者それぞれの経験や取り組み事例の共有、抱えている課題について議論を重ね、お互いに学びを深めました。本研修での学びや出会いが、今後の取り組みへの糧となることを願っております。

本冊子「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイディア BOOK 2024～」は、本研修の参加者が、各々の経験や知見、そして研修での気づきや学びを活かして考案した、自身の学校や地域で実際に行う「多文化共生の文化」づくりの取り組みをまとめたものです。授業や学校内での実践、課外活動での取り組み、保護者や外部との連携、そして教員自身の学び等、たくさんのアイディアが掲載されています。本冊子が、学校・地域における「多文化共生の文化」を育むためのきっかけやヒントとして、多くの教室・学校・地域での実践の一助となれば幸いです。最後に、本研修にご協力・ご尽力いただいたすべての皆様に、この場を借りて心から御礼申し上げます。

JICA 横浜
所長 大野 裕枝

誰もが自分を発揮できる学校づくり ～多文化共生アイデア BOOK 2024～

「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイデア BOOK 2024～」(以下本冊子)は、2024年度 JICA「多文化共生の文化」共創プログラムの参加者が、自身の経験や知見、さらに本プログラムから得た学びをもとに、今後取り組みたい活動を考え、そのアイデアをまとめたものです。本冊子は、教室・学校および地域で必要とされている、多文化共生に向けた取り組みのために活用されることを目的としています。

目次

1. 「多文化共生の文化」共創プログラムについて	
(1) ファシリテーターメッセージ	04
(2) 2024年度「多文化共生の文化」共創プログラム概要	06
(3) プログラム参加者	11
2. 「多文化共生の文化」がある学校とは？	12
3. 「多文化共生の文化」づくりのための活動アイデア集	14
4. 資料	
(1) 講演資料 公益財団法人 横浜市国際交流協会	70
(2) 講演資料 ユツカの会	79
(3) 多文化共生のための参考文献・教材・資料リスト	83
付録	
海外移住資料館	92
11 か国の教育制度・学校ガイド集	93
教育現場で活用できる JICA のツール	94

活動アイデア集＜校種別索引＞ タイトル・所属先名・氏名

14	自分らしく あなたらしく ～互いを知り、尊重し合うつながりを通して～ 深川市立一己小学校 杉島 亜紀
17	日常の中で育む「多文化共生の文化」 さいたま市立新開小学校 綾部 美希
20	違いをたのしむ、気持ちによりそう。 白百合学園小学校 植木 凡子
24	自分を大切に、周りも大切にする“兵大っ子” 神戸市立兵庫大開小学校 中村 寛子
26	「つながり 分かち合う」多文化共生 ～共創のファシリテーターとしての学校教育～ 京都市立小野小学校 橋本 有人
29	多文化共生の学校づくりをめざして～日本語教室がファシリテーター的役割を果たすために～ 鹿児島市立名山小学校 鳥居 里美
32	多文化共生 × 沖縄移民 沖縄市立中の町小学校 糸数 真弓
36	多文化共生の文化を授業を通して伝えるアイデア 相模原市立旭中学校 上野 真理
39	「聴き」、「対話し」、「あらゆる変容を楽しむ」文化の実現に向けて 平塚市立神田中学校 江川 由香里
42	ウェルビーイングの視点がある学校・社会を目指して 岩倉市立南部中学校 生田目 紀子
45	誰一人取り残さない学びの場の創造に向けて～すべての生徒の Well-being をめざして 府中町立府中中学校 沓木 里栄
48	これって日本だけ？～海外の教育事情から日本の学校文化を考える～ 中央大学杉並高等学校 大塚 圭
51	「私」が社会とつながる多文化共生の共創 千葉県立松戸国際高等学校 町田 登志子
53	多文化共生の文化の必要性について 駿台甲府高等学校 大森 虎太郎
55	互いに認め合い、成長しあえるゆたかな学校の実現に向けて～多文化共生の土台づくりを目指して～ 愛知県立常滑高等学校 沖 祐美帆
57	対話と信頼を積み重ねてつくる多文化共生の文化 兵庫県立姫路北高等学校 阿部 恵子
59	多文化共生の文化をつくるために 京都市立日吉ヶ丘高等学校 金田 将裕
61	互いを尊重し理解しようとする多文化共生の文化をめざして 兵庫県立兵庫工業高等学校 福井 千華
64	高校生と日本語学校の留学生による教科学習を通じた学び合い 鹿児島高等学校 島 由佳
67	多文化共生の文化を醸成しようというきっかけの種をまくために 福岡県教育センター 樋口 里子

1 「多文化共生の文化」 共創プログラムについて

(1) ファシリテーターメッセージ

1. 「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイデア BOOK～」とは

「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイデア BOOK～」を手にとってくださりありがとうございます。この冊子は、「多文化共生の文化」の共創に向けて、日々、学校現場で試行錯誤を重ねる先生方の思いと実践と、様々な具体的なアイデアに触れながら、自らの教育現場で実践するヒントに出会える本です。

「多文化共生の文化」共創プログラムでは、すでに様々な経験や思いを持った先生方が、これまでの取り組みを振り返り、また、ゲストの皆様との活動や海外移住資料館の見学から新たな学び、気づきを手に入れながら、共にプログラムに参加した仲間とアイデアやこれから取り組みたいアクションを磨き上げました。

そもそもなぜ、今、「多文化共生の文化」が必要とされているのか？自分の創りたい「多文化共生の文化」とは何か？「多文化共生の文化」を共創するために、やってみたいこと（アイデア、アクション）とは何か？こうした問いに、全国各地の小学校、中学校、高校、そして教育センターで、多文化共生に携わる 20 名の先生方が向き合い、その探究から生まれた気づきやアイデア、アクションが紹介されています。

ぜひ、皆さんも、プログラムの参加者が向き合った、以下の問いに答えてみてください。そして、周りの方々と共有し合い、聴き合ってみてください。そこから、新たな「多文化共生の文化」が築かれ、広がっていくと思います。

Q1. なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか？

自分にとって

学校にとって

社会・世界にとって

Q2. 自分の創りたい「多文化共生の文化」とは何か？

Q3. 多文化共生の文化を共創するために、やってみたいことは何か？

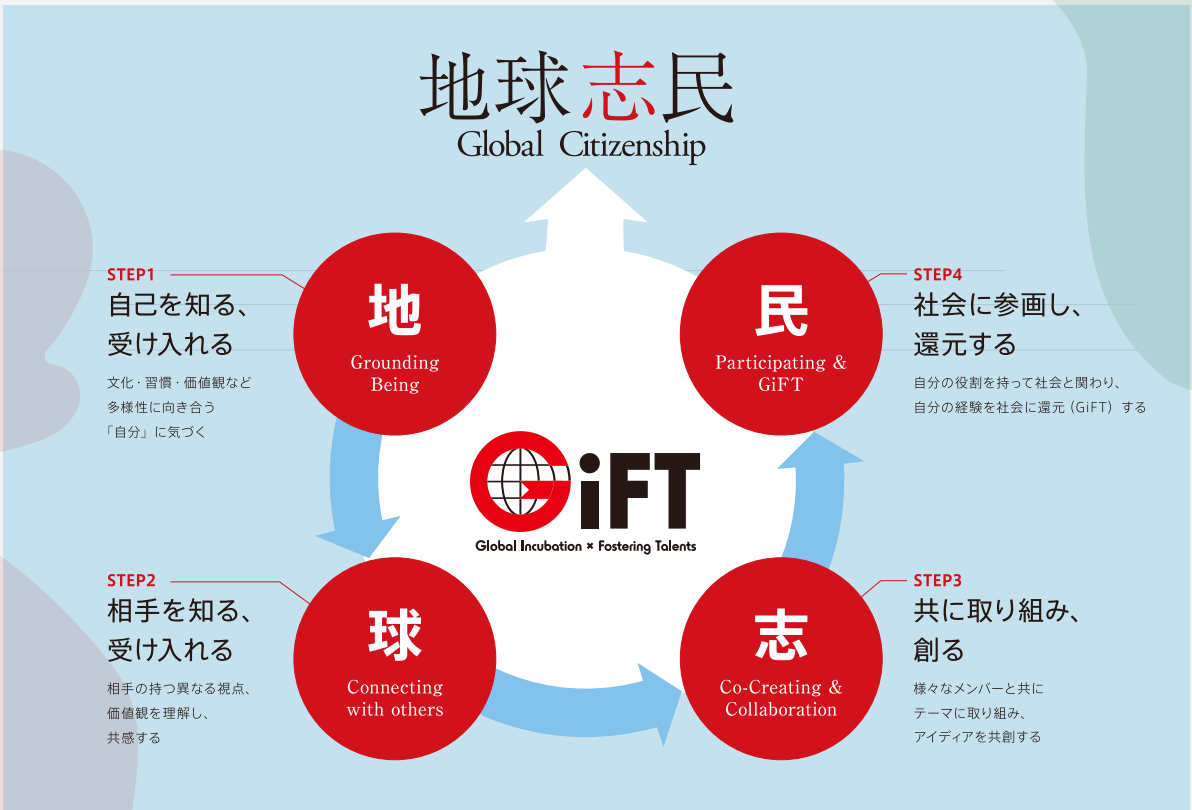
(アクション・アイデア)

2. 深い対話から多文化共生の文化を生み出すために

日本で暮らす外国人数、そして、外国につながる児童・生徒数が増加している中、「多文化共生の文化」を共創する方法に、一つの答えはありません。それぞれが関わる現場に向き合いながら、深い対話を重ね、共創していく必要があります。

本プログラムでは、上記のような問いを深めていくために、「地球志民（グローバル・シチズンシップ）プロセス」を用いました。プログラムの冒頭から、社会の課題や問題点を話し合うのではなく、まずは、STEP 1の「自己を知る、受け入れる」をスタートとし、STEP2 他者理解、STEP3 共創、STEP4 社会への貢献・参画（実践）というステップを踏んでいきました。先生お一人お一人が持つ想いや背景などについてを対話し、聴き合い、その中から、問いやアドバイスが生まれ、これからの未来を創る「多文化共生の文化」が生まれていきました。

また、今回は特に、深く「聴き合う」ことにも意識を置きました。下の図にあるように、表面的な出来事だけではない、内省や共感に基づいた思いや気づきを聴き合い、その対話から生まれたアイデア・アクションが紹介されています。



地球志民プロセス (図1)

多文化共生の文化を共創する聴き方

3つの「きく」

聞く (Hear) 表層

聞き流す (Ignore) 表面的に聞く (Superficially)

選択的に自己本位に聞く (Judge)

訊く (Ask) 中層

言葉・声

背景・理由・原因
目的・意図・動機

聴く (Listen) 深層

情緒・感情

無自覚な聞き方

質問する (理解する)

想像する
共感する

カウンセラー的な聴き方

ファシリテーター（チームメンバー）の「聴く」姿勢が場に安心感をつくる

本冊子は、ノウハウ本というよりも、「多文化共生の文化」を共創するために、志を共にし、試行錯誤を繰り返しながら、活動する先生方のあり方や挑戦を学ぶ冊子でもあります。児童、生徒、地域に向き合いながら、挑戦と共創を続けるされる執筆者の一つひとつの物語に勇気をいただきながら、ぜひ、一緒に「多文化共生の文化」を生み出す仲間になりましょう！この冊子から、多くの方がエンパワメントされ、多文化共生の文化が広がりますように。

プログラムデザイン・ファシリテーター
一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) 代表理事
辰野まどか

(2) 2024 年度「多文化共生の文化」共創プログラム概要

「多文化共生の文化」をつくるために、私たちにできることは何か？」をテーマとして、全国から集まった 20 名の参加者の皆さんとともに、3 日間の研修を JICA 横浜で実施しました。研修では、さまざまな学びやワークショップや対話を通じ、「なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか」という問いに向き合いながら、個々の多様性を認め合えるような学校・学級づくりのための取り組みアイデアを考えました。

第 1 回研修 1 日目 10 月 5 日（土）

対話：「なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか」

自分 / 学校 / 世界・社会のそれぞれにとって「なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか？」を考え、小グループで共有するとともに、その対話の中で得た気づきや感想を全体でも共有しました。（学校の）外からの視点を持つことで、当たり前とされていることを疑うことが重要ではないか、外国につながる子どもたちが日本の文化に適應するだけでなく、日本と彼らの双方の文化を共有し、新しい考え方を取り入れる必要があるというという声がありました。

「多文化共生の文化」の共創につながる各自の取り組みと課題の共有

事前に作成したスライドをもとに、所属先の多文化共生に関する現状や課題について、グループで共有しました。総合的な学習の時間において国際理解を一つの柱として探究活動を進めていることや、食を通じた文化交流の取り組みなどが紹介されました。一方で、新しい取り組みを導入したり進めたりすることが難しい状況など、参加者が日頃感じている多文化共生の文化づくりに向けた課題も共有されました。対話を通じて、これまで当たり前のように「そうなんだ・・・」で済ませてきたことが、もしかしたらそうではないのかもしれない、という気づきを得たというコメントもありました。

海外移住資料館見学と振り返り

海外移住資料館の見学にあたり、参加者には以下の 4 つの視点を事前に提示し、解説ツアーと自由見学の時間を設けました。

- ・今、なぜ海外から日本に人が来ているのか
- ・当時、日本人はなぜ海外に渡ったのか
- ・豊かなコミュニティを作るためにできることはなにか
- ・自分が海外に行くことになったらどのような活動をするか



解説を聞きながら海外移住資料館を見学

参加者の皆さんは、日系移民の歴史や時代背景の解説に深く耳を傾け、展示品や資料にも見入っていました。中には、自身の親戚にも日系移民として海外へ移住した人がいたと気づくなど、「移民」や「移住」についてより身近に感じた様子が見られました。振り返りでは、資料館の見学を通して、これまで深く知らなかった日本からの移民について理解することで、自身の多文化共生の視点を広げることができたという声が複数ありました。

参加者からのコメント

- ・日系移民の歴史は過去のことに留まらず、今日本で生活をする在日外国人のコミュニティづくりにも通じていたり、参考になったりする内容だった。また、地域にはどのような人たちが働いているのか、目を向けるきっかけとなった。
- ・日本にいる外国人労働者を「移民」の視点から理解するきっかけとなった。今、日本で起きている移民問題を、日本から移住した日系人を参考にして、解決のヒントを得ることができるかもしれないと思った。
- ・この研修に参加する前までは、移住者をマイノリティの一つのような存在、つまり自分の視点は私たちマジョリティ側にあったが、海外移住資料館を見学することで、日本人として海外に移住した先人の視点という逆の視点を得ることができた。
- ・これまでは海外からの移住者を単に何らかの理由があって移住してきた人という認識でしか捉えていなかったが、歴史を学ぶことでその時の状況や人々の思いを知ることができ、海外にルーツをもつ人々への認識が変化した。

講演 & ワークショップ：多文化の背景をもつ子ども・若者たちへの支援—横浜での取り組みから

講師：（公財）横浜市国際交流協会（YOKE）多文化共生推進課課長 門美由紀氏／ユッカの会代表 中和子氏

ゲスト：内田立也氏

門氏から、横浜に暮らす外国につながる子どもや若者の現状や、彼らに寄り添うための視点、これまでの具体的な活動、地域の社会資源とのつながりの必要性についてお話いただきました。また、「やさしい日本語」が必要とされるようになった経緯や理由についても説明いただきました。参加者は、実際に学校から保護者に配布される書類のサンプル（遠足のお知らせ）をやさしい日本語に書き換えるワークショップを体験し、外国につながる子どもたちや保護者とのコミュニケーションにおける言葉の選び方や表現の工夫がいかに重要かを実感する機会となりました。



YOKE 門氏からのお話



「やさしい日本語」ワークショップ

ユッカの会は、長年、横浜において中国残留邦人帰国者家族および外国につながる人々の教科学習支援、日本語学習支援、生活上の問題や進路・進学・就職の相談などに取り組んできたボランティア団体です。代表の中氏からは、設立の背景やそのこれまでの活動のほか、現在日本に在住する外国につながる人々のライフステージや時代と共に変化するニーズへの対応の必要性についてもお話いただきました。また、ユッカの会の活動に参加経験を持つ、中国残留邦人 3 世である内田氏をゲストにお迎えし、幼少期に中国から日本語が全く話せない状態で日本に移住した当時の思いやエピソードなど、お話いただきました。



ユッカの会中氏からのお話



ゲストのみなさんとともに

参加者からのコメント

- ・多文化共生には、地域との連携が欠かせないことを学んだ。どのように地域と繋がることができるか考えるきっかけとなった。
- ・横浜の現状に基づいて指導している内容や、教室内での現状を知ること、他人事ではなく、本気で考えるべき問題であることを再認識することができた。
- ・どうしても学校単位で物事を考えがちになってしまいますが、その子の進路や今後の人生も踏まえた上で、地域と連携する大切さを実感しました。また、小学校教諭だと卒業後の成人した姿や当事者の話を聞ける機会はなかなかないので、社会で自己実現をしている当事者の話を聞けることは貴重な機会でした。育てたい児童の目指す姿が見ることができ、とても良かったです。

第1回研修 2日目 10月6日(日)

講演（公開セミナー）：多文化共生の文化を共創する学校・コミュニティとは

講師 横浜市立南吉田小学校校長 金子正人氏

テーマ 多文化共生の学校づくり～多文化共生教育や日本語支援体制を中心に～

金子氏より、横浜市立南吉田小学校における多文化共生教育の実践例や、「誰ひとり取り残さない支援」として掲げる活動の具体例についてご講演いただきました。学校概要、外国につながる児童の内訳、海外から編入する外国につながる児童数の推移や、多文化共生を推進するための学校での取り組みとして、「夏休み国際読書会」「MY ワールドランチ」「多文化共生落語」などの具体的な活動をご紹介いただきました。

講師 横浜市立飯田北いちょう小学校副校長 井上文裕氏

テーマ 地域と共に多文化共生を進めていくために

井上氏より、横浜市立飯田北いちょう小学校の概要説明に続き、学校がかつてインドシナ難民を受け入れた歴史や、外国につながる児童が多く在籍する理由や背景についての解説がありました。また、地域と共に多文化共生を進めていくための視点として、教員研修や通訳の重要性についても具体的にお話いただきました。

参加者は、お二人のお話に熱心に耳を傾け積極的に質問もしました。自身の学校の状況や課題と照らし合わせながら、外部機関との連携の重要性や、ライフワークバランスと多文化共生の取り組みについて考える機会となりました。



金子氏による講演



井上氏による講演

参加者・視聴者からのコメント

- 学校現場で実践されてきた先行事例を実際に何うことができ、管理職として学校で何ができるか？地域とどのようなつながりを結んでいくか？について考えることができました。
- 多文化共生の文化は、日本と海外のような関係性だけでなく、障害を持つ人々や LGBTQ の人々も含む広範な概念であることを実感しました。
- 多文化共生の文化を共創するためには、学校だけではなく地域や外部の機関などとともに関わり合い、環境を作り上げていくことが大切だということ、2つの学校の現在の取り組みの実現には、一歩ずつの積み重ねがあるということ、先生方のエピソードを交えて何うことができ、大変勉強になりました。あらためて子どもたち一人一人の背景を理解し、向き合っていきたいと思います。
- 通訳や地域のボランティアを巻き込むことの大切さ、必要性をあらためて感じました。ただ、それは一朝一夕ではできないことなので、地道につながりを作っていく必要があるので、リードしていく教員（校長先生や副校長先生）の意欲・熱意、積極性が不可欠だとも思いました。また、外部人材・ボランティア等の人件費や行事・活動などにかかる必要経費を確保する交渉能力や実務的な能力も大切だとも思いました。

ワークショップ：このメンバーで、未来に向けて共創したい「多文化共生の文化」とは？

ここまでのお話や見学、講演、対話などを踏まえ、「このメンバーで、未来に向けて共創したい「多文化共生の文化」とは？」というテーマで、全員でキーワードを出し合いました。

つながりと対話

- 他者、自分、地域との対話
- 学校と地域つながろう
- 全てつながる
- ちょうどいいつながり感（強すぎず弱すぎない）
- 根元は同じ
- みんなで協働する

多様性と異文化理解

- マイノリティや異文化の理解
- 一人一人が異文化だということを認識する
- 寛容
- 否定されない
- 本当の意味でのインクルーシブな社会
- 異なる他者の受容

アイデンティティと自己肯定感

- 一人一人のアイデンティティが生かされる社会
- 自分の文化に誇りを持つ
- 置かれた環境への感謝
- 恐れずに話す、自分を安心して開示できる
- 外見にとらわれない

居場所と包容力

- 居心地のいい社会、合理的配慮
- 受け入れる側のおおらかさ
- 一人一人にとって居場所がある
- サードプレイス
- みんながウェルビーイングな社会
- みんなが生きやすい社会

楽しさと共創

- 純粋に外国の文化を楽しむ
- 違いを楽しむ
- 新しい価値をみんなで創造していくことができる
- 笑顔
- みんな楽しいと思える場
- 想像力

調和と心地よい暮らし

- 規律、平等
- 日本ならではの多文化おもてなし
- 変容のある文化
- 自分の思いや考えが自由に発信できる
- 公平さが保たれる
- 誰もが幸せに暮らせる社会

キーワードを出してみて、「多文化や多様性がひとつに混じり合って新しいものを生み出す感じと、混じり合わないかもしれないけどひとつひとつを尊重する感じ。」や「受容の方向性は、まずは自分自身を受け入れることで相手にも尊い文化があるという理解につながるのではないか。自分自身の文化を受け入れることから始められないか、と感じた。」というコメントがありました。



「このメンバーで、未来に向けて共創したい「多文化共生の文化」とは？」を言葉にする

対話：「多文化共生の文化」がある学校とは？ 自分の勤務する学校で多文化共生の文化を創るために、どんなことができるか？

全員で出したキーワードやそこから見えたり感じたりしたことを踏まえ、「多文化共生の文化」がある学校とは？という問いについて小グループで意見交換し、ホワイトボードを使って表現していきました。（P12、13 ページ「対話から生まれた「多文化共生の文化」がある学校の概念」参照）

さらに、参加者は個人としての思いとアクションに向き合うために、「自身がつくりたい多文化共生の文化」「今までやってきた取り組み」「これから取り組みたいこと・アイデア」をワークシートに記入し、考えを整理しました。それら書き出したものを同じ校種のメンバーに見せ合いながら、「自身の勤務する学校で多文化共生の文化を創るために、どんなことができるか」について対話を重ねました。



「多文化共生の文化」がある学校とは？について言葉を出し合う参加者



対話した内容を全体に共有



対話をしながら考えを整理する参加者

「学校に多文化共生の文化をつくるための取り組みアイデア」の共有・ブラッシュアップ

第1回研修でのインプットや対話をふまえ、参加者の皆さんは今後自身の所属先で取り組みたいことやそのアイデアを事前に考え、シートに記入して準備をしました。研修では、それをもとに校種別のグループで一人ずつ共有し、アイデアをより良いものにするため、他の参加者からコメントやフィードバックをもらいました。

またそれらのアイデアをより具体化するため、さらに話したいことや相談したいことを各自で設定し、近いテーマでグループを作って深める時間を設けました。「授業実践アイデア、対話中心の授業」「教職員をどう巻き込むか、否か」「言語に頼らない地域のつながり」「多文化共生理解のきっかけづくり」「ルーツへの誇り」いうテーマで5つのグループに分かれて、活発な話し合いが行われました。全体での共有の際には、他の参加者からの新たな視点やアドバイスが加えられ、対話がさらに深まりました。



話したいテーマを見せ合い、グループを作成



取り組みたいアイデアが近い参加者同士での対話

<研修主催・運営事務局>

■主催：独立行政法人 国際協力機構（JICA）横浜センター

長縄 真吾（市民参加協力課 課長）

五味 誠一郎（市民参加協力課）

三浦 紗季（総務課・海外移住資料館担当）

鈴木 理紗（市民参加協力課）

■運営事務局：一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）

辰野 まどか（代表理事）

忍 頼子（グローバル教育プロデューサー）

岩崎 沙織（グローバル教育コーディネーター）

沖田 咲（GiFT 事務局）

(3) プログラム参加者

都道府県	所属	氏名	職名・担当業務
------	----	----	---------

● 小学校

北海道	深川市立一已小学校	杉島 亜紀	教頭
埼玉県	さいたま市立新開小学校	綾部 美希	教諭 グローバルスタディ専科
東京都	白百合学園小学校	植木 凡子	教諭 図画工作専科
兵庫県	神戸市立兵庫大開小学校	中村 寛子	教諭 児童支援・日本語指導
京都府	京都市立小野小学校	橋本 有人	教頭
鹿児島県	鹿児島市立名山小学校	鳥居 里美	教諭 日本語教室・国際教育担当
沖縄県	沖縄市立中の町小学校	糸数 真弓	教諭 第4学年担任

● 中学校

神奈川県	相模原市立旭中学校	上野 真理	教諭 学級担任・人権担当
神奈川県	平塚市立神田中学校	江川 由香里	教諭 1学年担任
愛知県	岩倉市立南部中学校	生田目 紀子	教諭 岩倉市日本語ポルトガル語適応教室
広島県	府中町立府中中学校	杳木 里栄	教諭 研究推進リーダー

● 高等学校

東京都	中央大学杉並高等学校	大塚 圭	教諭 外国語科（英語）・総合的な探究の時間
千葉県	千葉県立松戸国際高等学校	町田 登志子	教諭 1年担任
山梨県	駿台甲府高等学校	大森 虎太郎	教諭 現代文教科担当、第二学年担任
愛知県	愛知県立常滑高等学校	沖 祐美帆	
兵庫県	兵庫県立姫路北高等学校	阿部 恵子	教諭 2年次副主任、人権教育推進委員長
京都府	京都市立日吉ヶ丘高等学校	金田 将裕	教諭 1年担任
兵庫県	兵庫県立兵庫工業高等学校	福井 千華	教諭
鹿児島県	鹿児島高等学校	島 由佳	教諭 英語科

● 教育センター

福岡県	福岡県教育センター	樋口 里子	主任指導主事・企画調査班
-----	-----------	-------	--------------

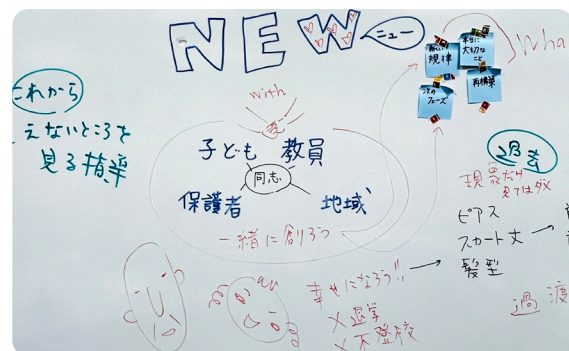
—対話から生まれた「多文化共生の文化」がある学校の問題—

2024 年度 JICA「多文化共生の文化」共創プログラムでは、海外移住資料館の見学や、講演、ワークショップ、参加者同士の対話などを踏まえ、参加者一人一人が「なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか？」を考えました。

その上で、さらに「多文化共生の文化がある学校とは？」をテーマに小グループで対話し、その概念を整理しました。各グループから次のような考えやキーワードが共有されました。

Aグループ『NEW』

(町田、上野、橋本、樋口)



今、新しい文化を再構築したり、本当に大切なことを見つめ直したりする時期。それには新しい規律も必要かもしれない。

子どもだけではなく、教員、保護者、地域が同志として文化を作っていこうという雰囲気が必要。

他方、幸せになるためにあるはずの学校で、ピアスやスカート丈や髪型で退学になるようなことが起きている。

今は過渡期にあり、そんな新しい価値観で新しい学校の文化を作っていくフェーズにあるのではないかな。

Bグループ『小中高一貫校（のイメージ）』

(杉島、金田、福井、鳥居)

縦のつながり =

発達段階に応じた学校間の連携があることが理想

人生 100 年時代の中で私たちが関わることはできるのは短い期間。その時々、横がつながること、そしてそれが縦につながることが大事。

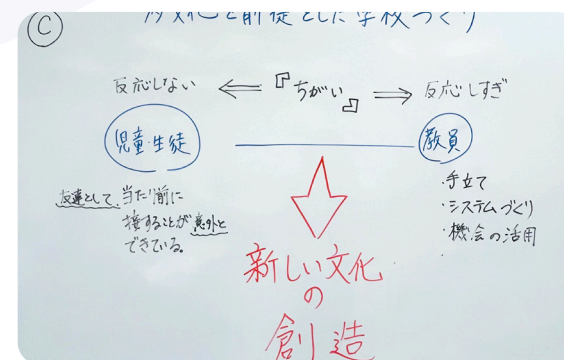
小学校：地域のママ友づくり、外国につながる保護者に向けた「パパママ相談会」という入学相談やサポートをする。

中学校：学校内で母国の紹介をしたり ICT でつなげたりして、相手を大切に思う文化を育てていく。週替わり、日替わり給食などいろんな文化を知る機会をつくる。



Cグループ『多文化を前提とした学校づくり』

(大塚、大森、生田目、中村)



「ちがい」というものを児童生徒は普通に受け入れているけど、教員が過剰に反応してしまうことがある。

まずは児童生徒も教員も、違うことは当たり前、と認識することが大切。

多文化が当たり前になっている、いろんなルーツの児童生徒がいることが当たり前になっている状況。将来的にいろんな地域でそのようになっていくのではないかな。

教員が「素材」に対してどういう「システム」をつくっていくのか、気づくきっかけづくりをする。児童生徒と協働しながら、新しい文化の創造につながるのではないか。

D グループ『みんなのためのコミュニティ』

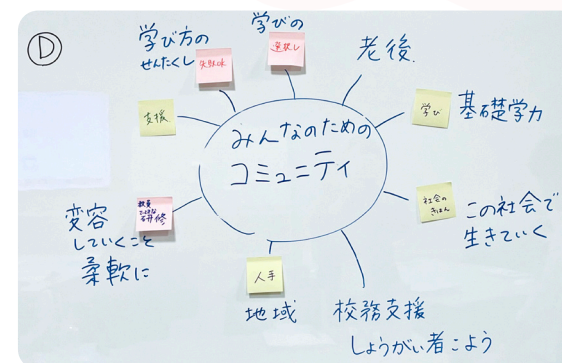
(綾部、植木、江川、沖)

子どもが中心ではあるが、みんなが輝く場が「学校」（他の名前があってもいい）

学びの選択肢、学び方の選択肢がある。失敗しても繰り返し学ぶことができる。

個別最適というが、好きなことだけを学べば良いではなく、子どもたちに伝えていくべきことを精査する必要がある。

教える立場にある教員も、研修会などやさしい日本語を学んだりする場があるとよい。



Eグループ『地域・学校・教職員みんなで！』

(阿部、沓木、島、糸数)



みんなが様々なことに興味を持ち、自分ごととして捉えることができる

毎日を楽しみ、平和についての学ぶ機会がある

自分の考えや文化を大切にし、お互い認め合い、違いを楽しむマインド

先生たちも言いたいことを自由に言い合えるような雰囲気

学校が地域とつながりっている

自分らしく あなたらしく ～互いを知り、尊重し合うつながりを通して～

杉島 亜紀 深川市立一已小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：299名 外国につながる児童 / 生徒数：0 名（全体の 0%）

学校背景



基幹産業は農業。恵まれた気象環境条件のもと、道内有数の稲作地帯にある中規模校の学校。市の人口減少に伴う移住者サポート体制を整備しており、道内の他、道外からの移住者もいる。児童数も減少傾向にはあるが、年に数名の転入生を迎えており、現在の学級数を維持できている。

現在の課題



海外にルーツを持つ児童がほとんどいないため、海外を身近に感じる機会が少ない。オーストラリア出身の ALT は、週に 2 回外国語の授業で児童と接している。授業の中でも海外の食事や習慣等について紹介したり、ハロウィン等のイベントを通して海外の文化を紹介したりしている。

現在の取り組み



多文化共生の教育としてカリキュラムの中に位置づけて行っていない。しかし、学活や道徳、生徒指導を中心とした日常の学校生活の中で教職員が行っている教育は多文化共生の教育の素地を培うものとなっていると感じる。多文化は、海外のみならず日本の中にも存在しており、学校においても、子ども一人一人が背景を持ち、個々の文化を持っていると捉えると学級の中にも多文化が存在していると考えることができる。自身と異なる考えにどう対処するか、少数意見をどう捉えていくかなど、今後、対話についての研修の中で教職員と共に考えていきたい。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか

自分にとって	学校にとって	世界・社会にとって
子どもたちが人との繋がりの中で「自分」も「他者」も大切にすることが大切だと感じているため	一人一人が自己有用感を持ち、仲間と協働して課題を解決する社会の基盤を構築するため	互いを尊重し合い、未来をより良くするために共創する社会への担い手が必要であるから

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

【理由】

ICT が発達し続けている現代。未来は、オンラインや対面を含め、世界中の多様な人と協働する場面が更に増えることが想像される。自身の考えを持ち、相手に伝える力や相手の立場になって考える力が求められる。互いを知り、理解を深めることで、新たな価値が生まれ、創造性豊かな社会になると考えるため。

【学びや気づき】

一人ひとりにはルーツ（背景）があり、相手の背景を知ることが大切であるということ。相手が何を望んでいるか、何について困り感を持っているかについて、対話を通して共有すること。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

- ・ お互いを尊重し合い、対話を通して課題を解決したり、協働的に新たな価値を創造したりすることが楽しいと感じる人々であふれる社会
- ・ 個々が当事者意識を持ち、相手と対等な立場で考え行動できる人間関係を構築することで、一人一人の Well-being が仲間との Well-being に広がっていく社会



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイディア

1. 偏見や差別、無意識のバイアスをなくす取り組み

現在、自校で取り組んでいる「ピア・サポート」を基盤とし、アサーショントレーニングや構成的グループ・エンカウンターエクササイズ等に充実させ、一人一人の意識を高める。

2. 世界の異文化への知識を深める取り組み

児童玄関や階段など、子どもたちの目に触れやすい場所に各国の国旗や世界地図、世界の挨拶の言葉などを掲示し、子どもたちが多文化共生について意識を向ける仕掛けづくりを行う。また、調べてみたくなるようなクイズや豆知識を盛り込み、子どもたちが 1 人一台端末を使ってクイズの答えをフォームに入力するなど、楽しみながら参加できる工夫をする。学級担任や教科担任と連携し、家庭学習等で取り組めるようなお題を提示したり、各教科の学びに結びつく探究学習のヒントを示すなど、学校での学びが社会（世界）とつながっていることを認識し、比較したり視点を変えて考えることができる段階まで展開したい。

3. 日本の歴史や文化について学ぶ取り組み

エジプトにおける特別活動を中心とした日本式教育を導入した取り組みから、日本の文化や日本の教育について考える。なぜエジプトは日本式教育を取り入れたのか。日本の教育の良さとは何かについて、子ども自身が考えるきっかけとしたい。加えて、自身が 2022 年度 JICA 教師海外研修に参加しエジプトの方々から学んだことをもとに授業を組み立て、上記 2 と関連した取り組みをすすめる。「正解、不正解はないこと」や「相手を理解する気持ち」を育みたい

4. 互いの違いを認め合い、尊重し合う姿勢を持つ取り組み

各教科のカリキュラムにおいて多文化共生や国際理解教育に関係のある単元を洗い出し、外部機関と連携し、多角的な視点から思考する工夫をする。例えば、食料に関する学習に取り組む際、食料自給率や輸入輸出の割合などを日本からの視点で読み取ったり考察したりすることに加え、青年海外協力隊経験者等の外部人材を活用し、フェアトレードについてや、海外から見た日本についての話を聞くことで子供たちにとって新たな視点が加わることを期待する。日本から見た視点と海外から見た視点の違いについて理解し、互いに win – win になる関係づくりについて考える人材を育成していきたい。

5. 地域の多様性を尊重する社会づくりを理解する取り組み

先日、市内においてタウンミーティングが開催された。学生の対象範囲は中学生や高校生であったが、当日話し合われた 2 つのテーマ「どんなまち？」「こんなまちにしたい！！」について、小学校内でも学活の時間などを活用して、同上のテーマについて学級内で意見交流し、実際のミーティング記録を参照に自自治体の良さや地域の方の願いなどを知り、自分のまちの未来について考える取り組みを行う。また、特色ある農業学習に関するカリキュラムを見直し、地域おこし協力隊と連携した地域の魅力発信活動などにつなげていきたい。また、学校の空き教室を「地域カフェ」として開放したり、修学時前の親子が集う場所を提供したり等、様々な方が気軽に来やすい学校づくりをすることも大切なことではないかと考える。

地域の中に学校が存在する。地域と共に子供を支える教育活動を行い、子供の視野を広げる。異世代交流や地域との交流を通して、未来の自分や社会について考え、今、自分ができることを探究する深い学びへと展開していきたい。

学校全体として取り組む場合、管理職として多様性をどうマネジメントするかの視点も常に意識していきたい。今回の研修で多様な人々と共に創っていくという社会参画のプロセスを大切にすることを痛感した。多文化共生は「外国と日本の関わり」という視点だけではなく、「どのような社会を共に築いていくか」という視点が重要だと考える。マジョリティとマイノリティの間において、当事者意識を持って課題を共有すること、共に課題を解決する手立てを考えることができる人材を教職員や地域、保護者とともに育んでいきたい。



外部機関との連携

地域学校協働本部	放課後に児童が地域の方と触れ合える場所を設置。例えば、公民館などに日常的に囲碁や将棋ができる場所を設定し、地域の方向士が将棋をしている中に下校後の小学生が参加して一緒に将棋をするなど。
学校運営協議会	学校教育目標の実現のために、地域と学校が子どもを育むために必要なことやできることについて熟議を重ねる。
読み聞かせボランティア	日本の本だけでなく、海外の絵本をその国の言葉で読み聞かせる。また、海外在住、もしくは留学経験等ある方によるその国の言葉でオンライン読み聞かせも取り入れたい。
JICA 北海道	テーマを決め、海外協力隊の方の話を聞いたり、対話を通して様々な国における文化を知る。子どもたちにとって身近な物のルーツを調べ、その国の特徴や日本とのつながりについて学ぶ。
図書館司書	児童の学習内容に合わせ、関連する本を市立図書館から選書してもらう等の活動を通して、インターネット以外での情報入手法を知り、様々な情報を適切に処理する力を養う。
JA きたそらち	農業体験の他、物流についても話を伺い、地元の生産物を通して日本や海外の食料事情について学ぶ。

日常の中で育む「多文化共生の文化」

綾部 美希 さいたま市立新開小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：270名 外国につながる児童 / 生徒数：10名（全体の約3%）

学校背景



各学年2学級（3学年のみ単学級）の小規模校であるが、中国やベトナムなどアジア圏を中心に、外国につながる児童が各学年に約2～3人在籍している。多くの児童は日本語を流暢に話し、学校生活に馴染んでいるが、日本語でのコミュニケーションに困難を抱えている児童も一定数いるため、校内で日本語指導を受けている。

現在の課題



上記の外国につながる児童は、集団の中にうまく溶け込んでいるように思われる。学級担任や他の教職員も、日本語でのコミュニケーションが難しい児童に対しては翻訳機能を使うなど、臨機応変に対応している。そのため、日頃外国につながる児童が特別扱いされたり、集団の中で浮いてしまったりする状況はほとんど見られない。理想的な形のように見えるが、その反面、自分のルーツや友だちの出身国など多様性や多文化に目を向けられる児童は少なく、アイデンティティや他者意識が低いように感じられる。

現在の取り組み



G・S（英語）及び探究的な学習の授業を活用し、外国の食べ物や学校生活について調べて発表する活動を行っている。児童は1年生から英語の授業を受けているため、英語に慣れ親しむことができている。また、ALT との関わりも活発で、日ごろから英語で挨拶を交わし、休み時間に簡単なやりとりをしている。さらに、機をみて、司書教諭に外国の食文化に関する本や多言語の絵本を購入してもらうなどして、多文化に触れるきっかけづくりを行っている。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

今の自分は、自分の価値観や経験による自分のものさしに頼ってしまうことが多いと感じている。そうではなく、関わる人一人の背景や思いなど目に見えないことにも思いを馳せ、共生できる人になりたいから。



学校にとって

無知は偏見や差別を生むと考える。自分の当たり前は他者にとって当たり前でないことに気づかせ、日ごろから多様な視点で物事を考えるきっかけを与える場である必要があるから。



世界・社会にとって

成熟した社会において、また、変化が絶えない世の中で、「多文化共生の文化」を育むことは人が新たな価値観を持つことにつながり、それが社会の変容につながると考えるから。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

(1)「多文化共生の文化」＝「国際理解」ではない。

本研修に参加前の私は、「多文化共生の文化」について国際理解教育や異文化理解の枠組みの中でのみ考えていた。具体的には、海外にルーツを持つ人が日本社会や学校の中で上手く順応する方法は何か、無意識にマジョリティの中のマイノリティ（外国人）にのみ目を向けていた。確かに、異国の文化を知ることは「多文化共生の文化」を育む第一歩であると考えているが、参加者との対話を通して、「多文化共生の文化」に対する自分の考えが大きく広がった。「多文化」とは、国籍の違いを表すのではなく、一人一人の多様なバックグラウンド（人生や考え方）を表す。つまり、日本人同士であっても引っ越しや異動などを通して、多文化を経験することがある。外国人という特定のマイノリティが主語ではなく、多様な一人一人がどうすれば共生できるのか考え、対話することが「多文化共生の文化」の醸成につながるのではないかと、考える。

(2)「多文化共生の文化」づくりのための種まきは日常の中でできる。

第一回研修後の出勤時、いつもと同じはずの風景が少し違って見えたのをよく覚えている。普段は図書室の本棚の中にある G・S の授業で取り扱った海外の食文化に関する本の配置場所、中国にルーツを持つ「あの子」との関わり方など、「もう少し工夫すれば子どもたちが異文化に触れる機会が増え、何かに気がつくきっかけになるのではないか？」と今まで気にも留めていなかったことに目が向くようになった。授業で

扱った本は、一定期間コーナーをつくり、置いておくことで、子どもの視界に入りやすくなり、学びの持続になるかもしれない。また、いつも日本語が英語でしか話しかけていなかった外国籍の児童に母国語で挨拶してみると、話をするきっかけが生まれた。どちらも些細なことであるが、特別なことをしなくても、小さな積み重ねが「多文化共生の文化」をつくるきっかけになると身をもって感じた。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

次の3つのキーワードから「多文化共生の文化」を創りたい。

(1) 居場所づくり

日常のどこかに、自己開示できる居場所があること。否定されず、「自分はここにいていいんだ。」と思える場所が誰にとっても必要だと思う。

(2) 自分らしく あなたらしく

他者を大切にするには、まず自分を知り、大切にできることが必要だと考える。自分にとって譲れないポイントは何か、大切にしたいことは何か、まず自己理解をする。そのうえで他者を知ることが自分らしく あなたらしくの対等な関係を築くことにつながるのではないか。

(3) 対等な関係

違い＝どちらかが優れている（正しい）・劣っている（正しくない）ではないことを認識する。違いを優劣で考えるのではなく、互いの考えやその背景を知ろうとする意識・態度に変える。

学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

(1) 小5G・S科×探究学習：「Welcome to the world」における授業実践（実践済）

場面・状況：世界の国の料理について調べ、フードフェスティバルに出店しよう！

目的：英語でのやり取りを通して、世界には様々な食材や料理があることを知る。

- ・料理のみでなく、国によって食べ方が異なることやその文化的背景に気づく。

単元の学習内容・児童の反応等

時数	学習内容	児童の反応・授業での気づき等
1	単元について知ろう。 好きな食べ物は何か？クイズにしよう！ Hint1: It' s from (国). Hint2: It' s (味). Hint3: It has (材料) .	自分の好きな食べ物をクイズにするという導入が効果を発揮し、英語が苦手な児童も意欲的に授業に参加する様子が見られた。この段階では日本食もクイズにしていよかったが、外国の食べ物を選ぶ児童が多く、少し驚いた。
2	友達のクイズに答えよう！	日本ではあまり馴染みのない料理や給食で食べたことのある外国の料理をクイズにしていた児童も多く、国や地域それぞれに食文化があることに気がつくことができた。
3	ALTの国の料理を知ろう 世界の食べ物かるたに挑戦しよう	児童はALTが紹介するナイジェリアの料理 fufu and egusi soup に大変興味を持っていた。「実際に食べてみたい！」という声が多く聞こえた。手で食べると聞き、驚く児童も多かった。
4	出店したい国と食べ物を決め、調べよう	児童が選んだ国は中国・韓国・イタリア・フランス・スイス・スウェーデン・カナダ・ニュージーランド・ブラジル・アルゼンチン・セントビンセントおよびグレナディーン諸島等、多岐にわたった。
5	国別班になり、メニュー表をつくろう1	同じ国を選んだ児童同士で班になり、メイン料理や飲み物、デザートなど分担してメニュー表をつくった。 同じ国を選んだ児童がいない場合は、インターナショナルグループでまとめた。
6	国別班になり、メニュー表をつくろう2	
7	料理の魅力を伝える練習をしよう 美味しい食べ方を知ろう	第3時において、手で食べることに様々な反応があったため、「手で食べる？」の本で読み聞かせを行い、その文化的背景や理由をみんなで考えた。読み聞かせ後は食材の質や文化が違うから食べ方も違うことを理解することができた。
8	お客さんに料理の紹介をしよう 食べ方も伝えよう	出店する料理を英語で紹介することができた。初めて見る料理もあり、興味をもって友達の発表を聞くことができていた。
9	価格を英語で伝えられるようになろう	日本円での練習を基本としたが、国によって通貨が違うことも知ることができた。
10	フードフェスティバルに出店し、買い物しよう	調べた国の言葉で挨拶をするなど、工夫しながらやりとりができた。

(2) G・Sの授業×栄養教諭のコラボ企画：世界の国の料理を給食で提供（計画中）

現在、ALTの出身国であるナイジェリアの fufu and egusi soup の提供を計画している。実際に4・5年生のG・Sの授業で料理の味や材料、食べ方を紹介してもらった。多くの児童が興味を示していたのと同時に、手で食べることや見慣れない食材に抵抗感を持つ児童もいた。単なる試食会にするのではなく、料理の材料や食べ方、おすすめポイントを伝えるなど、児童に新たな気づきを与えられるように工夫する。昼食時の放送を活用し、ALTにあらためて料理の紹介をしてもらおうと考えている。食べ方の多様性を伝える手立てとしては、上記授業実践例第7時の「手で食べる？」の読み聞かせが大変効果的であった。なぜ手で食べるのか？手で食べる＝遅れているのか？日本でも手で食べる料理はあるか？発問や日本文化との比較から違いの背景を考え、「多文化」の感覚が身につくことを期待している。

(3) 多文化にふれられる環境整備（継続）

- ・世界の言語・文化の絵本紹介
- ・図書室やG・Sルームに多言語・文化コーナーを設置する。先日司書教諭より中国語の絵本を預かった。世界には英語のみでなく、様々な言語と文化が共存していることに気づき、より多くの児童に興味をもってもらいたい。

外部機関との連携

JICA 横浜・ライブラリの活用	学校図書館だけでは得られない本や教材、情報を活用したい。
日本語指導員との連携	日本語指導員に話(外国籍の児童が学習している内容や児童の気持ち、各学級でできることなど)を聞き、日ごろの児童との関わりや指導に活かす。
大学や海外の学校との連携	実際に、児童より、G・Sで習ったことを生かし、英語で様々な国の人と交流してみたいという声が届いた。今後大学や海外の学校と提携し、英語を用いた国際交流も行いたい。

違いをたのしむ、気持ちによりそう。

植木 凡子 白百合学園小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：702 名 外国につながる児童 / 生徒数：5 名（全体の 0.7%）

学校背景



少数在籍している外国籍の児童、保護者のどちらも言語面での疎通に困ることはない状況である。学習意識が高いことや生活環境において2カ国の世界観があるので、感覚的な視野は広いように感じている。また、保護者の海外勤務により、転出する児童もいるが現地校、日本人学校の選択は、赴任地の状況や家庭の方針によってさまざまである。保護者の方は、私立学校ならではの“建学の精神”に根ざした教育を求めて入学されるため、児童の生活環境としては、同じような価値感を持ったご家庭の子女が多いと考えている。

現在の課題



- ・多文化を「国籍の違う方」との共生と考えると、学校の中では、感覚的に感じられる機会は多くない。
- ・児童労働や児童の権利条約、難民、世界平和と言った社会問題から考えると、高学年の総合や外国語で触れることはある。しかし、小学生としてできる活動範囲や、学年を横断して継続して考える時間、他者との共有の場を持つところまでは十分に時間を確保できていないと感じている。
- ・立ち居振る舞いや衣食住をはじめとした暮らし、生活様式、価値観など、人と人との生活にかかわることからみると、フランス語での「味覚の授業」、英語も合わせ2カ国語でお祈りをしたり、歌ったりと国による違いを感じる授業は行われている。しかし、開発途上国やアジア諸国の文化や歴史、日本国内の地域による言語や文化の違いについては、具体的に触れられていない現状である。

現在の取り組み



- ・建学の精神にもとづいた教育。キリスト教の精神に根ざした価値感を養い、神と人の前に誠実に歩み、愛の心をもって社会に奉仕できる女性の育成を目指す中で、「他者によりそう心」「一人ひとりを大切にすること」を大切にしている。
- ・フランス語と英語、2カ国語の言語活動からも、子どもたちが世界に目を向けて考えるきっかけ、自然に多文化に触れたり、比較したりする楽しさを感じている。
- ・コロナ禍のオンライン授業をきっかけに、場所が離れていても、時間と空間を共有して授業を行うことができるようになった。総合や外国語など、各教科の学習の中で共通する言語の学校と交流を図ったり、ゲストティーチャーを招いて実際にお話を聞く機会をもうけたり、掃除や仲良し会など、異学年で交流する時間も大切にしている。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

予測不能な社会の中では、隣の人も多文化である。違いを受容することが大切だと思っ
ていても、その問題に真剣に向き合ったり、
理解したりすることが難しくなっている。だ
からこそ自分自身が、あたりまえだと思っ
ていたことを疑いつつ、問題を多角的な視点
でみるが必要だと感じている。自分が考
えたことを他者と話しながら、明確にしたり、
変容させたりしていきたい。



学校にとって

小さな社会、さまざまな人が集う場所だか
らこそ、日常の生活を通して自分の思いを“言
葉”や“行動”で表し、責任を学べる場だ
とだと思う。
教科の学びを、世界や地域社会に結びつけ
ることで、新しい気づきや深い学びにつなが
るのではないか。
開かれた学校として環境に多文化を組み込
むことで、自然と自己の内なる多様性に目を
向けることにつながっていくと考えた。



世界・社会にとって

自分とは遠く離れた世界のことでなく、
いかにジブンゴトとして受け止めて、答えの
ない間に向き合っていくことができるか。
様々な文化を知ろう、わかっていくことで、
自分の文化をさらに深く理解することができ
ると考えている。
互いを思いやり、尊重することから、“誰
一人取り残さない”世界を強く意識すること
ができると思う。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

見える部分と、見えない部分で文化を捉える。

見える部分：音楽、文学、言葉、ダンス、絵画、居住、料理

見えない部分：意識、アイコンタクト、意志決定方式、表情、親子関係、教師と生徒の関係、間の取り方、職業観、友情についての観念、時間の感覚、空間の取り方、マネージメントの方法、問題解決の方法、子育ての方法、価値感

多言語の限界

相手によって言葉は変わる。人をつなぐ言葉＝やさしい日本語

文化は歴史を知ってこそより深まる。

地域で多文化共生をささえる（在留外国人や地域への支援）

- ・人と人をつなぐ（地域や学びの場におけるつながり）
- ・相互理解を深める（お互いの国の文化、国際的な課題への理解を深める）
- ・外国人が活躍する（各分野で外国人が社会参加し活躍する環境づくり）

*循環づくり、Win-Win の関係

学校外の施設も活用しながらだれ一人取り残さない支援

様々なところと繋がって、巻き込んでいく、言語よりも視覚が有効、やさしい日本語“あたりまえ”を疑う。

多様性を尊重する意識の醸成

環境に多文化を組み込むことで自然と育まれていく。非常に個人的な問題であることに留意し、均一にマニュアル化して取り扱うのではなく、個々に応じた配慮、人間性を高めていくことが必要である。授業なのか、場づくりなのか？学校という枠を外して考えると新しい仕組みが見えてくる。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

- ・隣の人も多文化、無意識の思い込みを少なくしていく。
- ・自分の思いをみんなで語り合い、違いやズレをたのしめる文化
- ・一人ひとりが「どんな自分になりたいか」夢を思いえがけて、笑顔で生活できる社会。
- ・同調摩擦ですり減るのではなく、個と個が研磨して磨かれ、よりよい形、“新しい文化”を創造していける社会。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

「授業なのか、場づくりなのか」というモヤモヤした気持ちと、「他者への想像力と共感力」を基に①授業②日常③遊びをポイントにアイデアを作成した。また、「多言語の限界」というキーワードから“言葉”に注目した。

■ 授業①図画工作

『わんだふるワーク！？』～しゃべらないでプロジェクトを達成しよう！～

準備するもの：言葉カード（グループ分）、材料（紙コップ、画用紙、洗濯ばさみ、ペットボトルキャップなど廃材や安価で大量に手に入るもの）

・グループで1枚「言葉カード」（犬、猫、カエル、ひよこ、ゴリラ…）を引く。

・言葉カードの言語のみ話してよいという条件で、プロジェクトに挑戦する。

・活動例：紙コップ「高くつむ」。ペットボトルキャップで「夢の島」。洗濯バサミで「うねうね」など、オノマトペを使用したり、学齢にあわせてなるべくシンプルなものが多い。

図画工作科「造形遊び」の活動に非言語で取り組む。自分の中にあるイメージ（発想や構想したもの）を身振り手振り、表情で伝え合うことの難しさの中で、みんなで工夫してよいものが生まれたときの達成感を味わうことがねらいである。たとえ達成できなかったとしても、上手いかなかった学びを経験としていかせるように指導していく。



■ 授業②図画工作

『ことばに色がある？』 ～7色の虹のことば～

準備するもの：絵の具（自分で色がつくれるように個人持ちがよい）、画用紙、筆ペン（筆記用具）※ ICT 機器のお絵かきツールを活用することもできる。

参考図書を拝読したときに、「言葉と色と自分」を組み合わせた図工の授業ができないかと考えた。

本の中では、カメルーンから日本に「水」の勉強に来日した主人公のお父さんが、ホームステイで交流した家族や仲間から「7色の宝物のことば」を見つける。例えば6年生の新学期や、卒業を控えた3学期など、自分を表す「7色の虹のことば」と題して

- ①自分を漢字7文字で表す。
- ②その漢字の読みと意味を考える。
- ③7つの言葉を色で表す。
- ④互いに見合う。

多文化共生の文化では、様々な違いに触れる中で、自己を再認識していくことが重要だと考える。“自己理解”“自己変容”も大切にしていきたい。

参考図書：作・上斗米正子 画・佐藤泰生、『ハルくんの虹』遊行社、2022、(ISBN 978- 902443 -62-2C0798)



日常（地域）連携【五感でつながる多文化】

準備するもの：様々な国の食品や日用品、例）スパイス、器、生地、香、楽器など

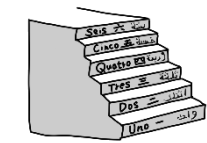
「ワールドファッションショー」チテング、タータン、絞り染め、ろうけつ染めなど特色あるファブリック身にまといその国に思いをはせる。布の入手や加工が難しい場合は、特色ある模様を画用紙に印刷することもできる。紙だと身にまとった感触は体験できないが、小学生でも造形しやすいという利点もある。

「きき調味料」味噌や醤油、ターメリック、ガラムマサラ、ココナッツミルクなど匂いから味や原料、世界を想像する。

- ・「鳴らして・踊って！」さまざまな国の楽器やリズムに触れてから
A) リズムに合った踊りをグループで創作する。
B) 「歓迎」「喜び」「豊穡」「狩猟」などのテーマを出してグループで鳴らしてみる。日本では、地域のお祭りなども素材になるだろう。

視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚など外界につながる感覚は様々である。美術・工芸品では、視覚を始点に聴覚、嗅覚、味覚、触覚に意識をむけて鑑賞することで、世界や人に思いを馳せ、想像をふくらませ、より深く理解するきっかけになる。このような活動を通して、他者との違いを楽しみ、共感的に受け止め合える心を共に育みたい。

- ・「世界の“ありがとう”」様々な国のありがとうを日常で使える機会をたくさんつくる。（プリント配り、給食係、助けてもらったときなど。）
- ・ 階段に各国の数字の数え方を表示しておく。



遊び【だるまさんが…はいポーズ！】

だるまさん、オニは「だるまさんがころんだ」と言いながら、このフレーズを言い終わった後に振り向き「止まったときのポーズやゼスチャーのお題を出す」例）笑った。泣いた。眠くなった。踊った。その間に他の子はオニに向かって進んでいるが、オニが振り返った瞬間に出されたポーズができていないと負け。オニに気づかれずに近づきタッチできたら勝ちとなる。イラストカードを頭上に掲げるのもよい。ゼスチャーだけでなく、様々な国の挨拶、数字なども遊びが広がるかもしれない。



遊び【まんぷくゲーム】

世界や日本のさまざまな食べ物のカードを用意しておく。（カード表：食べ物の写真、裏には食べられる国、食べ方、味どんな風に採れるのかななどの情報が書かれている）

- ・ 問題を出す方は、言葉を使わずにゼスチャーで問題を出す。
- ・ ゼスチャーのポイントは、「食べ物を見たり持ったときの様子」「匂い嗅いだり味わったりしたときの顔」「食べ方」など。
- ・ 学校のクラス対抗で行い、優秀クラスの希望が給食の献立になったら意欲や団結力があがる。



外部機関との連携

美術館	「教育普及担当」、「美術館ボランティア」との交流。他者対話的に鑑賞すること。（オンラインでの鑑賞授業と、出張講座、鑑賞カードの貸し出しと形態はさまざま） →正解がない問いに、想像力を広げて自分の思いを他者と共有する時間を大切にしたい。 →外部の方、保護者の方と一緒に鑑賞したり、活動したりする時間がとれるとよい。
JICA 国際協力出前講座	①開発途上国の現状、日本とのつながりを知ること。 ②国際協力の意義、必要性について理解すること。 ③自分達にできることを考え、自発的に行動するきっかけになること（対面型出張講座と途上国と学校 / 教室を Zoom でつなぐオンライン出前講座がある。） →顔をみて直接お話を聴く機会、温度のある言葉を大切にしたい。
アンコンシャスバイアス研究所	自分の中に「無意識の思い込み」があることに気づき、その壁を低く取り払うように意識していきたい。

自分を大切に、周りも大切にする“兵大っ子”

中村 寛子 神戸市立兵庫大開小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：550名 外国につながる児童 / 生徒数：約60名（全体の10%）

学校背景



外国につながる児童が9ヶ国・地域、約60人在籍し、そのうち半数以上が中国ルーツの児童である。その中には毎年、新渡日の児童もいるが、日本生まれ、日本育ちの児童が多い。校内にJSL教室があり、29名が取り出しでの日本語指導を受けている。

現在の課題



- ・ クラスの4分の1が中国ルーツの児童がいる学級もあり、国際理解や日本語指導を学級経営、教科指導に取り入れていけるよう、全職員に共通理解すること。
- ・ 「できない」ではなく、「できる」に着眼するように、意識を変えること。「日本語ができない、支援が必要な児童」という側面だけでなく、「〇〇語も話せる。多文化を持つ児童。」として、プラスの意識を全校生や全職員に共通理解すること。

現在の取り組み

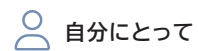


- ・ 1年生の国際理解授業「友達の国、中国を知ろう」、全学年で国際理解授業「ちがう、わからないを体験しよう」を行う。
- ・ 全学年の国際理解力を育む年間計画のカリキュラムマネジメント
- ・ 「神戸市×JICA 関西 国際教育」連携を活用し、協力隊OVや留学生を授業のゲストティーチャーに呼ぶ。
- ・ 休み時間に、多文化児童60名が自由参加する集い「地球っ子タイム」を月1回行い、日本の文化やそれぞれの国・地域の文化に触れる機会を設ける。
- ・ 始業式、終業式での多言語アナウンス



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

周りの人とコミュニケーションをとる中で、新しいことや違うことを知る楽しさ。「～ができない」ではなく、「～もできる」と捉えるためには、相互の理解が必要。相手を知ることによって自分を見つめ直すきっかけにもなる。



学校にとって

特別支援教育・日本語指導・不登校など、多様な支援を必要としている児童が多い。また、担任もその対応に困っている。保護者には本校出身者も多く、多文化児童が将来、この地域で安心して過ごし、地域の一員として活躍できるようにするため。



世界・社会にとって

外国人労働者の力なしには成り立たない現在、日本が受け入れる国として選んでもらえる優しい / 易しい社会になっているか。グローバル化、多様化が進む中で、様々な価値観を受け入れることが必要とされている。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

- ・ ユツカの会の中さん、当事者の内田さんのお話を聞き、学校のみでなく、卒業後も日本社会で生きていく一員として、地域とのつながりをつくる大切さを感じた。学校内での学びだけでなく、その子の一生を通して関わってくれる存在を早く、一人でも多くつくる必要がある。
- ・ 海外移住資料館を見学し、かつて日本から移民として数多くの人々が海外に生活の地を求めた背景やその歴史を知ること、今後も多くの外国人労働者を受け入れる日本社会の多文化共生のヒントとなるものがあることが分かった。どのように自分たちのコミュニティを築いていったのか、現地社会に溶け込めるように活動した点などが、非常に参考になると感じた。また、日本人コミュニティの始まりが県人会からだという点も興味深かった。同じ言葉や文化を持つ地域単位でのつながりを大切にできるように、地域学習にも力を入れていきたい。
- ・ 研修中のワークショップを通して、相手の意見を受け止めて理解しようとする雰囲気があると、プラスに返すことができ、一人一人が安心して発言ができる。そうすれば意見交流も活発になり、結果としてより良いものが出来上がってくことを体感した。そのためのファシリテーターの役割りを校内で行いたいと感じた。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

「一人が大切にされること」

そのためには、その人の背景を理解して一人一人の多様さを受け入れる。そうすることで、自分とは何者かを臆することなく相手に伝え、自己実現を可能にすることができる。周りを大切にすることで、自分の大切さも感じ、自尊感情を高められるようにしたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

校内での多文化共生の授業づくり

全学年の国際理解力を育む年間計画のカリキュラムマネジメントを「国際理解教育×〇〇科」としてブラッシュアップする。国際理解授業「ちがう、わからないを体験しよう」をブラッシュアップする。教材を汎用性のあるものにし、どの教員でも実践しやすくする。その中の1つとして、ワークショップ「世界がもし100人の村だったら」の地域バージョンを作成する。地域、校内の外国につながる児童の数、国・地域別の数、母語として話す言葉の数など、100人村のワークショップ形式で行い、地域の特性を知り、国語科「よりよい社会づくり」、社会科の地域学習につなげる。

世界の書初め

休み時間に、多文化児童60名が自由参加する集い「地球っ子タイム」を月1回行い、日本の文化やそれぞれの国・地域の文化に触れる機会を設けているが、そこで、12月は母語／継承語での書初めを行う。一人ひとりが書く題字を、母語サポーターや保護者と相談して決めることで、母語／継承語に触れる機会とし、アイデンティティ確立の一助としたい。仕上がった作品を全校書初め展期間中に、「世界の書初め」として展示することで、校内や保護者にも地域に住む多文化児童の存在と可能性を知ってもらおうきっかけとしたい。

校内研修、校内の掲示物、保護者へのお便りの作成

職員会で毎月、国際理解／多文化共生についてのミニ研修コーナーを取り入れる。新着任の職員に国際理解授業「ちがう、わからないを体験しよう」の授業を行うことで、日本語指導を必要とする児童の困り感を体験し、その必要性に気づいてもらう。また、「地球っ子タイム」での取り組みを掲示物にして全校生に紹介したり、対象児童へのみ配付している「地球っ子だより」を、全家庭に配付する。



外部機関との連携

- ・ 週1回のJSL教室に来てくださる講師の先生方との情報共有を密に行う。
- ・ 進路指導や将来の自己実現につなげるためにも、JSL教室の講師、母語サポーターと連携して、地域団体へ積極的につなぎ、卒業後の伴走者を増やす。
- ・ 「国際理解／多文化共生×〇〇科」の授業を組む際に、JICA 関西と連携して、教材を活用したり、ゲストティーチャーを依頼したりする。

「つながり 分かち合う」多文化共生 ～共創のファシリテーターとしての学校教育～

橋本 有人 京都市立小野小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：406 名 外国につながる児童 / 生徒数：2 名（全体の 0.5％）

学校背景



小野小町ゆかりの地、随心院を校区に持つ、古くからの交通の要所山科にある中規模校。ネパール国籍の児童が1名。フィリピンにルーツを持つ児童が1名。他の児童については把握できていない。校区内に京都朝鮮初級学校があるが交流はない。地域にアジア圏の方が働いている場所が多くあるようで、校区内を頻繁に行き来する姿が見られる。

現在の課題



週に1回1時間、兼務の日本語指導の先生がフィリピンにルーツを持つ児童の指導を行なってくださっているが、時間が十分ではなく、保護者への支援体制も十分には整えることができていない。

人権教育としての国際理解教育や外国人教育等の授業は単発での授業となりがちで、多文化共生に関わる内容にはほぼ取り組めていない。5年生の総合的な学習の時間に国際理解に関する単元を計画し、日本人学校やJICA 海外協力隊員との交流等を進めているが、毎年の調整が困難で、安定したカリキュラムでの活動となっていない。

現在の取り組み



- 5年生の総合的な学習の時間において、国際理解を一つの柱として探究活動を進めている。日本人学校、JICA 海外協力隊員との交流、京都市国際交流協会の留学生派遣を利用した交流を進めている。

- 7年前に取り組んだ、ウクライナとの折り鶴交換プロジェクト「ピースウィング」の取り組みを紹介し、当時交換した折り鶴の展示等、「国際理解コーナー」を設置している。

- 京都橘大学のサークル HOPE と共同で、カンボジアの学校への寄付活動を実施し、寄付した物品が贈呈される様子などをまとめたオリジナルの絵本を作成し、図書室に配架している。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか

自分にとって	学校にとって	世界・社会にとって
すべての人の持つ背景や文化が異なることを考えると、人とのつながりの中で生きていくには、絶対に必要な考え方であるため。	外国籍の児童、保護者への支援はもちろん、今後さらに多様性に富む社会の中で活躍する児童・生徒を育む必要があるため。	飽和状態にある現代の世界・社会が新しいフェーズに入る際の、過去と多様な価値観を網羅するための新しい核となる考え方が必要となるため。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

研修を受ける前は、「多文化共生＝国際理解教育」であると考えており、自身の日本人学校での経験や、京都市国際教育研究会・グローバルキッズ研究会で学んできたことをさらに発展する機会となれば良いと考えて参加した。しかし、海外移住資料館で知った移民の方々の存在や、横浜市国際交流協会、ユッカの会の皆さんの取り組み、参加者のみなさんとの共創の活動の中で、多文化共生とは、国際理解教育の目的の一つである「世界の人々が国を越えて理解し合い、協力をする」といったことだけだけが目的ではないと、これまでの自分の考え方を覆される学びがあった。そもそも国際理解教育にも「相互理解」「双方の違いを理解し、相手を尊重する」「自己確立と他者受容による共生と行動できる力の育成」といった前提となる目的があり、本研修を受講することで、自分が見落としていたそれらの目的がより重要になることに気づくことができた。これまで学校で人権教育として扱っていた内容や、身近な隣人との関わり方、ひいては自分自身の生き方など、全てに多文化共生は関係しているということに気づくことができた。

世界中で起きている争いの元となっている宗教、信条による違い、民主主義や資本主義などの主義、主張による違い、あまりに多岐にわたる多様性の中で飽和、成熟した現代の世界・社会において、人とのつながりの中で生きていくためには過去や歴史を網羅した新しい核となる考え方が必要であり、それが多文化共生の考え方ではないかと考えるに至った。さらに、そのことについて考える機会を与えることができる教育の意義と、そのカリキュラムの再構成が必要なのではないかと「多文化共生の文化を共創する学校・コミュニティとは」の講演を聞いて、あらためて考えるようになった。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

身近な人を思いやり、目の前にいない人でも、その背景や心情を慮ることが当たり前になれる社会、感情を共に分かち合う文化。過去や歴史、人権感覚と言われているものをさらに研ぎ澄ませて、世界中の様々な人々の考えや思いを再構成し、これから私たちと次の世代が文化の域まで高めていきたい。教育に関わる者の一人として、人の喜びも悲しみも共に分かち合えることの尊さを、子ども達と共有できる環境を整え、より良い未来を子ども達と育みたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイディア

教頭としてカリキュラム再編、校内環境整備、外部との連携、保護者・地域との連携を通して、「多文化共生の文化」を広げたいと考えた。学校教育が「多文化共生」を共創していくファシリテーターとしての役割を果たすことができるように、今できることを検討し、行動していることを以下に列挙する。

1. 現在、在籍する外国籍、外国とつながりのある児童への支援の見直し

- 児童の見取り
再度、教室での活動の様子、日本語学習での学びの様子などを確認し、児童の困りや児童の思いをしっかりと捉え直す。
- 保護者の思いや背景を知る 担任との協力
担任に任せている部分が多かった保護者との連絡や連携に学校体制で取り組む。次年度以降に確実に引き継ぐデータを整理し、児童の進路や国籍の取得への保護者の考え等を聞き取り、継続して支援できる体制をつくる。

2. 多文化共生について考える校内環境の整備

- 国際理解教育の総合的な学習の時間への安定したカリキュラム化
日本人学校との交流、JICA 海外派遣隊員との交流を2つの柱として進めるカリキュラムであったが、日本人学校との調整や、派遣隊員の紹介が困難なこともあったため、京都市国際交流会館の留学生による授業の利用も進めて3本柱とし、毎年その中から選択して安定した授業計画が組めるように再設定する。
- 教職員向けの研修 資料提供
「やさしい日本語」の研修などを通して、誰にとっても読みやすくなりやすい文書作りを進めるなど、教職員が自分事として捉え、取り組みやすい多文化共生に関わる研修を進める。
- 外国、人権に関わる絵本・本の紹介
学校司書と連携して、国語科や社会科、総合的な学習の時間の単元に合わせて、外国に関連する絵本や書籍のコーナーを設置する。また、現在図書委員会の児童が行っている読み聞かせや、縦割りグループでの読み聞かせなどでも外国の本や人権に関わる本や、今起きている社会問題について書かれた新聞などを扱う機会を設ける。
- 国際理解コーナー から「多文化共生コーナー」への変更と充実
現在正面玄関に設置している「国際理解コーナー」の展示物を充実させ、人権や、世界の諸問題について興味をもてる幅広い内容に変更したい。また毎月の朝会での紹介や、児童が手に取れるような図書や教具などを新たに設置する。

3. 外部機関との連携

- 各国の日本人学校
Zoom などでの交流を行う際に時差が問題となり、交流できるエリアが限定されることで、交流先が児童の希望に添えないことが多かった。今後はリアルタイムだけにこだわらず Teams での動画共有などを活用し、できるだけ児童の思いに寄り添った交流の工夫を続けていく。
- JICA 関西、京都市国際交流協会との外部連携
JICA 海外協力隊員の紹介や児童との交流幹旋、新たな国際理解教育のアイディアを得る場としての連携を深め、修学旅行の工程に JICA 関西訪問を入れることを検討したい。また、京都市国際交流協会とは、国際理解プログラム（PICNIK）による留学生の自国の文化紹介などを通した国際理解教育の授業や取り組みを進めるために連携を続けていきたい。

4. 他校、他校種との外部連携

- 大学
様々なサークル団体やボランティア団体、教育学部の学生と連携し、児童の視野を広げることのできるボランティアや取り組みへの共同参加や、授業交流などを行える大学を今後も積極的に探していきたい。

- 中学校、高等学校
多文化共生に関わる生徒たちの学びを小学校で発表してもらう場を提供し、相互に学び合うための連携を行いたい。また、海外への留学コースのある高校については、留学をした高校生にその体験などを生徒達に話してもらう機会なども作りたい。
- 地域の朝鮮初級学校との連携
校区内にある強みを生かして、交流を進めていきたい。

5. 人権教育の改編

- 「多文化共生教育」の新設
現行の人権教育「同和教育」「国際理解教育」「男女平等教育」「外国人教育」の4つの柱の内、「外国人教育」を再編し「多文化共生教育」とし、民族的な差別問題などの歴史認識も大切にしつつ、社会的な諸問題を内包した取り組みや指導ができるようにする。また、小学生の発達段階でもわかるマイノリティについて考える授業を計画し、共生について考える取り組みを実践したい。

6. 保護者への意識づけと連携強化

- 人権参観後の保護者向けワークショップの企画
毎年12月の人権月間に合わせて実施する人権に関する授業参観、懇談会では、懇談会への保護者出席率が大変低く、例年保護者へのアプローチの方法が問題となっている。そのため、体育館などを利用して複数学年で保護者と児童が共に学べるワークショップ(百人村ワークショップ)を実施し、保護者の参加を促しつつ、人権（多文化共生）について学ぶハードルを下げる取り組みを実施したい。また、「やさしい日本語」での文書作成を実践し、保護者にも多文化共生の意識を持っていただく機会としたい。

7. 地域への意識づけと連携強化

- 自治連合会や自主防災会との連携
毎年実施している小野まつりや区民運動会、総合防災訓練など地域の方が集まる機会に、多文化共生に関する簡単なマニュアルの作成や多言語での案内プリント作成等を提案し、学校から意識づけを広げていきたい。また、将来的には総合的な学習の時間で、児童もそのような取り組みに関わる機会を設け、地域と児童の関係を強化できるお手伝いがしたい。

外部機関との連携

京都市国際教育・グローバルキッズ研究会	小・中・高の枠を超えて集う、国際理解を通して児童・生徒の国際協調・貢献の精神を育むことを目的とした研究会。校種連携と国際教育を学ぶ場として参加し、その中で得た取り組みを自校で積極的に実践していきたい。
京都海外子女教育・国際理解教育研究会	日本人学校に派遣された経験を持つ教員が多数在籍している研究会。現派遣教員の紹介を通して、日本人学校と本校児童との交流を安定して実施するためにさらに連携を深めたい。
京都市国際交流協会	京都で学ぶ留学生が多数登録されており、国際理解プログラム（PICNIK）を小学校向けに提供している協会。留学生の自国の文化紹介などを通した国際理解教育の授業や取り組みを進めるために連携を続けていきたい。
JICA 関西	総合的な学習の時間の単元に位置付けられた国際理解教育を進めるための、JICA 海外協力隊員の紹介や児童との交流斡旋、新たな国際理解教育のアイデアを得る場としての連携を深めたい。
京都橘大学	徒歩圏内にある京都の私立大学で学生ボランティアなどが本校にも複数名、関わってくれている。様々なサークル団体やボランティア団体、発達教育学部の学生と連携し、児童の視野を広げることのできるボランティアや取り組みへの共同参加、授業交流などを行いたい。
立命館宇治高等学校	宇治市にある立命館大学の付属校。国際色豊かなカリキュラムや活動を実践しておられ、今年度11月にLGBTQ +に関わる授業を本校3年生向けに高校生が実践。これを機会に連携を強化し、今後、立命館宇治高等学校へ通う各国の留学生や留学体験をした生徒による経験を話してもらう場を設定し、児童の国際理解教育とキャリア教育を進める予定。
京都朝鮮初級学校	これまでに交流は無いが、校区内にあるという強みを生かして、児童間の交流や地域理解の促進のために連携を深めたい。

多文化共生の学校づくりをめざして
～日本語教室がファシリテーター的役割を果たすために～

鳥居 里美 鹿児島市立名山小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：328名 外国につながる児童 / 生徒数：11 名（全体の 3.4％）

学校背景



本校は、県内唯一の日本語教室が設置されている小学校である。平成2年に設置されて以来、他の地域や学校に設置されることなく、現在に至っている。本年度は、本校在籍児童が11名、市内の他の小学校に在籍し、訪問指導を受けている児童が7名いる。本県は、外国ルーツの児童生徒が散在しているため、日本語教室に通級できず、在籍する学校頼りになっている現状がある。そのため離島を含め、外国ルーツの児童生徒への対応に苦慮している学校からの問い合わせも多い。

現在の課題



「外国ルーツの児童・保護者の対応は、日本語教室の教師に任せる」という校内の風潮がある。しかし、外国ルーツの児童・保護者にとって、学級での居場所づくり、担任との関係づくりがとても大切である。学級の友達と共に学習し、自分の思いや考えを母語や習得したレベルの日本語でアウトプットできる学級づくりが必要である。「やさしい日本語」や図や絵を用いた視覚的に配慮した手立ては、外国ルーツの児童だけでなく、特別支援の児童等、全ての児童の学びにつながるのだと言える。日本語が分からないから「参加できない」から「参加させていこう」へ、「理解できない」から「理解できる手立てをとっていこう」へ・・・教師の意識を少し変えるだけで、外国ルーツの児童も一人の学習者として自立できるようになっていくと思われる。

現在の取り組み



日本語教室の教師が主となり、「日本語教室入級式・世界と友だち」という行事を毎年4月に実施している。本校全校児童と日本語教室の児童・保護者の交流の場である。毎年、市教委をはじめ地域の関係諸機関からも来賓を招いている。日本語教室の児童は、母語や日本語で自己紹介や母国のクイズを出し、本校全児童と交流する。昨年度末、私が神奈川県教育委員会と JICA 横浜の企画で受講したオンライン講義からヒントを得て、本年度は新たな試みを行った。それは、中国ルーツの保護者の力を借り、流暢な中国語で簡単な算数の授業を行ったことである。1年生レベルのたし算の問題であったが、中国語で話されると何が何だか分からない。外国ルーツの児童が、日頃学級で感じている状況を全校児童だけでなく教職員にも実感してもらった。日本語ができなくても、母国で積み上げてきた学習能力のある外国ルーツの児童もいる。こうした児童の能力をいかに引き出し、彼らの自信につなげてあげられるかが課題である。

その他、6月にお楽しみ会、10月に遠足、3月に修了式を日本語教室の教師が主となり、企画・実施をしている。日本文化の理解や、母国の文化を紹介し合える内容を毎年企画している。遠足では、鹿児島市内の各所にバスで出向き、日頃は体験できない活動をファミリーで体験できるようにしている。鹿児島ならではの、そうめん流し体験、秋の味覚の収穫体験は人気である。いずれの行事も、日本語教室の児童だけでなく、ファミリー同士の交流も大きな目的の一つとしている。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

自分と対話をする中で、そもそも自分のルーツも現在居住している鹿児島はないし、自分自身も多様な存在と気づいた。出生地や文化の違いにとらわれずに、自分も他者も大切にできる感覚を常に持続するため。



学校にとって

様々な背景をもつ子どもたちが共に学ぶ学校で、子どもと保護者が安心できる居場所をつくるため。誰もが自分の思いや考えを堂々と言え、自分の未来を切り拓けるようにするため。



世界・社会にとって

一人一人が、自分の当たり前を疑い、違いにだけ着目せずに地域社会の中で対等な関係で共に生きていくため。見えない部分の文化を互いに理解し、尊重していくため。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

今回の一番の研修成果は、「自分との対話」、「他者との対話」、「地域との対話」の大切さに気づいたことだ。いつも「対話」は大切にしているつもりだった。しかし、どこか凝り固まった考えを捨てきれず、バイアスにとらわれていた自分を振り返ることができた。

まず、「自分との対話」は、今の自分は何ができて、何に課題を抱いていて、それをどのようにしたいのか？ ということを常に問いかけていくことが大切だ。

「他者との対話」は、具体的には自分が日頃接している日本語教室の児童やその保護者である。何気ない朝のあいさつや、学校生活の中で見かける表情からも対話はできる。外国ルーツの児童や保護者がぶつかる「壁」（ことば・文化・制度）に寄り添うためには、日常の対話は欠かすことができない。

次に、学校は地域あって存在するものだ。「地域との対話」は、今の日本語教室は本当にできているのであろうか。県内唯一の日本語教室が設置されている学校にも関わらず、私が赴任してきた3年前は地域とのつながりはほとんどなかった。一步一步ではあるが、この3年で地域の関係諸機関と連携することができ始めている。「地域との対話」は、外国ルーツの児童生徒、保護者へのサポートの可能性を広げることができる。学校だけでは限界があることも、地域と活動を共にし、サポート体制を幅広くすることで、多様な活動や考えを再構築できる。地域にサポートしてもらえることは、地域の力を借りる。これは、昨今注視されている教員の働き方改革にもつながるのではないだろうか。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

それぞれが、自分の思いや考えを対話し合い、「ともに」学び、「ともに」楽しむ

考えや価値観の違う人と出会ったら、前向きな姿勢で向き合う。お互いの違いから「ともに」学び、その違いを「ともに」楽しむことから、新しい価値が生まれる。自分のルーツ、母語や母国の文化を大切にしながら、年齢や国籍、性別にかかわらず、誰もが自分の思いや考えを伝え合える社会を創りたい。そうすることによって、お互いの思いが再構築されたり、見えないものを知ろうとする文化が生まれたりして、社会が変容していくのではないか。

学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

P31 参照

外部機関との連携

鹿児島市教育委員会	本校の日本語教室は市教委管轄のもと、運営されている。担当指導主事と連携を密にして、研修や行事を進めている。今後も授業実践の共有や運営を進めていく中で、新たなプロジェクトや試みを提案できる関係づくりを構築していく。
鹿児島県総合教育センター	年に一度、本校を会場に「日本語教育」の短期研修を実施している。授業提供や事例発表を行っている。今後は「多文化共生の文化」の推進をこの研修に参加される先生方と一緒に考える時間を設けられたらと考える。
鹿児島市国際交流財団、鹿児島県国際交流協会、鹿児島大学等の地域の大学生	地域で活動する人材とのつながりや、学生によるボランティア活動をサポートしつつ、学校とのつながりや児童・保護者とのつながりに結びつけていきたい。

創りたい多文化共生文化とは？！

地域とつながり、地域と「ともに」多文化共生を共創するために・・・
～それぞれが、自分の思いや考えを対話し合い、「ともに」学び、「ともに」楽しむ～

【既存の取り組み】

- KEEP（続けること）
 - ・ 目の前の子どもの対話
⇒どんなことに困っていて、どんなことを考えているのか
＝見えないものを知ろうとする。
 - ・ 学力の定着
⇒一人の学習者として自立させてあげるための手立て
 - ・ 保護者とのつながり
 - ・ 日本の社会、学校について不明なことを明らかにしてあげられるように説明する。
 - ・ 交流イベントや行事
⇒県内唯一の日本語教室のある小学校として、積極的な地域とのかかわりを持つ。
 - ・ 校内で他の先生とのコラボ（読書・給食指導等）

- IMPROVE（改善すること）
 - ・ 日本語教室の体制⇒もっと地域とのつながりを広げる。
 - ・ 日本語教室担当教員の配置・育成
 - ・ 校内の教員、管理職の意識（全体的に）
 - ・ 人権教育とのつながり

- STOP（やめること）
 - ・ 今までの古い資料の全保管、保存⇒紙媒体の不要な資料を精査しながら保管か廃棄＝既存の体制ややり方にばかりとられない。
 - ・ 「日本語教室は日本語を教える場所」という今までの概念⇒日本語だけを教えるところではない。
＝「国際教室」という呼称変更へ
＝ダイバーシティを促進

【これから取り組みたいアイデア・地域連携】

- START（はじめること）
 - ・ 思想的な変容のために
「ことばの壁」だけでなく、「文化の壁」に寄り添う。学校生活にかかわる様々な違いの存在を、「決まり」だからといって、無条件に日本の（鹿児島島の）やり方に合わせるべきでない。「制度利用の壁」とは何かを理解する。「子どもの権利条約」内にある、子どもの最善の利益（子どもにとって最もよいこと）や国際人権規約（A 規約）を教育現場の教員がもっと理解を深められるような研修を実施する。
⇒「多文化共生」は、外国ルーツの児童生徒のためだけでなく、全ての教育場面に通じている。

- ・ 自分自身の置かれている立場でできる変容

- ・ 「拓かれた名山小学校日本語教室へ」
⇒名山小学校内にある日本語教室がどのような授業をしているのか、地域の方々に気軽に参観してもらう。必要であれば、事例発表や日本語指導方法の支援を積極的に行う。

- ・ 「頑張りすぎない地域の巻き込み方を」
⇒地域と学校で支援していこうという雰囲気づくり

- ・ 「多文化共生文化を学校から発信するために」
⇒日々の日本語教室の授業実践と研究
⇒地域へのタネまきづくり
⇒「前例がない」「分からない」を楽しむ自分、「見えないものを知ろう」とする自分、学校（名山小学校日本語教室）がファシリテーター的役割を担えるようになりたい。ダイバーシティ教員へ

【現状】

鹿児島市は多文化共生推進指針（R6 ～8年度）を策定しているが、学校現場にはそれが浸透していない。県内唯一の日本語教室としての役割はこのままでいいのか。⇒担当教員の配置・育成
×日本語を教えるだけの教員でない。外国語が得意なだけの教員ではない。⇒認識違いを正したい。

多文化共生 × 沖縄移民

系数 真弓 沖縄市立中の町小学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：397 名 外国につながる児童 / 生徒数：10 名（全体の 2%）

学校背景



外国につながる児童は、10名程度である。近隣に米軍基地があるため、軍属の児童がほとんどである。基地と隣り合わせの環境にあるため、外国人向けの飲食店が多い。町中を歩いていても、外国の方と出会う機会が多い。

現在の課題



多文化共生について知っている教職員は、ほとんどいないが、何気なく普段実践していることが多文化共生につながっているのではないかと感じる。多文化について学ぶ機会があれば、意識して多文化の視点を取り入れた授業実践ができるのではないと思う。

児童に関しては、自分と違う意見の「折り合いの付け方」、「少数意見にも耳を傾けること」に課題がある。異文化理解や多文化共生の教育実践を通して、違いを楽しんだり、面白さを感じたりして、多様な人々と共生できるようにしていきたい。

現在の取り組み



外国とつながりのある児童は、ほとんどいないため、多文化共生の教育は行っていない。しかし、校内研修で、話し合い活動（特別活動）を通して、自分と違う意見に対する「折り合いの付け方」や容易に多数決にならずに、「少数意見にも耳を傾ける」ための授業改善を行っている。多文化共生のための素地づくりの取り組みを行っている。

私自身は、JICA 教師海外研修でブラジルへ派遣して頂いてからは、沖縄移民を題材にした多文化共生教育、平和学習などを、総合的な学習の時間を中心に、他教科と関連させながら実施している。今後は、校内 OJT を活用して、多文化共生についての学びの機会をつくってきたい。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

多文化の視点を学び続けることで、自分とは異なる視点に面白さを感じたり、受け入れたりすることで、変容し続ける自分でありたいから。



学校にとって

自他国の文化を学ぶことで、互いの文化を大切に感じることができるから。また、価値観の違うお友達と協力したり、仲良くしたりする力がますます必要になってくるから。



世界・社会にとって

多様性の時代において、自分とは異なる価値を持つ他者と、互いに助け合うことで、新しい発想や解決策が生まれるから。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

① 海外移住資料館の見学を通して

移民者が、異なる文化の中で、互いに助け合い、たくましく生きていく姿を改めて知ることができた。これまで取り組んできた沖縄移民の学習をブラッシュアップしたいと考えていたので、施設案内をして下さった三浦紗季さんの解説や問いかけが授業や教材づくりのヒントとなった。特に、パスポートや移民トランクは、沖縄移民バージョンで、教材づくりをしてみたいと思った。

② 多文化共生の学校づくりの講話をお聞きして

多文化共生を実現するための具体的な取り組みを拝聴できた。国語の学習からつないだ多言語読み聞かせ、運動会の聖火リレー、保護者や地域を巻き込んだお料理教室や文化体験など、どれも楽しく異文化を学べる実践から、「だれでも、楽しく」学ぶことが、多文化共生の学校づくりを推進することに大切だと感じた。

③ 全国の先生方と関わりを通して

多様な視点から意見交流をする中で、これまでの実践に新たな視点や刺激を頂けた。何よりも、相手の意見に耳を傾ける姿勢やテーマに対する意見のまとめ方は、大変勉強になった。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

私がつくりたい多文化共生の文化は、考え方や価値が異なる相手と出会ったら、前向きな姿勢で向き合い、違いを楽しんで、対話を重ねながら新しい価値をつくりだすことだと考える。そのためにはまず、自分の文化を大切に感じたり、誇りに感じたりすることから始まるのではないと思う。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

「どれくらいの人が、いつ、どこへ何のために移民したのか？海外での生活はどうだったのか？」「言語や文化の違いをどう乗り越えたのか？」多文化共生のために、わたしができることはなんだろう？・・・」問いをつなげた授業展開をし、沖縄移民の歴史学習を通して、ユイマール（助け合い）の精神文化を基調として多文化共生を実現してきたことを学ばせたい。

意識すること

- ☆「楽しい」「身近（地域）なもの」をベースにした、教材・授業づくりを心掛ける（主体的）
- ☆「対話のツール」を授業の中でしかけ、多様な考えに触れていく（対話的）
- ☆自他国の文化をポジティブに捉えられる発問を心がける（深い学び）

1. 「世界が100人の沖縄移民なら・・・」

100 人村のワークを通して、世界のどこに、どれだけ沖縄の人が移民したかを理解する。また、移民先の写真を見て、現地の文化と馴染みながら、自分たちの文化を大切に生活していることを知る。（JOCA 沖縄による出前講座）



JOCA 沖縄によるワークショップ



放課後三線教室（ポリビア）

2. 「はてな？をつくらう」

ワークを基に、もっと調べてみたいことをグループで考える。

なぜ沖縄の人は、たくさん移民したのかな？

なぜブラジルへの移民が多いのかな？

移民先にどんなものを持っていたのかな？

どんな仕事についていたのかな？

どんなふうに会話したのかな？

どれくらい移民するのか？

移民して何を沖縄に持ち帰るのかな？



問いづくりに取り組む生徒たち

3. 「なぜ移民したの？」 社会科「海外移民の父 當山久三」

伝記の読み聞かせ後、アニメーションでクイズを出題。その後、実際に子どもたちもクイズづくりを行う。その後、総合の時間で移民年表づくりをグループで行う。

ボリビアに「オキナワ」とつく地名がある、○か×か？

正解は○

コロニア・オキナワと呼ばれる場所がある



沖縄の人は、何を合言葉に言葉や差別の壁を乗り越えた？

①命どう宝
②ひやさっさ〜
③なんくるないさ〜
④いちゃりばちょーでー



正解④
兄弟のように助け合い、ゆいまーるの心を大切にしていたそうです。

子どもたちが実際につくったクイズ

4. 「移民先でのお仕事は？」

対話ツール「えんたくん」を使ったワールドカフェとフォトランゲージで、移民先でのお仕事を理解する。



5. 「移民先に何を持っていく？」

クイズ！何を持って行ったでしょう？を通して、移民者が、仕事や趣味など自分にとって大切な物を持って行ったことを知り、自分だったら何を持っていくか考える。沖縄の人は、三線、空手着など文化交流できそうなものを持って行った方が多かった。（JICA 沖縄図書資料室より参照）

わたしは、何を持っていったでしょう？



わたしの仕事は、農業です。農業で成功して沖縄に送金するために、ブラジルへ行きました。



わたしは、何を持って行ったでしょう？

わたしの三線を持っていきました。文化交流をすることができます。



沖縄の文化の素晴らしさを伝えることができました。

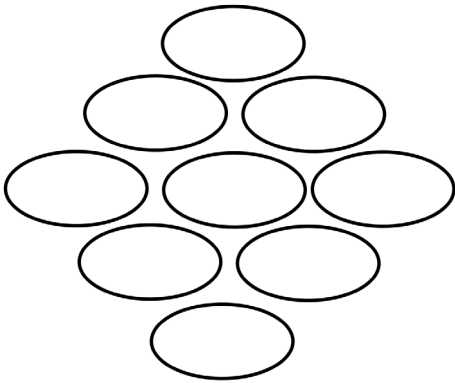
児童が考えた「何を持っていく？」クイズ

6. 「体験記」

いくつかの体験記を読み、その人になりきって日記またはお手紙を書く。移民者へ思いを馳せてみる。また、困難な環境下にあっても乗り越えていった共通点を考えてみる。

7. 「ダイヤモンドランキング」で 自分にできる多文化共生を考える。

- A 沖縄市の国際交流フェスティバルに参加してみる。
- B おうちの人と多文化共生について話してみる。
- C 身近な所にいる国籍の違う人とお友達になる。
- D 自分の文化に誇りを持ち、学んでみる。
- E ALT の先生にインタビューする。
- F 外国人に対して、差別的な行いをした人を注意する。
- G インターネットで外国のことを調べ学習する。
- H 言葉や生活習慣で困っている人を助けるボランティアをする。
- I その他（ ）



8. 「移民パスポート」

海外移住資料館よりヒントを得て、自作中。学習ワークシートをパスポート風にし、学習の足跡が残せるようにしたい。

外部機関との連携

JICA 沖縄、JOCA 沖縄、JICA 沖縄図書資料室、ウチナーネットワークコンシェルジュ

- ・ 出前講座
- ・ 施設見学
- ・ 多文化共生における授業プランの相談
- ・ 沖縄移民の教材、民族衣装の貸借
- ・ ゲストスピーカーの相談

多文化共生の文化を授業を通して伝えるアイデア

上野 真理 相模原市立旭中学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：813 名 外国につながる児童 / 生徒数：10 名（全体の 1.23％）

学校背景



商業施設が数多くある市街地に位置している。また、近辺には企業も多くあるため親の仕事の都合による生徒の転出入が少数だが頻繁にある。全体的に外国につながる生徒数は際立って多くはないが、親と子で話す言語が異なり、親子のコミュニケーションに困難を抱えるような生徒も所属している。

現在の課題



生徒一人一人の個性を尊重した教育活動を丁寧に行っているため、不登校生徒や、支援級に所属する生徒などに関しても充実したきめ細やかな支援をしている。そのため、「外国にルーツを持つ生徒」に対する支援も不登校生徒に対する支援の枠組みとして捉えると、すでに支援できる体制が整っている。そのため、教師自身が「やさしい日本語」や地域の「国際教室」の存在を知り、支援の方法の幅を広げていけるような機会が必要かもしれない。多文化共生社会を考えることは、外国籍の生徒のみならず、日本国籍の生徒にとっても大切な学びであるという認識を持てるようになると、様々な生徒がそれぞれの力をさらに発揮できる学校になると考える。

現在の取り組み



本校では道徳や英語、社会の単元に設定されている教材をもとに、多文化共生の文化を学習する機会が確保されている。また、少数ではあるが身近に外国にルーツを持つ仲間がいることもあり、日本以外の文化があるということも生徒は微々たるものだが体感している。しかし、フィリピンやペルー、メキシコなど仲間のルーツに関して慣れ親しみ、深く学べる実践的な取り組みがあると良いかもしれない。生徒もそうだが教員も多文化共生の文化について知り、学ぶ機会があれば、一人一人の考えの幅が広がり、共に生きることが何か、それぞれの思いを持つことができるのではないかと考える。国際情勢や戦争、紛争、難民や多言語を必要とする環境に関しては、日本という土地の中に住んでいると身近に感じる機会が今現在には少ない。だからこそリアリティーのある取り組みができたら良いと考える。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

自分の当たり前や固定観念にとらわれず、リスペクトをもって相手のことを知ろうとする姿勢は、人とともに生きていくうえで大切な姿勢だと考えるから。



学校にとって

多国籍化が少しずつだが学校の中でも広がってきている。相手のことを決めつけずに、対話をもってお互いのことを知っていく必要があると考えるから。



世界・社会にとって

人やモノの移動が地球規模で頻繁に行われている。宗教や言葉、文化の違いで争いが起きないように、お互いを知ること、生かす合うことが今後、さらに重要と考えるから。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

「外国人（労働者、留学生など）＝トラブルを生む人たち」という捉え方に、モヤモヤするものがあった。外国人による犯罪に関しても全く無いというわけでもなく、「外国人＝トラブルメーカー＝怖い＝排除したい」という気持ちになる人があることも理解できる。また、難民や不法滞在というキーワードも同じように考えさせられるものがある。「日本は日本人のものだから、日本の国益は日本人が享受できなければならない」ということも、間違いではないと私は考える。だが、日本人とは、何をもって日本人と判断するのがとても繊細なところだと思う。ここが、これからの日本社会がどう豊かになっていくかのポイントなのかもしれない。研修の中で、「少子高齢化社会の日本において、外国人労働者の必要性」について考えた。今の状況を見ると、これからは、徐々に外国籍の方たちが日本の経済を支えていく仲間になるのではないと思う。国籍にとらわれず、「同じ場所で暮らす仲間」として、お互いにお互いをリスペクトし、それぞれの文化の対立で終わらずに済むように、「対話」を重ねていく必要がある。JICA 横浜の海外移住資料館において、1900 年代初頭、アメリカにおいて日本人排斥運動があったことは、大きな気づきであった。排除するのは人間の本能なのかもしれないが、排除するだけでは、不幸を生むだけなのではないかと考える。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

日本人、中国人、というような「〇〇人」という一つの捉え方にとらわれることなく、個人と向き合い対話を重ねることで理解を進めていける環境をつくり上げていく。そうするためには、日本以外の場所からやってきた人も同じく、この日本という環境で育まれてきた文化や人に理解を示していくという努力も必要になってくる。お互いにとって譲れない大切な信条というものを否定し拒否するのではなく、共に生きていくための折衷案を出していくことで、新しい価値観を両方で育み対話を続けた先に多文化共生の文化が実っていくのではないかと考える。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

多文化共生の文化のための魅力的な活動はたくさんある。新しい取り組みを単体で入れることはとても理想的だが、授業時間数の兼ね合いも考慮し、無理なく、負担なく多文化共生の文化の学びを、今現在実施している校内の教育活動の中に組み込めないか考えてみた。そこで、私自身が英語科教員だという点を生かし、それぞれの単元に「多文化共生の文化」の視点を入れてみようと考えた。

以下は、研修を通して考えた授業案である。この単元は、中学1年生の不定詞である。2学期に学習する文法項目であり、ここで、多文化共生の視点を授業と絡めながら自然に組み込めないか考えてみた。

【第1学年英語科 指導案】

単元名：Unit9 Think Globally, Act Locally, Story 2 (New Horizon 1) ねらい： ①したいことや、する必要のあることについて説明したり、尋ねたりすることができる。 ②自分の行きたい国を1つ選び、そこで何をしたいのかを、ペアでやり取りができる。 ③さまざまな国の文化（祭り、食事、服装、芸術、スポーツ）などを知り、多文化について触れる。 ④となり町の日系ブラジル人の方たちを通して身の回りにもある多文化に気づく。			
	教師の動き	生徒の動き	留意点
導入 10 分	・ スライドで次の写真を見せる（クイズ形式） フランス…モナリザ（芸術） 中国…万里の長城（歴史的建造物） アメリカ…野球（スポーツ） イタリア…ピザ（食事） ブラジル…リオのカーニバル（祭り） ロモサルタード（食事）	・ 教師が見せるスライドを見て、クイズに答える。	・ 教師の質問に、生徒が英語で答えるように促す。 ・ 生徒との対話を大切にする。 ・ ブラジルのクイズのセクションでは、愛川町のサポールラティーノ（お店）を取り上げる。
展開 35 分	・ 例を取って練習する（5分） 例：フランス I want to go to France. I want to see the Mona Liza. ・ 自分の行きたい国について英作文をさせる。（20分） ・ 隣町の「サポールラティーノ愛川」の店主のビデオメッセージを見せる（10 分）	・ 不定詞を使って、教師が提示した例に沿って「したいこと」を英語で表現する ・ 行きたい国とそこの国の文化を調べ、英作する。 ・ 日系ブラジル人の方のビデオメッセージを見る	・ フランスを例にとり、生徒に英語で言わせる。また、例はスライドで見せる。 ・ PC を使わせる 早めに英作ができた生徒は、スライドで使う写真などをネットで用意する。 ・ 同じ地域に住む日系ブラジル人を通してブラジルについて知る
まとめ 5 分	・ 次回の発表についての連絡	・ 発表のための準備についての話を聞く	

I want to go to Brazil.

I want to eat Lomo Saltado.



生徒が作成するスライドの例

「将来英語は使わない」「日本から出ない」という言葉を使う生徒は少なくなったような気はするが、「実際に自分の日常に英語が必要になる。（そのほかの言葉が必要になるかもしれない）」と大人に言われれば「そうかもしれない」と考えるが、「たぶん必要ないだろう」と考える生徒が多い。生徒の親世代になるとなおのこと「英語は分からないから」「外国には行かないから（関係ない）」と考える人もまだまだいる。

また、同じ外国だとしても欧米とアジア諸国や中東、中南米などの国々への理解と関心の度合いは、教員も生徒もまちまちである。「分からないから怖い」「外国、または、外国人は危ない」という経験不足からくる偏った考え方によって不要な摩擦が起きることもある。外国の人と話すには、ある程度、英語を知っていたほうが便利かと思うが、同じ日本という国で生活する者同士として「やさしい日本語」の国内での普及が多文化共生の文化をつくり上げていくときにお互いを理解し合うときのカギになると思う。

日本で暮らす仲間として多様な国籍を持つ人たちと手を取り合い新しい日本の文化が構築されるように、授業を通して生徒たちに様々な視点を伝えていきたい。

外部機関との連携

- ・ JICA 横浜の国際協力出前講座
- ・ 地域の大学の留学生との交流
- ・ 市内の夜間学級に所属する外国にルーツを持つ生徒との交流
- ・ 市内の国際交流ラウンジとの交流

「聴き」、「対話し」、「あらゆる変容を楽しむ」文化の実現に向けて

江川 由香里 平塚市立神田中学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：365 名 外国につながる児童 / 生徒数：20 名（全体の 5%）

学校背景



本校では、外国につながる生徒が20名程度おり、ルーツとしてはブラジルやボリビアなどの南米系、またフィリピンや中国などとなっている。平塚市は、工業を中心に栄えた地域であるため、労働者としてやってきた多くの外国人とその子どもたちが生活を送っており、地域には、そのような方々のコミュニティとして日本語教室も開設されている。

現在の課題



一部の国に対して負のイメージを持つ生徒が少なくない。国の印象が固定化されたままの生徒が、将来社会に出ていってしまうことを危惧している。そのため、どの国・地域においても、多面的で平等な視点を持って欲しいという思いがある。

また、「多文化共生の文化」について、他の教職員がどれほどの理解と関心を持っているのか、意見交換の機会や研修の機会をつくっていくことは、特に今年度、外国にルーツを持つ生徒が多く入学してきたことを踏まえると必要であると考えている。

現在の取り組み



【生徒に対しての取り組み】

- ・ 学習支援として、本人の希望教科・回数を踏まえ、教員による個別指導やTTTを行っている。また、市から派遣されている日本語指導員、ボランティアや大学生による学習支援を行っている。
- ・ ルビ付きのテスト問題を作成
- ・ 社会の授業の「国調べ」を通して、外国の文化を知る活動
- ・ ALT による英語の授業
- ・ 「国際理解・国際貢献」についての道德の授業
- ・ ポケットトークやクロムブックの音声翻訳機能の活用
- ・ 地域で開かれている日本語教室の案内を配布

【教職員に対しての取り組み】国際理解に関する人権研修

【保護者に対しての取り組み】三者面談や連絡の際に通訳を入れる



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

日本人である・ないに関わらず、生徒一人一人のこと、生徒たちにある文化を知り、理解することで、生徒皆が安心できる学校・クラスをつくっていききたい。そして、生徒の、他者に対する「思いやりの心」が育まれていくことを願っている。



学校にとって

学校単体で考えるのではなく、学校も地域の一員であるという考えのもと、地域と協力しながら生徒にとっても保護者にとっても安心した学校づくりをすること、また社会をつくっていくことが重要だと考える。



世界・社会にとって

人や国への攻撃、偏見が後を絶たない。「違い」にばかり目が向けられ、「共通点」や「思いやり」に目を向ける大切さが希薄になっていると感じる

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

- ・ 「多文化共生」と聞くと、外国にルーツを持つ人との共生をイメージしていたが、日本人であっても一人一人に、その人なりの文化があって、外国に限らないのだという視点に気づいた。どんな生徒であっても生徒理解は、多文化共生のための一つのステップなのだと気づくことができた。
- ・ 「やさしい日本語」への変換は、とても難しかったが、それと同時に、外国の方がこれを読んだら分からないだろうな、といったような相手の気持ちを想像することの大切さを学んだ。こういった取り組みを学校は積極的に取り入れ、生徒のみならず、保護者の方にも安心感を持ってもらう必要があると感じた。
- ・ 日系移民が現地でどのようにしてコミュニティをつくっていったのか、それは今日の在日外国人のコミュニティづくりに置き換えて考えることができた。自国の文化を継承しながらも、現地の生活を受け入れて生活していくことは、受け入れる側の「理解・協力」なしには成立しないと思った。学校現場に置き換えて考えてみても、受け入れる側の理解や様々な準備は、相手にとっての「置かれた環境を受け入れていく気持ち」の芽生えにつながり、だんだんと「多文化共生」が形成されていくのだと考えた。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

「聴き、対話し、あらゆる変容を楽しむ文化」

まず前提として、他者の思いや考えを知ろうという気持ちを大切にし、そのうえで対話を通して相手のことを実際に深く理解していくこと。また、社会や世界における様々な「変容」や、人々間の「違い」を、従来の価値観に固執せず、受け入れ、楽しむ（尊重する）姿勢を持つこと。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

1. 生徒に向けた取り組み

「多文化共生の文化」を創るために、日々の授業や校内環境からアプローチできるのではないかと考えた。

● 社会科の授業

はじめから「多文化共生の文化」に関する授業を行うのは難易度が高いため、「異文化理解」に関する授業を積み重ねていきたい。それは、外国に関係する内容に限らず、日本の文化やアイヌの文化など、様々な「文化」というものに意識して注目し、授業構想を立てる。また、構想を立てる際、自分事として考える「問い」や「課題設定」を盛り込むことが重要であり、それに対して生徒に何を考えさせたいのか、ということも加えて重要であると考え。

以下は、地理分野で行った授業（☆マーク）と授業で扱ってみたい問いや課題設定を簡単に示したものである。

帝国書院 第2部「世界のさまざまな地域」 第2章「世界の諸地域」	
アジア州	中央アジアや西アジアで起こっている紛争 ～私たちの生活にとってどのような意味があり、どう向き合っていったらよいのだろうか～
ヨーロッパ州（☆）	EU が抱える問題 ～自分がイギリス国民だったら、EU からの離脱に賛成するか・反対するか考えよう～
アフリカ州（☆）	アフリカが抱える問題 ～アフリカ州が今よりもよりよい地域となるために、どの課題から解決していくか考えよう～
北アメリカ州	多様な民族構成 ～多様な民族が集まったことは、地域にどのような特色をもたらしたのだろうか～
南アフリカ州	ブラジルに渡った日本人 ～「他国で生活をする」ということは、ということなのだろうか～
オセアニア州	多文化社会への歩み ～オーストラリアなどを例に、私たちは多文化共生に向けてどのような一歩を踏み出したいか～

● 総合の授業

自分たちが暮らす地域には、どのような人たちが共に暮らしているのだろうか。特に地域の「働く人」に注目をし、自分たちの身近なところにも「移民」がいることを自覚し、より良い地域・社会をつくっていくにはどうしたらよいのか、ということを考えさせたい。以下は、そのための総合学習の計画案を示したものである。

時限	学習内容
1	課題提起「私たちが暮らす地域には、どのような人たちが共に暮らしているのだろうか」 どんな仕事をしている人？ どんな国の人？ 若い人？ 高齢の人？
2	課題提起「地域にはどのような企業やお店、施設があるのだろうか」 実際に学校や家の周辺を歩き、地域にはどのような特色があるのか調べてみよう。
3	講演「地域で働く外国人」 外国の方を雇用している企業に依頼をし、「共生」という視点で講演をしていただき、そこからより良い地域・社会づくりのヒントを学ぶ。
4	校外学習「日本の移民の歴史について学ぼう」「多文化共生の町～横浜～」 JICA 横浜にある海外移住資料館を訪れ、日系移民について学習する。また、横浜の町を「多文化共生」の視点で歩き、よりよい地域・社会づくりのヒントを学ぶ。
5	課題提起「より住みやすい地域になるには」「どのような地域であってほしいか」 上記のようなテーマのもと、各自でレポートを作成する。

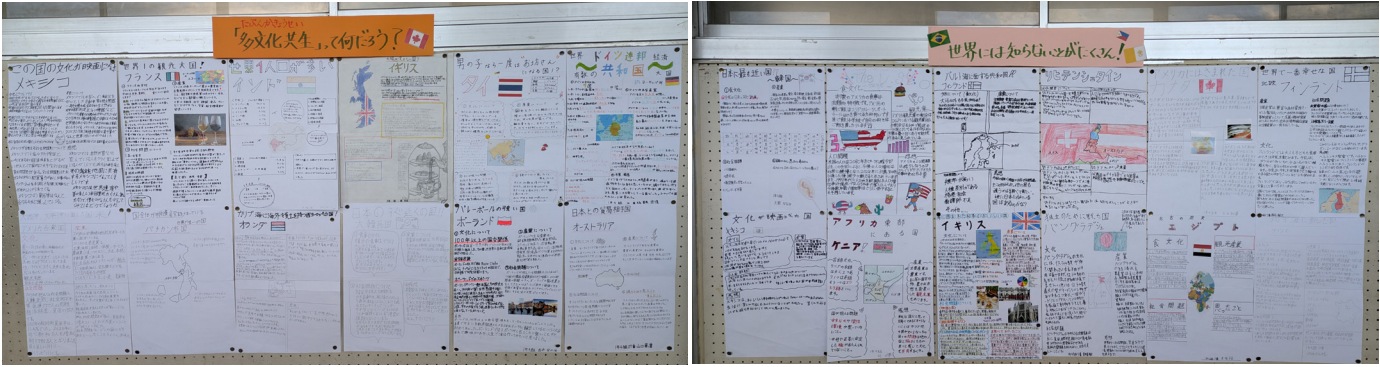
6	表現活動「学びをみんなで共有しよう」 地域の他校や企業、施設を招待し、作成したレポートを発表し合う。
7	振り返り 発表を通して、「多文化共生の文化」を創っていくことについて考えてみよう。 みんなにとって一番身近な社会集団である「クラス」や「学年」のなかで、どのように生かしていきたいか考える。

● 道徳の授業

道徳の内容項目「国際理解・国際協力」において、JICA が行っている国際協力出前講座を利用して、「他国との生活や文化の違いを私たちはどう受け止めるとよいのか」ということについて、国際協力の体験談を交えて考えさせたい。

● 校内環境 ～掲示物～

授業の一環として、夏休みの課題で作成させた「国調べ」のレポートを担当学年の廊下に掲示した。「多文化共生」というワードを紹介しつつ、自分たちの文化が基準ではないことや、さまざまな文化の違いを楽しもうというメッセージを添えた。今後も、多文化を楽しみ、尊重する心を育てる掲示物などの環境を整えていきたい。



掲示した「国調べ」レポート

2. 保護者に向けた取り組み

「やさしい日本語」を意識した話し方や書き方をしていきたい。学級担任をしている自身としては、まず初めに「やさしい日本語」を意識した学級通信を作成してみたいと考える。学校での様子を保護者の方に分かりやすく伝え、安心してもらえるように、「知らない人はどう思うか」といった視点を大切に実践していきたい。

3. 教員に向けた取り組み

外国にルーツを持つ生徒の入学が多くなってきている現状を踏まえ、教職員の負担にならない範囲で、「多文化共生」につながるテーマに沿ったミニ研修や意見交流の機会をつくっていきたい。例えば、以下のようなことはできないだろうか。

- アンケートをとり、その結果を通信などの形にして共有する。
（質問例）
外国にルーツを持つ生徒の指導に当たって悩んでいることや困っていることはあるか。
「こうしたら持つと生徒のためになる」と思っていることはあるか。
- 「多文化共生」ってどういうことだと思うか。
- ワークショップ「「やさしい日本語」にチャレンジしてみよう」を実施する。
- おすすめの外国料理店・外国ショップを紹介する。
- 海外旅行での異文化体験談を紹介する。



外部機関との連携

- 外国にルーツを持つ生徒が多い他校の校内を見学させてもらったり、授業実践を観に行く。
- 地域の歴史的な背景や、働いている人に注目をした「地域調べ」のようなことを行う際に、平塚市博物館の学芸員に話を伺い、情報収集をする。
- JICA が行っている国際協力出前講座を利用する。
- 地域の公民館で開いている日本語教室に足を運び、子どもの学習状況や様子などの情報交換を行う。

ウェルビーイングの視点がある学校・社会を目指して

生田目 紀子 岩倉市立南部中学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：340 名 外国につながる児童 / 生徒数：48 名（全体の 15%）

学校背景



愛知県の北西部に位置。外国籍住民は全体の 7% で集住地域。平成 13 年に岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室が発足。「日本一愛のある適応指導教室」を理念、「在籍学級での活動・学習に参加できる日本語力をつける」をめあてに掲げる。現在はブラジル、フィリピンを筆頭に 20 カ国にわたる児童生徒が市内 7 校に 240 名ほど在籍し、各校に配置された日本語担当を中心に各学校の実態に沿った指導を展開している。

現在の課題



- ・前任校では通用した学年・学級経営が本校では思うように機能せず悩む教員の姿が見受けられる。多文化共生の意識が薄いことからマイクロアグレッションの傾向が強い発言があることも想定内とし、多文化対応力向上をはかる研修等や対策に取り組んでいきたい。組織としての意識の高まりがあれば多文化共生のみならず、国際理解・協力教育へつながり、多国籍多数ならではの特性を強みとする学校になるのではないかな。本校は生徒間は幼少期から共に育っている間柄なので「人間同士」としての付き合いができてるのは特記すべき点である。
- ・「支援する・される」関係性から「共に生きる」風潮の今、保護者側も学校経由の支援に全面的に頼るのではなく、より自発的に情報を得る姿勢が必要なのは明白である。学校側も「やさしい日本語」での発信や掲示などを行うなど「双方の歩み寄り」が求められている。

現在の取り組み



- ・ブラジルにルーツを持つ生徒のための母語（継承語）指導／週 1 回取り出し式グループ指導／講師はブラジル人
- ・文化祭（南中ふれ愛フェスティバル）での国別パフォーマンス
- ・宗教的配慮が必要な案件は学年・学校全体で共有し「その場しのぎにならない」「教員一人の意見を押し付けない」などのダイバーシティ目線を意識した解決方法の構築
- ・言語のみならず全人的な発達につなげる指導の推進
- ・ネパール人学校との連携



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

東京育ちであるがルーツである沖永良部島の風習文化・言語の強い影響を受けて育ったことにより、日本人でありながらアイデンティティを常に意識していた経緯がある。その感覚を活かしながら教育者として自らの「属性」や「困り感」に悩む生徒の伴走者でありたいと考えているから。



学校にとって

多国籍・特別支援・個別の対応が必要な児童生徒が増加の一途を辿っている現状から今までの日本の学校のあり方では対応しきれない現状があるから。一条校として遵守するべきところは意識しつつ多様な価値観を認める土壌があれば教職員も含めてより生きやすい人が増えるから。



世界・社会にとって

テクノロジーの進化により国や民族を超えて交流することの敷居が低くなり交流が活発にあるようになるということは、絶対的な正しさがないことを知ることにつながり、世界各地の情勢安定につながることを期待したいから。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

「好むと好まざるとにかかわらずの多文化共生」が日本各地で急激に進んでいる。移民や国の政策では海を渡ることもあったが普段の生活や結婚は集落や村単位であったのが日本。陸続きで他民族に支配されたりして共存せざるを得なかった国々に住む人々が長い年月をかけて作り上げてきた多文化共生の感覚は我々にはないのかもしれない。多文化共生意識がないことを「排他主義」と決めつけてしまうのは性急であるとも言える。しかしながら、国の未来にも関わる状況なのは一目瞭然であるので、市民一人一人が自分ごととして真剣に考える時期にきているのではないかな。

そこで「教育」の力が最大限の力を発揮すると信じたい。マジョリティ側への多文化共生教育だけではなく、日本に移り住んだ人々への「年齢を問わない教育プログラム」の推進を国主導で行うことや彼らが日本社会で自身の能力を発揮し社会に貢献したいと思えるような仕組みづくりが必要ではないかな。しかしここで気をつけなければいけないのが、同質性の高い国家であるからこそマジョリティ側が自分の「ものさし」だ

けで計ることがないようにすることだと思われる。

研修 1 日目に中国在留邦人 3 世の方のお話を伺い、国籍とは何かを多方面から考える良いきっかけとなった。進路担当分掌としても日系や特別永住者に該当する生徒のキャリア構築についてさらに知識と考察を深めていきたい。日本社会は急増するニューカマーとの共生に目が行きがちだが、オールドカマーとの共創について我々世代の目線での再考も忘れてはならないテーマである。このことが真の多文化共生につながることにすると信じたい。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

- ・日本の性善説で対峙できることは、世界目線でみた場合は「当たり前ではないこと」に意義や価値を知る住民が多い環境＝「MATURE」な人材がひとりでも多く育つことが理想。
- ・「自分の属性」に足を引っ張られることなく「自分にはどんな人生が合っているのか?」とトライ＆エラーを重ねることが出来る人間がより素敵な人生が送れるような「生きるエネルギー」に満ちあふれた日常が存在する環境
- ・学級担任として掲げていたクラス目標そのもの（貴方の個性を最大限に尊重する。しかし、自分の主義主張をするだけではなく、他者の個性を尊重し、「誰もが居心地のよいクラス」）



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイディア

実践報告 1 学校の文化祭における「外国につながる生徒有志たちのルーツ別パフォーマンス発表」

<今年度、担当として意識したこと & 気づき>

- ・ルーツがあっても出演するかどうかは「自己判断を尊重」
→本来は「アウティング」はいつ・誰にするかを自分で決定
- ・取りだし授業を行っていない生徒の参加者数が予想より多かった。
→日本語能力と滞在歴はアイデンティティとは比例しない。
- ・ルーツへの配慮が、日本国籍があるために薄れてしまっている場合があった。
→ルーツと国籍は別物だという認識が教職員側に必要。
- ・伝統に縛ることをせずルーツの国との現在進行系のつながりを尊重して計画させた。
→（親の）母国の文化の「今」とつながっている「バイカルチャル」な自分を感じることができ自信につながった。



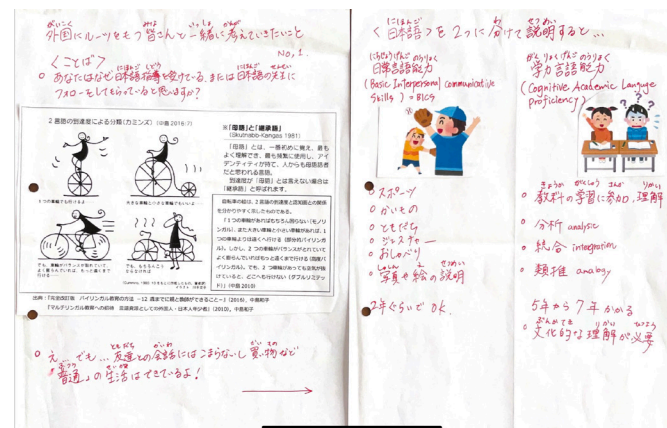
学級担任として掲げていたクラス目標



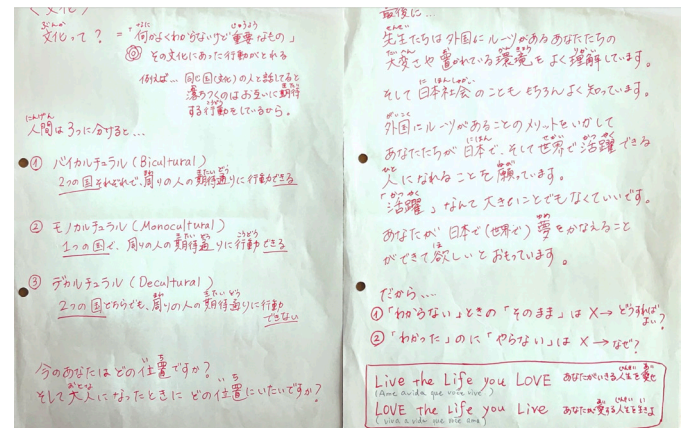
南中ふれ愛フェスティバル

実践報告 2 外国ルーツ生徒限定版「道徳」～メタ認知力を高める～

<自己肯定感・自己実現>
獲得の要素



<人のつながり・利他性>
協調的要素



実践報告 3 ネパール人学校（TOKAI BATICA INTERNATIONAL SCHOOL）との関わり

学校見学を縁として、ネパール人生徒の教育について相談や保護者会時の通訳業務の支援を行なっていただくなど中部地区で共に教育に携わる同志として未来につながる関わりの継続。

実践報告 4『BELJAP EXCHANGE PROGRAM』

ベルギー出身の国際交流員が推進するオンライン相互交流の推進。学校生活や日常生活について英語で紹介する動画を生徒が作成し相互交流をはかる。

アイデア 1 教職員に対する多文化共生対応力向上のための研修の拡充と深化

アイデア 2 日本語・ポルトガル語適応指導教室発信のニュースレター等による啓蒙活動

アイデア 3 「地球規模で物事を考え行動できる未来の開拓者」となるべき人材の育成につながる日米青少年国際相互交流（ホームステイ交流など）

日本語・ポルトガル語適応指導教室の教員として「合理的配慮」をどこまで、どのように推し進めるかをマイノリティー側の代弁者の意識で同僚たちと建設的な対話を重ね、「落としどころ」を見つけていく毎日である。日本人生徒たちも幼少時から共に育つ過程で実は自然とインクルーシブな社会を築く素質を持ち合わせていることが多国籍な学校で育ったからこそだという自信につながるように、全生徒にとって win-win であるようにしていきたい。

思春期を迎えた彼らに我々教職員が「メタ認知」を高める学びを推し進めることで、自らの思考や行動を客観的に把握し認識することにつなげ、すべての生徒にとって学力を超えての全人的な成長になるようにこれからも精進していきたい。Education is my passion.

外部機関との連携

- ・ JICA 中部 / 地域ボランティアや NPO/ 岩倉市国際交流員
- ・ 菅原雅枝先生（愛知教育大学・日本語教育支援センター）
→現職者への情報提供や指導のスキルアップ
- ・ 南浦涼介先生（広島大学）
→日本語担当者向け研修会の継続実施
- ・ 名古屋外国語大学の外国にルーツを持つ大学生とのコラボ企画の推進
- ・ 特定非営利活動法人 ユートレックとの連携
→ホームステイなどの国際相互交流を通じ「偏見のない世界観」をテーマに Global Education

誰一人取り残さない学びの場の創造に向けて
～すべての生徒の Well-being をめざして～

沓木 里栄 府中町立府中中学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：647 名 外国につながる児童 / 生徒数：3 名（全体の 0.4％）

学校背景



毎年、各学年1～2名外国籍の生徒が在籍している。ルーツはインドやベトナム、ブラジルなど年度、学年によって様々である。日本語能力も様々で、全く話せない生徒もいれば生活や授業を受けるに当たって全く問題のない生徒もいる。同時に祖父母世代は外国籍だが、その後日本に住み続け世代が進んだため学籍簿にも明記されないルーツを持っている生徒もあり、実態は把握できていない。

現在の課題



課題は、2点ある。第一に「多文化共生」がジブンゴトになりにくいということ。第二に、多文化から生まれる多様性と個人嗜好の個性との線引きをどこでするかということである。「多文化共生」といった場合、「英語が苦手なので、国際理解はできない」、「外国人と関わらないので、自分には関係ない」と考える人が生徒だけでなく、教員にも多い。そのため、多文化共生に対する意識が育っていかない。2点目は、学校現場において多様性は、個性の表現にすり替わる。それは内面だけでなく、見た目の髪型や服装などの校則のあり方につながってくる。その対応に苦慮しているというのが、現状である。

現在の取り組み



本校では、自己や地域の未来をつくっていく「みらいデザイナー」の育成を目指し、「誰一人として学びから取り残さない」という意識で、ユニバーサルデザインの視点から授業や教育活動を構成するよう取り組みを進めている。生徒一人一人の個性や興味関心を理解し認めた上で、それらをさらに引き出していくことが必要であると考え、ユニバーサルデザインの考え方や個別最適な学びを推進していくための研修を行い、教職員で共通理解を図りおのおのの授業や各活動で実践している。外国籍の生徒に対しては、その生徒の日本語習得のレベルに応じた日本語指導を行っている。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

多文化共生の文化が当たり前にならないと、私自身が生きにくい世の中になってしまうから。そもそも教員になったのは、世の中には様々な文化や考え方があり、それらに優劣はないのだということを一人でも多くの子どもたちに気づいてもらいたいと思ったから。そしてそのことを実行したいため。



学校にとって

学校とは社会に出て行くために様々な考え方を知り自分の考えを構築する場所だと考えている。考えの構築には様々な人との対話が必要である。そのために、自分の周りの人はすべて異文化だと認識することで、相手のことを理解しなければならない対象であることに気づき、対話をしようと思うようになるから。



世界・社会にとって

違いがあるから人間は対話をし、新しい文化を生み出す。つまり多文化共生の文化が認知されるようにならないと、人類の維持・発展はないと考えるため。違うということを知りその対象物を理解しようと思い行動することが必要。そのことが、地球上すべての課題（環境問題や貧困、ジェンダーなど）を解決できるから。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

本校では、外国籍の生徒が少ないにもかかわらず、生徒も教員も彼 / 彼女たちを良い意味で特別扱いせず、他の生徒と同じように対応している。つまり、彼 / 彼女たちが外国籍であるが故の生徒指導上の問題は起こっていない。そのためいわゆる「多文化共生の文化」ということについて、深く考えてこなかった。もっと言えば、英語科であるがゆえに、多文化共生＝国際理解教育＝英語教育という図式に嫌気がさして、逃げていたというのが正直なところである。

しかし今回の研修を受けるにあたって「多文化共生の文化」とはどういうことなのか自分なりに向き合い、所属校の現状分析を行った。研修では、多くの方が直面されている状況や取り組み内容、さらには長年、多文化共生の文化を創造するために取り組んでおられる講師の方々のお話をお聞きしたことで、「多文化共生の文化」とは、「どんなバックグラウンドを持っていようと、一人一人がその人らしく生きていける文化」である

ということを確信できた。そう考えたとき、「多文化共生の文化」を創造していくために私は、次の 2 点について取り組んでいく必要があると考えるに至った。

第 1 は取り組んでいくことを諦めないということである。今までは、多文化共生を受け入れようとしらない人やジブンゴトとしてとらえられない人と対峙したとき、仕方がないとかきらめていた。しかし「多文化共生の文化」とは、「すべての人が幸せに生きていくことができるようになること」ということを意識し、その当事者にかかわる事柄と結びつけるなど、ジブンゴトになるよう取り組んでいく。第 2 にさらに多くの外部人材や地域とつながることである。これは、多文化共生に関わっておられる団体や個人はもちろんのこと、多文化共生に興味・関心がない方ともつながることでその意識を広げることができると考えている。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

人は皆、一人一人すべてが異文化であり、それらの異文化を理解していくことが「平和文化」の実現であると考えてる。その「平和文化」の実現に向かってみんなで取り組んでいく文化が、多文化共生の文化であると考えてる。

学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

1. 日々の教育活動に生かせる視点の発信・提案

目的：すべての教職員が、多文化共生の文化をジブンゴトとしてとらえ、その視点はすべての教育活動に通じると思ってもらえるようになること。

内容：本校が取り組んでいる個別最適な学びやユニバーサルデザイン（UD）についての考え方につながるアイデアや情報の提供を行う。

- ①「やさしい日本語」の作り方研修会の実施：個別最適な学びを進めるうえで UD の考え方に基づいたものであるということを強調し、支援の必要な生徒が救われることを実感してもらうことで「多文化共生の文化」とは、外国籍の生徒へのものだけではなく全生徒のものだということを認識してもらう。
- ② 体験型研修の実施：「貿易ゲーム」「世界がもし 100 人の村だったら」など楽しめる研修を行う。時には、PTA と共催にする。
- ③「ミニみみアイデア情報」職朝メモや通信などで「これも多文化共生文化なのか」と思わせる情報や取り組みを紹介する。特に、教科指導の内容を積極的に伝える。
- ④ 多文化共生の文化を創造するコーナーの設置：様々な視点、例えば、海外と日本、日本の中の多文化（県民性、地域性、言葉、食文化、生活習慣など）、性的マイノリティー、平和文化、環境問題、貧困問題、教育問題など「えっ！こんなことが多文化共生にかかわるの！」「と思わせるような、情報コーナーを設置する。
- ⑤ 学校内の規則やルールの見直し：生徒、教職員と保護者でルールを見直す組織を立ち上げる。「校則とは何か」「学校のアイデンティティとは何か」について、個人の好き嫌いではなく考える場を全校生徒で持ち、保護者とともにルールを考えるシステムを構築する。
- ⑥ 多文化共生文化を創造するための校内組織を整備する：全教職員が意識して取り組めるような校内体制にする。

2. 異文化をジブンゴトにできる授業の実践

① 多言語での教科の指導

非英語圏で誰も知らない言語圏に行かれた青年海外協力隊経験者に教科の授業を実施していただく。異文化を体験することで、日本語がわからない人がどのような気持ちになるか疑似体験し、新しい視点を持つきっかけとする。

②「原爆・平和」をジブンゴトとする平和学習の実施

探究的な学びの手法を使って「平和」学習を行う。自分たちが考えた課題を解決するための企画を実施すると同時に、外国人に対して意識調査をする。そのまとめとして、「ひろしま伝承ポスター」を作成する。

<大まかな学びの流れ>

- ・現状を知る（被爆者や伝承者、各専門分野の方の話を聞く、有識者（外国人初の平和文化センターの元理事長）との対談）
- ・課題を設定する
- ・企画の計画を立て準備をする
- ・実施する（企画実施及び外国人への意識調査）
- ・振り返りおよび新たな課題の設定

<具体的な実践内容>

- ・外国人への意識調査

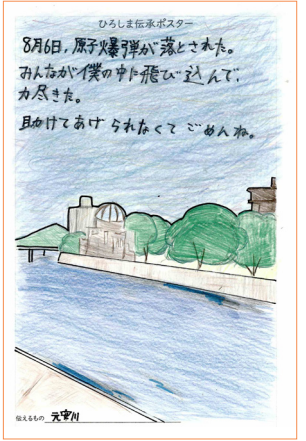
平和に関わる「答えが一つではない問い」を生徒が考え、インタビューを行う。その結果について自分の考えをまとめる。一人が必ず一インタビューをするので、最初は話しかけるのをためらったり誰かにやってもらおうとしたりしていた生徒もいた。しかしグループの仲間が積極的に声をかけ、楽しそうに会話をしているのを見て挑戦した結果、多くの生徒が「楽しかった」「意外と通じる」という実感を持っていた。また、答えが一つではない問い「平和のために何が必要か」という問いに対する答えが、日頃考えてもいなかったことだったりして、世界にはいろいろな視点や考え方があることを肌で感じるきっかけとなっていた。生徒によっては、どうしてそう考えるのかを聞いたり、聞けなかった生徒はその国の背景を調べてみたいと考える生徒もいたり、確実に多文化共生の文化の創造につながる視点を持てた。

- ・「ひろしま伝承ポスター」の作成

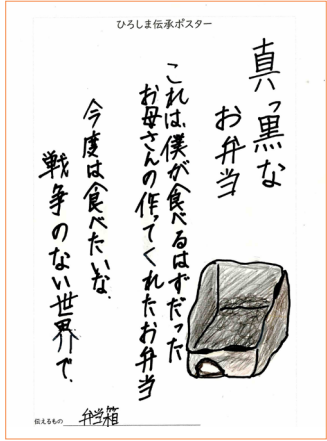
平和学習の中で最も印象に残ってほかの人に伝えたいと思うものを一つ選び、そのものになりきって絵と詩を書く。80 年前にあった出来事を、より身近に感じジブンゴトとしてとらえて欲しいと思って構成した課題である。「ものになり切って詩を書くこと」以外は自由にしたためか、日頃表現が苦手な生徒もその生徒なりの視点や感性で豊かに表現できており、生徒一人一人の多様性をと可能性を感じる事ができた。



インタビューポスター



ひろしま伝承ポスター



③「日系人の心」

特別の教科や道徳の時間で、移民の歴史や日系人の暮らしを通じて、その国の伝統や文化を尊重するとはどういうことかについて、また国際理解、多文化共生文化について考える。

<内容項目>

C17「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」もしくは C18「国際理解、国際貢献」

<大まかな学習の流れ>

- ・日系人・日本人とは何か知る
- ・移民の背景・事実を知る
- ・移民の生活について、クイズを通して知る
- ・ハワイのプランテーションでは様々な国の人が働いていた。お弁当や作業着も各国のものが混じり合っていた。その中で、プランテーションルックで、日本人移民だけがつけていたものは何か。（帯：帯を締めることで、気持ちを引き締めた）
- ・移民した国で、日本人は集まってコミュニティを作って生活していた。その中で日本人が移民して最初に作った施設は何か。（学校：自分は苦労しても子供には高い教育を受けさせた）
- ・移民は移民した先でも日本で食べていたものを食べたいと、いろいろな工夫をしていた。ボリビアの移民は、柏餅の柏の葉の代わりに何を使ったでしょう。（バナナの葉）
- ・主発問「日本人が移民先に持ち込んだのはどんな「心」だろうか。グループで考えた後、全体共有、その後、個人で考える。

<生徒の変容>

広島という土地柄、親戚に移民をした人がいるが詳しい歴史を知らない生徒も多い。移民の存在や功績そして移民した土地での生活を知ることで、日本を客観的に見つめると同時に母国以外に住むということはどういうことなのかを考えることができた生徒が多かった。また、社会科の南アメリカの単元と連携して問いを行うことで、多文化とはどういうことなのかを考える生徒も増えた。

3. 地域や外部人材とさらにつながる

目的：担当の先生や、ある一部の先生だけが自前で取り組むのではなく、様々な人の専門知識を活用し、生徒が幅広い視野を持ち、「みらいデザイナー」にふさわしい資質能力を持ち、多文化共生の文化を育くめるバランス感覚を身につけることができるようにする。

内容：地域の人材や教職員の得意分野を整理し、中学校区で連携して活用できるようにし、教職員の業務改善を図る。中学校区で関わってきた地域人材の「人材バンク」を整理し、地域の専門知識を小中 9 年間で系統的に活用できるようにする。また、地域（コミュニティスクール）にお願いできることをリストアップし、積極的に学校と関わる素地を作る。

外部機関との連携

上述の様々な教育活動の場面で、JICA 中国などの地域の専門機関や人材と連携し、深みのある取り組みとしていきたい。また、日本語の指導や母語支援などを地域の国際交流協会などと連携できたらと考える。

これって日本だけ？～海外の教育事情から日本の学校文化を考える～

大塚 圭 中央大学杉並高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：983名 外国につながる児童 / 生徒数：約 20 名（全体の約 2%）

学校背景



近年、外国につながる生徒数は増加傾向にあるが、幼少期から日本で教育を受けてきているため、日常の学校生活や授業で支障を感じていることは少ない。また、近隣地域には、多くのインドやネパールの方々がレストランなどを経営しながら暮らしている。しかし、学校と地域に居住する外国人との交流は行われていないのが現状である。

現在の課題



現在は、総合的な探究の時間を活用した SDGs に関連する途上国の社会的課題を理解するフィールドワークやマレーシアでの多文化共生社会をテーマにした研修旅行、イギリス・オックスフォードで英語を通して世界の多様性を学ぶ研修など海外に視点を向けた活動が多い。そのため、日本国内に視点を移しつつ、校内における多文化共生の文化を築いていくことが今後の課題となる。今まで慣習的に行われてきた日本独自の学校文化を見つめなおし、外国につながる生徒の状況に応じて柔軟に対応していかなければならない。

現在の取り組み



本校では、多文化共生教育の一環として 2 年次における研修旅行の 1 コースにマレーシアを設定している（他のコースは沖縄・奄美大島・東北・韓国である）。マレーシアでは、B&S プログラム（大学生との街歩き）やカンポンビジット（農村訪問）を通して多文化共生社会を体感する。また、生徒の多様性を尊重し、一人一人が自分らしく学校生活を送れるように環境を整えている。例えば、性別に関わらず制服を選択できることや名簿を男女混合にすること、みんなのトイレを設置することなどを挙げることができる。生徒は、体育の授業でパラスポーツを体験したり、教員は、LGBTQ 研修を受講したりするなど、ジェンダー平等や障害を持つ人々との共生における取り組みが進められている。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

国内外問わず地域・社会で多くの人々と接することで自身の視野を広げ、豊かな人生につなげていくために必要であると考え。



学校にとって

外国につながる生徒だけでなく、教員や生徒一人ひとりがお互いを尊重し、自分らしく学校生活を送るために不可欠である。



世界・社会にとって

グローバル化が進展する中、世界の国々や人々が経済的・文化的・政治的につながり、平和・共生の理念を達成するために必要な普遍的価値である。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

本研修では、多文化共生の文化における概念の幅を広げ、新しい視野で物事を捉えることができるようになった。今までは、多文化共生社会という外国人と日本人のような二項対立的なイメージを持っていたが、年齢の違いや障害の有無、LGBTQ など多様な人々を尊重・受容することが重要であると認識することができた。このような多様な人々と共存し、それぞれの慣習を尊重しながら生きていくことのできる社会を作るために必要な価値観を築き上げていくことが「文化」であり、多文化共生社会の実現に向けて重要な概念であると考えている。また、海外移住資料館などで日本から海外に渡った人々に関する歴史的経緯を知り、現在、多くの外国人が日本で働いている現状と重ねて検討することができた。一方、1980 年代以降、日本からの移民が減少し、経済成長の恩恵を受ける形で日本人が海外を旅行で訪れるようになったことを考慮すれば、現在、たくさんの外国人が物価の安さを理由として訪日していることは、将来的に外国人労働者が日本ではなく他の国々へ行く兆候であるかもしれないと感じている。このように、本研修では、日本人の海外移住の歴史を学ぶことで現在における在留外国人や海外からの旅行者に視点を移して考えることができるようになった。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

外国との交流が少ない場合は、その文化や慣習に基づいて生活をする事ができる。しかし、外国との相互依存関係が深まり、お互いの交流が活発になるとその国の文化や慣習だけで生きていくことは難しい。そのため、新しい文化を受け入れつつ、自国の伝統も守っていくことになる。多文化共生の文化とは、新しい文化と自国の伝統から普遍的価値概念を創造していく作業であると考えている。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイディア

教材「これって日本だけ？～海外の教育事情から日本の学校文化を考える～」

現在の外国につながる児童・生徒の増加により、多文化共生の視点を学校現場に取り入れていくために、教員及び児童・生徒間で意見を共有する教材として「これって日本だけ？～海外の教育事情から日本の学校文化を考える～」を作成した。本教材は、比較教育学の視点で日本及び海外の学校現場における「ちがいに」焦点を当てている。「ちがいに」を通して、日本の学校文化を明らかにするとともに、新しい視点で多文化共生の文化について考えることを目標としている。

使い方

1. 教材の①～⑤を読んで教育における「ちがいに」について気がついたこと、感じたことをグループで話し合う。
2. 「解説」を配布し、それを読んで新たに考えたことをグループで共有する。
3. 日本の学校文化において残すべきこと、やめるべきこと、新しく創造することを考え、発表する。

教材

- ①多くの日本の学校では、ブレザーにシャツ、スカートやスラックス、またセーラー服や詰襟（学ラン）などの制服があるが、スイスの学校では、制服が導入されていない。
- ②日本では、ヒジャブ（スカーフ）の着用について児童・生徒や保護者とよく相談し共通理解を図ることとしているが、フランスでは、公立学校におけるヒジャブの着用を法律で禁止している。
- ③日本の学校では、ピアスなどのアクセサリーの着用を禁止していることが多いが、ブラジルでは、一般的に学校におけるアクセサリーの着用が認められている。
- ④日本の学校では、一般的に児童・生徒が教室を掃除するという習慣があるが、オーストラリアの学校では、清掃を専門の業者に任せている。
- ⑤日本の学校では、授業開始時と終了時に号令（あいさつ）をするが、海外の学校ではその習慣がない。
- ⑥日本の中高生は、学校の部活動に所属することが多いが、ドイツの中高生は、異なる学校、年齢の子供たちが集まる地域のスポーツクラブに所属している。
- ⑦日本の高校では、生徒がホームルームの教室で授業を受けるが、アメリカの高校では、自分の興味に応じて科目を選ぶこと多く、毎時間、生徒が教室を移動する。
- ⑧日本では、小学校 5 年生から正式教科として英語を勉強しているが、ブータンでは、小学校からほぼすべての授業が英語で行われている。
- ⑨日本の学校では、一般的に夏休みに宿題を出す、海外の学校では、宿題を出さない国も多い。
- ⑩日本の義務教育では、基本的に自動進級制度が採られているが、フランスでは、各学年の終わりに、所定の知識や技能を修得しているかの判定が行われる。
- ⑪日本では学習指導要領に基づいて全国で同じ教育をするという原則があるが、アメリカでは教育に関する権限は国ではなく州にあり、多くの州では、その権限を学区レベルに委譲していることもある。
- ⑫日本の初等教育では、一般的に一人の先生がすべての教科を教える「学級担任制」が多いが、マレーシアでは、小学校から自分の専門教科を教える「教科担任制」が採用されている。
- ⑬日本では、法律で体罰が禁止されているが、シンガポールでは、教育法の学校規則条項で認められた合法的な体罰行為として鞭打ちがある。
- ⑭日本は、「OECD の国際学力調査（PISA）」でフィンランドよりも順位が高いが、「世界幸福度ランキング（World Happiness Report2024）」では、フィンランドが 1 位であり、日本は 51 位である。
- ⑮ 2018 年の「OECD 国際教員指導環境調査（TALIS）」では、日本における教員の通常 1 週間の仕事時間は、小学校教員が 54.4 時間、中学校教員が 56 時間（参加国平均 38.3 時間）と最長である。

解説

- ①制服は、学校のブランド化イメージと生徒に誇りを持たせるなどの教育的意図があったり、安価で同じ服を着用することで家庭の経済状況を隠す役割を担っていたりする。一方、スイスなど制服を導入していない国では、個人の自由を侵害し、子どもの精神的成長を妨げる可能性があると言われている。また、制服に関しては、日本のように個々の学校によって異なる場合もあるが、海外では、すべての学校に共通の標準制服の着用を義務付けている国もある。
- ②フランスでは、政教分離の原則を理由に、公立学校や公共の場、公務員を対象にヒジャブなど宗教的な帰属を示すシンボルや服装の着用を法律で禁じている。その代わりに、水曜日は、学校に行かず、それぞれの属する教会で宗教教育を受けることが実施されていることも多い。

- ③ブラジルでは、女児が生まれたらすぐにピアスの穴をあける文化があるため、学校でもピアスなどのアクセサリーをつけることが許されている。海外では幼少期からピアスをする国はたくさんある。
- ④学校は勉強をする場所であるという考え方や専門の清掃業者の雇用機会を奪わないようにするためという理由などがある。また、日本以外でも仏教的伝統を持つ国の学校では、「掃除＝心を磨く」文化として校内清掃が行われている。
- ⑤授業開始時と終了時の号令（あいさつ）は、日本独特の学校文化である。礼儀・作法のためや休み時間と授業時間の気持ちの切り替えをするためなど考えられるが、違和感を持つ外国人もいる。
- ⑥ドイツの学校は、原則として半日制（現在は、午後にも授業を実施する学校が増えている）のため、スポーツを行う場合、地域社会で自分とは異なる職業・立場・年齢の人々との交流が中心となる。
- ⑦日本では、ホームルームクラスの生徒が同じ時間割で授業を受けるが、アメリカでは、一人一人異なる時間割に従ってそれぞれ受講している科目の先生の部屋に移動する。そのため、毎授業、異なる生徒の顔触れであり、座席も決まっていない。また、教員が基本的に個別の教室を持っているため、職員室がない学校も多い。
- ⑧ブータンは、国語に制定されているゾンカ語のほかに多くの民族語が使用される多言語国家であるため、英語は共通語の役割を担っている。また、上級学年でインドや英国の教科書を使用することが多く、英語での理解が必須となる。
- ⑨基本的に夏休みは「休み」であるという考え方が一般的であり、普段とは違う体験をたくさんしてほしいという教育的な価値観が表れている。欧米や北欧、東南アジアの多くの国で夏休みに宿題はない。
- ⑩自動進級制度は、どの地域やどの学校でも子どもたちにほぼ同じ水準の教育を提供しうる体制が整ったことを示す一方で、フランスでは、進級の速さが個人によって違うのは当然で、必要ならばもう1年繰り返すことは学校のサービスの一つであると考えられている（課程主義）。また、日本の義務教育段階では、年齢主義に基づいて児童・生徒の年齢と学級を揃えようとしているため、飛び級制度も認められていない。
- ⑪全国統一の学習指導要領は、学校の種類（国立・公立・私立）や地域（都市・郊外・農村）に関わらず、同じ教育を受けるため、学力格差が生じにくいと考えられているが、一方で子どもたちの一番近くにいる学校や教員の裁量が限定されていると指摘されることもある。
- ⑫「教科担任制」では、質の高い授業によって、児童の学習効果を高めることができるだけでなく、教員一人が担当する授業数（持ちコマ数）の軽減や授業準備の効率化につながる。一方、「学級担任制」では、一人一人の児童にきめ細やかな指導を行えるが、「教科担任制」では、一人の子どもを複数人で指導するため、教員間で情報を意識的に共有する必要がある（2022年度からは、全国の公立小学校の高学年で教科担任制を導入している場合もある）。
- ⑬遅刻やカンニング、宿題不履行などの校則違反者には、停学や教室外謹慎のほか、男子には鞭打ち、女子には地域奉仕活動といった罰則がある（校長のみが権限を持つ）。また、アメリカの一部の州でも体罰は教育上有用であるとして容認されている。
- ⑭日本は2022年のPISAで「数学的リテラシー」5位、「科学的リテラシー」2位、「読解力」3位とフィンランドの「数学的リテラシー」20位、「科学的リテラシー」9位、「読解力」14位より順位が高いが、2024年の「世界幸福度ランキング」では大きく差が開いている。日本は教育レベルが高く、幸福度が低いといわれている。
- ⑮授業時間は参加国平均と同程度である一方、課外活動・事務業務・授業の計画・準備の時間が長く、それらの負担が大きいことを示している。

■参考資料

- 杉本均・南部広孝編著（2019）『比較教育学原論』協同出版
- 独立行政法人国際協力機構編著（2005）『日本の教育経験―途上国の教育開発を考える』東信堂
- 二宮皓編著（2023）『世界の学校』学事出版
- 朝日新聞デジタル：https://www.asahi.com/articles/ASR9X10R4R9WUHBIO2P.html
- 学校文化ガイド集：https://www.jica.go.jp/domestic/yokohama/information/topics/2023/1516021_14656.html
- セカイハブ：https://sekai-hub.com/posts/world-happines-report-ranking-2024
- 東洋経済 Online：https://toyokeizai.net/articles/-/29113
- 東洋経済 Education × ICT：https://toyokeizai.net/articles/-/686535
- ベネッセ教育情報：https://benesse.jp/educational/terms/26.html#:~:text=
- マナプリ：https://manapri.net/nohomework_sv/
- Global Note：https://www.globalnote.jp/post-16601.html

外部機関との連携

近隣のネパール政府公認の学校と連携して教育現場だけでなく、その地域社会で「多文化共生の文化」を推進していきたいと考える。学校間の交流は、本校の生徒にとって地域における外国人との共生を体感でき、ネパールの生徒には日本語や日本文化を学ぶ機会になる。海外への渡航だけでなく、日本国内に視点を移し、地域社会における多文化共生をテーマにした教育活動の必要性を感じている。

「私」が社会とつながる多文化共生の共創

町田 登志子 千葉県立松戸国際高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：952名 外国につながる児童 / 生徒数：50名（全体の5%）

学校背景



松戸市は地域的に外国からの移住者も多く、国際色豊かである。本校は普通科と国際教養科があり、外国籍の生徒は50名程度、外国にルーツを持つ生徒はもっと多いと思われる。中国語、韓国語、ポルトガル語でも学校生活や、学習面での相談にのれるよう、ボランティアの方が来校している。

現在の課題



外国籍の生徒については、学習および進路の問題として、日本語能力試験の対応が必須である。進路についても、一般生徒がほぼ大学進学を希望する中で、家庭の事情が見えない外国籍の生徒の進学について（学力および、金銭面での）的確なアドバイスが難しい。

日本の生徒については、海外留学へ希望する生徒が多くいる。日本文化を学校設定科目として教養科では必修授業として行っているため、歌舞伎や茶道などの知識としての理解、浴衣の着付けの経験を持っている。一方で、その知識や経験、海外への興味関心を活かして、ボランティアへの参加や地域社会での関わりを積極的に持つまでには至らない。生徒自らがアクションを起こせる機会や場を作る必要がある。

現在の取り組み



2019年より外国人支援コーディネーターが配置され、2021年より学年、各分掌と連携して外国人生徒を支援するための外国人生徒支援室が開設された。支援室では副学級役割としてGlobal classroomが開かれ、さらに細やかに生徒によりそうことが可能になった。常に2名の教員がおり、外国籍の生徒が過ごしやすい場が提供されている。松戸市の国際文化祭や地域清掃ボランティアなどに参加する外国籍の生徒が増え、「居場所」としての役割がある。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

答えが出せないことが多くなった。他者を知ることは自分を知ることにつながるし、一人一人の生徒を指導するうえで必要な素地になるため。



学校にとって

生きづらさを感じている子がいる。不登校になる生徒や自殺者を出さない学校教育でありたい。学校が「求める生徒像」は正しいのか。その像から外れても居場所のある学校でありたい。学校は地域に開かれるべきだし、地域の課題を解決していくべきだと思う。



世界・社会にとって

多文化を受け入れることで世界は進歩してきた。国粋主義では社会は発展しないし、誰にとっても過ごしやすい世界は生まれない。それぞれを活かしあえる世界が「No more war」につながらと思う。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

自ら希望して入学した高校であっても進路変更をしていく生徒、不登校になる生徒が少なからずいる。そういう生徒に教員として「こうあるべき」を無意識に押し付けていたり、生徒自身が「こうありたい」と思い込むことから、状況が悪化しているのではないかと、自信を失ってしまっている現実があるのではないかと感じる。「共生」を「共創」という考え方から、生徒の思いを受け止め、誰にとっても居心地の良い、誰の意見にも学びがあるのだと考えられる環境を作りたい。

多文化共生は新しい考えだと思い込んでいた。はるか昔からハワイやブラジルへの移住があり、それは必要に迫られて、あるいはより良い幸福を求めて、または、自ら望まない戦争によるものが背景にあり、そのような移住、共生を経て、現在があることに気づかされた。先人たちが「生きるために」マジョリティに合わせていく形で行ってきた共生社会を、これからは「共創」することでより良い社会にしていきたいと思った。そういう意味では世代の違いや生徒と教員で成り立つ「学校社会」も、多文化共生を共創していく場なのだと思う。世界に目を向けるとともに、国内の全世代にとっての居場所、生徒と教員にとって幸せな学校を考えたい。地域と共に成長する学校教育を行いたい。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

一方通行ではなく、どちらかが一方的に教えるのでもない、相互に学びあい、双方向で共に創造していくもの。ともに考え、より良いものをつくり上げあげていく関係だと考える。今年度の台湾への修学旅行において、中国と台湾の関係を背景に中国籍の生徒が台湾の生徒との交流ができなくなった。台湾の学校での交流や、台湾の学生と一緒に街を歩く機会を持つことも難しく、中国籍の生徒の中には修学旅行自体への不参加を決めた人もいる。国の事情が、学校教育に影響を与え、その結果、生徒たちの貴重な経験が変わってしまう。生徒一人一人の気持ちに寄り合い、柔軟に対応する考え方や、生徒にとっての経験を守る姿勢が、やがて文化として結びついていくのではないかと思う。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

● 職員の共通理解、課題の明確化

教員同士の会話の時間を増やす。

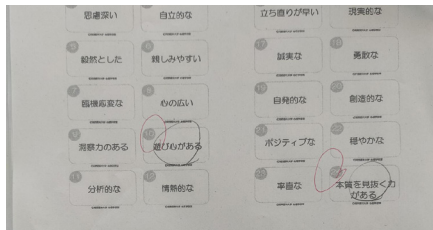
● 生徒による地域へのボランティア活動、交流の機会を積極的に提示する。

松戸市の国際文化祭ではソーラン節を披露した。その際、英語、中国語、フランス語でソーラン節の紹介を行ったが、日本の生徒にとってソーラン節は「やったことはあるが、そのルーツは知らない」というものだった。まずは、ソーラン節が北海道のニシン漁の漁師たちの掛け声から始まったことや、大漁旗に込められた意味について知識を深め、それを制作することで、過去の人々に思いを馳はせて、文化として紹介できたと感じた。

また、地域の独り暮らしのお年寄りや老人ホームにいる方々への年賀状を作成する活動や、老人ホームを訪問してソーラン節の披露もしたい。そのために、地域にある力を使っていきたい。青少年プラザやまつどサポートセンターを生徒に紹介したり、国際交流協会などのイベントの周知を随時行う。外国籍の生徒が参加し、輝ける場所を意識して紹介する。

● 生徒と向き合う時間を作る。

生徒を理解するとともに、生徒にも教員のことを知ってもらうための時間を割く。個人面談を行う。教室の掲示物の工夫し、生徒の活動写真を掲示する。



面談のアイスブレイクに活用した自己ワード選択用紙



生徒の活動写真を教室に掲示

● 生徒同士が向き合う時間を作る。

クラスレクリエーションとして、ハロウィンパーティーを実施。自分と誰かが食べるロシアおにぎりを作ったり、自分がどんな人間かを当ててもらうゲームを行う。美術の授業では、お互いの作品について、仲間同士でアドバイスし合う機会を設ける。

● 自身の自己研鑽

地域で行われている環境や人権についてのワークショップ（地域の防災学習や地域の運動会など）に参加し、地域社会の一員として地域の活動に目を向ける。



グローバルクラスとユネスコ委員が有志でソーラン節を披露



持ち寄った具材でおにぎりを作る生徒たち



外部機関との連携

松戸市国際交流協会	イベント情報を入手する。
松戸市サポートセンター	ボランティア情報を入手する。
地域の小中学校、高等学校	ともに活動をするを通して、地域連携の意識を高める。
JICA 国内拠点	JICA 横浜の図書館の利用を、1年次のSDG s総合学習に向けて行う。また、JICA 市ヶ谷の地球ひろば見学を校外学習で行いたい。

多文化共生の文化の必要性について

大森 虎太郎 駿台甲府高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：903 名 外国につながる児童 / 生徒数：5 名（全体の 0.5%）

学校背景



地域の観点から見ると、本校が位置する山梨県では現在 18,000 人を超える外国人が暮らしている。その数は 2015 年から増加を続けており、現在では人口の 2% を占めている。このような状況を踏まえると、今後本校に入学してくる生徒も外国につながる子どもがさらに増えていくことが考えられる。

現在の課題



私の所属する高校では、「多文化共生の文化」が推進されているとは言えない状況である。留学生の受け入れや、研修旅行での行き先に海外が含まれているなど、日本以外の文化に触れるような機会はあっても指導として、「多文化共生」について考えさせるような取り組みは行われていない。一番の課題は、教員側が交換留学をはじめとする多文化と関わる取り組みの意図を十分に理解できていないため、生徒の取り組みが形式的になってしまっていることである。また、交換留学制度については、本校への留学生に対しての日本語指導が統一されておらず、担当教員の個人の裁量で単発での指導にとどまってしまっていることも課題点であると言える。

現在の取り組み



現在行われている「多文化共生の文化」を創るための取り組みとしてあげられるのは、交換留学制度と海外への研修旅行である。交換留学制度では、クラスによっては一年で 3 ヶ月ほどニュージーランドからの高校生と一緒に授業を受けたり生活を共にする。それは、生徒たちにとっては、自分たちの普段の暮らしで当たり前になっているようなことをもう一度見直すきっかけにもなり、留学生との関わりを通してその国の文化や考え方に触れる機会にもなっている。

研修旅行については、現地の学生ガイドとともに街並みを探索したり、食文化に触れたりとその国独自の文化や言語、歴史などを学び、日本の文化を相対的に捉える機会になっている。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

- ・教育者として多文化が当たり前となっていく社会で活躍できる生徒を育てていくため。
- ・社会に参画する一人の人間として自分や自分の国の言語や文化を相対的に見つめ直し、柔軟な思考を常に持ち続けるため。



学校にとって

- ・多文化共生社会を築いていくための礎としての役割を果たすため。
- ・生徒が社会に出ていく上で、身につけるべき考え方であるから。
- ・さまざまなルーツを持つ子どもを「特別な一人」としてではなく、周りと同じように扱うため。



世界・社会にとって

- ・お互いの国の文化や社会そこに住む人々一人一人をよく知り、尊重し合うため。
- ・出生地や文化の違いにとらわれずに互いに協働していくため。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

多文化共生とは、国レベルの問題でだけでなく、同じ日本に生まれたもの同士でも考えていくべき問題である。自分の当たり前を他人に押し付けたり、過去に決められたルールに従って生活することは、楽なことにも思えるが、それだけでは周りを尊重することもなく、ルールもどんどん形骸化してしまう。そうならないためにも、自分自身の考え方や、社属する集団でのルールを相対的に捉え直し、適切性を考えていくべきである。学校教育において当たり前になっていることは、社会に出てからも当たり前のこととして捉えられることが多い。学校で、「多文化共生」の考え方が当たり前になれば、社会全体も変わっていくと思う。

中国在留邦人 3 世である内田さんのお話で「生徒はあまり気にしていない」という言葉があり、印象的だった。留学生だから、海外にルーツがあるからということで、国籍やルーツに特別な理由があると思うと、教師としてはついおせっかいにその生徒のことばかり気にしてしまう。しかしそうではなく、他の生徒と同じクラスメイトの一人として扱うことが大切で、教師自身が過敏になりすぎないことも重要であると感じた。教員として、まずは目の前の生徒一人一人を知ろうとする気持ちを大切にしたい。

多文化共生とは生徒にとっても、捉え方が難しいと感じてしまうテーマである。そのことを踏まえて、まずは多文化共生を身近に感じるための

体験をすることが重要であると感じた。具体的には、ただ母国語以外の言語を学ぼうとするのではなく、誰かと話すためだと目標を決めてみたり、食文化について知るために、自分自身で実際に作ってみたり、料理教室を実施したりすることが挙げられる。しかし、その際は文化の搾取にならないように注意をしなければならない。紹介の仕方や発問には工夫が必要である。

国や地域のことはもちろんであるが、自分の身の回りのことから考えていくことも、生徒にとって多文化共生を考える第一歩になるのではないかと感じている。まずは、自分や周りの友人のルーツについては案外知らないことも多い。同じ日本人であっても様々なルーツを持っている人がいて、それらをないものとして考えるのではなく、違いを尊重し認め合うことが今後さらに重要になっていくのではないかと考える。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

- ・ 目指す場所を「inclusive」から「diversity」へ変えていくこと
- ・ 誰もが自分自身が尊重されていると実感でき、お互いの違いを恐怖や反感ではなく、喜びとして受け入れること
- ・ お互いの違いに着目して距離を取るのではなく、共通点を見つけて距離を縮めていくこと



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

現在では、「インクルーシブ教育」という言葉が学校教育の中でもよく使われるようになってきている。「inclusive」とは「全てを含んだ、包括的な、包含的な」などの意味合いを持つ言葉である。私は、この「inclusive」という言葉がどうしても自分たちの既存の基準に当てはめたり、その事象を例外的に認めるようなニュアンスを持つ言葉に感じてしまう。そこで、これに変わる言葉として「diversity」という言葉を掲げたい。「多様性、さまざまな種類」という意味を持つこの言葉はアメリカなどではよく掲げられる言葉である。多様性は当たり前にあるものであり、それらの一つ一つの個性を同じ基準に当てはめたり、ある基準に寄せていく必要はない。多様なものをそれそのものとして受け入れていく態度が必要なのである。

「多文化共生の文化」を創るために、まずは目の前のことから取り組もうと考えている。現在、私のクラスにはフィンランドから留学生が来ているが、私自身その生徒の母国についてあまり知ろうとしていなかった。その生徒をさらに理解していくためにもまずは、教員である私自身がその生徒の母国のことについてしっかり知るべきであると感じた。教師が先駆的に多文化を知ろうとする態度が生徒にも伝播することを願う。

また、身近なところからの取り組みとして、自分のルーツを知るために家系図を作成してみた。祖父や祖母に聞き取りをしていると、自分には16分の1アイヌや朝鮮の血が流れているという事実を知ることができた。これらのことを踏まえて、生徒自身がまだ知らない自分のルーツや祖先が様々あるのではないかと考える。自分の家系図をもとに授業を行ってみたところ、「自分自身のルーツに興味湧いた」という感想を持った生徒も多くおり、これらの取り組みはさらに広げていきたいと感じている。

さらに、現在本校で行なっている交換留学制度を活かして、留学生との学年間での交流の場所をもっと増やしていきたい。学内にはイングリッシュセンターがあり、そこでは英語を使ったゲームや交流をALTの先生を中心に行なっているが、あまり開かれた場所とは言えない。そのため、このイングリッシュセンターを全校生徒にもっと周知し、留学や多文化、様々な人との出会いの場所に変えられると考える。

総じて、私が教えている生徒の多くは自分が生まれ育った地域や日本の文化や習慣について、知っているような気になっているが、当たり前すぎて気づいていないことも必ずあると思う。それらのことを踏まえて、「総合的探求の時間」などでの調べ学習も、日本以外に暮らす人々に向けて発信することをコンセプトにして発表を行えば、普段はあまり気づかなかった、日本や自分の住む地域の魅力に触れるきっかけになるのではないかと考える。



外部機関との連携

現在、本校にいる留学生が通っている日本語学校を見学することができた。そこでのお話で、学校間できちんと連絡を取り合い、統一的な日本語指導を目指していくための目線合わせをすることができた。具体的には使用するテキストを統一し、予習復習の課題などを共通のものにすることとした。また、様々な目線から生徒を見ることで、生徒の個人的な課題を確認することもできた。この取り組みの中で、日本語学校の先生から、日常の友人との会話がいつかの練習の場になると言っていたので、そのことをクラスの生徒にも共有した。すると、それまでは留学生とのコミュニケーションのツールとして英語を使っていたことも多かったが、その話をした後は、苦勞しながらも日本語でコミュニケーションを取ろうとする様子も見受けられ、お互いの成長につながっているように感じた。

山梨県でも、日本語以外の言語を母語に持つ人たちが集うコミュニティーがあり、定期的に「多文化おしゃべりカフェ」という取り組みが行われている。今までは、自治体が行なっているそのような取り組みの存在も知らなかったが、そこへ生徒や留学生をつなぐのも学校の立場だからこそできることなのではと考え、私自身も参加して、関心を向けておきたいと思う。

互いに認め合い、成長しあえるゆたかな学校の実現に向けて ～多文化共生の土台づくりを目指して～

沖 祐美帆 愛知県立常滑高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：682名

学校背景



常滑高等学校は、愛知県の知多半島にある常滑市に位置し、中部国際空港から最も近い高等学校である。また、愛知県は、自動車の生産が盛んで、県内には多数の外国人労働者が暮らしており、常滑市やその周辺の地域も例外ではない。

現在の課題



国際理解コースが設置され、部活動としてESS部もあるが、外国との交流を頻繁に行うことは難しい。本年度は、オーストラリアの姉妹校へ本校生徒を派遣したが、生徒の活動報告の共有などが十分とは言えない状況である。ESS部においては、地域の図書室などと協力し、外国語活動を行ったり、校内で海外支援のための募金をしているが、年間を通して活動し続けることが難しい状況である。

現在の取り組み



- ・ 多文化共生スピーチコンテストの指導を行った。
- ・ ESS部が中心となって募金活動を行い、ラオスの学校に図書室を贈った。
- ・ 多言語講座をESS部内で開催した（ドイツ語、ポルトガル語、スペイン語など）。
- ・ 異文化理解の一環として、外国料理をESS部で作った。
- ・ 「教養講座」にて、教師海外研修での学びを共有した。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

- ・ 自身の専門分野に限らず、様々な知識を身に着けることで視野を広げ、それによって得られた成果を生徒に還元するため。



学校にとって

- ・ 生徒一人一人が尊重され、様々な価値観があることを知り、豊かな人間性をはぐくむ環境を整えるため。
- ・ 生徒一人一人の課題に対応することが求められるから。



世界・社会にとって

- ・ すべての人の人権が保障され、互いに尊重しあう社会を構築することで、より豊かな社会が創造されると考えるから。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

自分について

私は、地歴科、公民科、外国語科（ドイツ語）の教員免許を有している。しかし、これらの科目の授業を展開する際に、専門分野以外の知識を身につけて、自身の視野を広げることは、専門分野の授業をより深いものにできると考えた。

学校について

今回研修に参加して、日本の多くの学校で、日本語支援を要する児童・生徒が増加していることを知った。また、小中学校では、日本語支援に限らず、母語支援を行う学校も複数存在するということを知った。外国籍の児童・生徒に限らず、個々の課題に応じた対応が学校で必要とされていることに気づいた。

世界・社会について

人種差別・男女差別など世界では様々な差別問題が解決されていない。差別によって人権が侵害されていない人々に目を向け、人権を保障し、互いの文化を尊重しあうことの重要性を学んだ。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

国籍や性別、年齢、障害の有無に関係なく、全員が豊かに過ごせる土台が形成され、そのなかで個人が尊重される風土が根づいた文化だと考える。一人一人の多様な価値観が認められ、異なるものを排除するのではなく、互いに「自分と違うところ」を楽しみ、面白いと感じて受け入れ、伝統を大切にしつつ、新たな価値観を創造していくことだと考える。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

- 昨年度、図書室を贈ったラオスの学校への訪問
寄贈した図書室の見学、ラオスの学校との交流、生徒による文化発表、図書室の使い方講座など
- 多言語講座（自身によるドイツ語講座および生徒によるポルトガル語、スペイン語、英語などの講座）
多言語を学ぶ中で、その言語が使われている国々の文化を理解する。多様な言語を学ぶことは歴史・地理・英語など様々な教科の学習にも効果的であり、豊かな人間性を育むことにもつながると考える。
- 異文化交流クッキング
本年度、ESS 部で実施し、レシピの多言語訳を文化祭で配布した際、とても好評だった。様々なルーツを持つ人々がいることを実感しやすいと感じた。
- 教養講座
異文化紹介などを行う。すでに実施済みだが、もっと幅広い生徒、教員に参加してもらうために、宣伝や周知を徹底する。
- 地域の日本語教室との連携、ボランティアなど
- 海外に限らず日本の特色ある取り組みをしている高校との交流
- 中学生や小学生など高校生による講座（多言語講座、異文化紹介）の実施
- 教員の取り組みなどを知ってもらうために講師として講演を行う。



外部機関との連携

JICA中部	訪問や出前講座だけでなく、連携してイベントを開催するなど
日本語教室のボランティア	放課後学習支援や母語支援、日本語支援など

対話と信頼を積み重ねてつくる多文化共生の文化

阿部 恵子 兵庫県立姫路北高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：356名 外国につながる児童 / 生徒数：32名（全体の8.9%）

学校背景



創立以来、地元産業を下支えする労働力を育成してきた、12 学級・在籍生徒 356 名の単位制夜間定時制。令和6年5月調査では外国籍生徒は 32 名。フィリピン15名、ベトナム11名、ブラジル2名、中国2名、ペルー 1 名、フィリピンとブラジルのミックスルーツ 1 名の計 32 名が、外国にルーツをたどることのできる生徒となっている。

現在の課題



働きながら学ぶという目的意識よりも、義務教育段階でのつまずきの克服途上にあって「学び直しの場」として本校を選び入学する生徒が多い。本邦出身であってもそれぞれが何らかの文化背景を有しているので、同じ教室で机を並べても干渉せず、相互をより深く理解し合おうとする意欲は高くない。なかには海外とのルーツを伏せたがる子もいる。母語教育支援は行われていないが、国語科・数学科の学習支援が提供されている。

現在の取り組み



全校生徒を対象に「人権課題別講演会」を実施し、11 の分科会のうちの 1 つに「多文化共生」を用意している。また、人権映画鑑賞会の演目として多文化共生を考える題材を選んでいる。教科の学習では、開発途上にある国や地域の子どもが置かれている状況から国際協力の意義を考え、次の子ども世代のために自分たちにできる協力の在り方を考える学びが展開されている。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

人の生活史への深い理解、自分自身の肯定感・自己効力感が基盤となり、コミュニティに調和がもたらされることを日々伝えている。誰もが大事にされ、大事にし合う価値観と行動力を次世代へ継承したい。



学校にとって

初等教育段階で十分なケアを受けてこられなかった当事者が集まるのが本校のような学校で、人として最低限度の「生きる力」を身につける、最後の文化的な場となる。



世界・社会にとって

自国を離れ働かざるを得ない人々が存在する、その背景を直視せず、熟考なく権利のみ主張し合う状態は「多文化共生」と言えない。無垢な当事者・固有の文化が守られるよう、皆で知力を尽くす作業が必要となる。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

多文化を背景に持つ子どもは、世界の社会課題を同世代より見知っている。自身や家族がそれらの社会課題の当事者であり、肌感覚で問題をとらえられているためであるが、その社会課題の解決が容易ではない現実も熟知している。また、海外に関わりがあっても、諸事情による学習の遅れに起因した「世界観の狭さ」を特性として有することもある。多文化共生を説く時、当事者の生きざまや想いが伝わらなければ、規範意識の確認に終始するだけとなる。知識的側面だけではなく望ましい行動変容へとつなぐためにも、子ども達の心情を汲む対話を普段から大切にしていきたい。

多文化の価値観変容は、自己を犠牲にする作業であってはならないと思う。当事者の親世代の想い、子どもの願い、それぞれに耳を傾け理解を深めていきたい。当事者である子ども達を枠組みにはめて、本邦で良いとされる進路のレールに乗せさえすれば先の人生が幸せであると思いを込めてはいないか、大人の尺度を見直す必要もあると思う。

この研修では、母語教育支援の先駆者の多くが女性であると知った。当事者が愛着を持てる居場所を整えるだけではなく、社会の中で活躍の場を拡げることを見越した制度が整えられるよう、様々な立場からの連携と協働が得られるような発信を目指していきたい。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

JICA が南モンゴルで行う砂漠化防止と緑化の取り組みを見たことがある。荒れた土地でも愛着を持ち、砂にまみれながらも懸命に植林する現地の人々の姿に私は感動した。人が健全な自尊感情を確立し、自分を育てている地域やルーツとなる郷土の両方への愛着をもち、そのコミュニティをより良くしようとする健全な自己実現欲求をベースに行動力が育まれ承認されていく、それらの営みが調和する状態、それを「多文化共生の文化」が成熟していると捉えたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

①当事者が中心となる居場所と相互理解の機会作り

外国にルーツのある校内の生徒同士が一堂に会する機会を設ける。令和 6 年度は人権課題別講演会で設定した。 回を重ねていき、外国にルーツを持たない生徒も交えて交流したり、知見を交換する機会に発展させたい。

②対話と信頼の積み重ね

互いを肯定的に理解する「ひみつの友達」など、ライフスキル教育プログラムのアクティビティを活用し、健全な自尊感情を育む。個別面談時には自分史の作成を行い、進路指導では事業所の方を招へいした説明会形式の面談を行う。

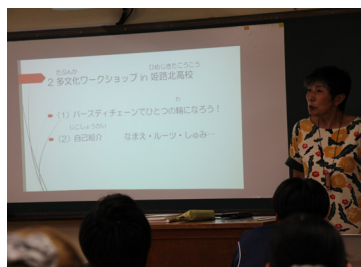
③耳を傾け共感するための視座

人権学習で「在日韓国・朝鮮人」「アイヌ」の学びを設定する。特別永住者を含めた数は減少傾向にあるが、今日まで共に生活してきた約 41 万人（外国籍の 13%）の韓国・朝鮮人との関わりの歴史を理解すること、北朝鮮当局による拉致問題が解決した後の世界をイメージする作業は、先住民への考察と同様に、本邦の多文化共生教育の起点である。

合理的な多言語対応を整えつつも、生徒の母文化に接したいという思いを伝えるため、生徒から母語を学ぶ機会を作り、コミュニケーションができるようになることを目指してみたい。（多言語支援員の支援を受けてきた生徒に「成績や家の話を、先生以外の人に聞かれることに抵抗がある。」と言われたため。）

④「地球市民として生きる力」の育成

JICA が提供する教材や学習指導案を活用した開発教育を、各教科学習や人権学習に組み込み、未来を共に変えていこうとする視座を養う授業を積み重ねていく。



ワークショップは兵庫県在日外国人教育研究協議会に所属する元教員に依頼



新聞記者による講義



1つの輪になって自己紹介する生徒



外部機関との連携

JICA 横浜や JICA 関西ほか各拠点

兵庫県県民生活部総務課人権推進室

人権問題を早期に発見し相談から救済へと繋ぐため、関係機関・団体と連携・協働し、啓発や相談等の活動を展開している。拉致問題解決では、県民の接点となる啓発事業を手掛けている。

兵庫県在日外国人教育研究協議会

「高等学校における外国につながる生徒支援ハンドブック」
<https://kengaikyosakura.ne.jp/handbook.html>



多文化共生の文化をつくるために

金田 将裕 京都市立日吉ヶ丘高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：706 名 外国につながる児童 / 生徒数：約 7 名（全体の約 1%）

学校背景



英語教育・国際理解教育を実践する「グローバルコミュニケーションコース」を設置しているため、英語学習や国際理解に関心のある生徒が多い。また、本校には「HELLO Village」というコミュニケーションスペースがあり、その場所には ALT（外国語指導助手）が常駐し、異文化に触れるイベントなども実施され、校内で日常的に国際交流をする機会が多い。

現在の課題



毎年、留学生の受け入れや、海外との交流などがあり異文化に触れる機会があるが、「多文化共生の文化」を推進しようという意識が十分に根付いていないように感じる。マイノリティの意見をくみ取る機会、多様な価値観を柔軟に受け入れる姿勢などがやや薄く、少数派の意見やニーズが見落とされがちである。また、本校の人権教育は体系的に実施されておらず、どのような内容で実施するのかは学年に委ねられているため、学年によっては多文化共生への課題意識が薄くなりがちである。

現在の取り組み



- ・「HELLO Village」での ALT や留学生との日常的な交流。他国の文化を体験するイベント、海外の高校生の「HELLO Village」への訪問・交流（今年は 3 日間でアメリカから 75 名、オーストラリアから 30 名）
- ・オーストラリアの姉妹校への 3 ヶ月の留学（年に数名、今年は 2 名）
- ・海外からの留学生の受け入れ（年に数名、今年は 5 名）
- ・修学旅行（オーストラリア、ハワイ、台湾、沖縄から選択）への参加
- ・希望生徒による長期休みの国内・海外（宮崎県都農町、東京、ベトナムなど）へのフィールドワーク参加、現地の高校生との交流
- ・団体鑑賞「地球のステージ」でのさまざまな国や地域での課題の学習
- ・「総合的な探究の時間」における「学校を魅力にするプロジェクト」を通じた、ユニバーサルデザインやバリアフリー、デッドスペースの活用についての学習
- ・「総合的な探究の時間」における「貿易ゲーム」で、世界の不平等さの疑似体験を通した公平な社会のあり方についての学習
- ・1 年生のロングホームルームの時間におけるネットリテラシーを考えるワークショップ実施

※私自身が企画した取り組み

- ・自身の JICA 海外協力隊（モザンビーク）の体験談を話すイベントを放課後に実施。自身の体験談のほか、現地で活動中の協力隊員とオンラインでつないで現地の様子を紹介してもらったり、一時帰国中の JICA モザンビーク事務所の所長に來校していただき、座談会などを行なった。
- ・JICA 京都デスクの方による「世界がもし 100 人の村だったら」のワークショップを夏休みに実施



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

既存のルールに縛られずに、多様な価値観を受け入れることが、誰もが過ごしやすい社会につながると考えるため必要である。



学校にとって

今後、グローバル社会で活躍する人材にとって、多様な価値観を受け入れる素地が必要である。



世界・社会にとって

加速化するグローバル社会では、様々な価値観を持つ人々が共に生活するため、多様性を認めあう文化が必要である。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

- ・自身の体験（青年海外協力隊）から

アフリカのモザンビークで生活し、マイノリティとなる経験をした。私の場合は、現地の同僚や近隣の方に受け入れてもらい、多くの場面で協力的で、困ったときには助けてもらい、貴重な経験をすることができた。今思えば、多文化共生の文化がそこにあったのだと思う。

- ・本研修における学びや気づき
全国から集まった熱心な先生方と意見交流をして、地域によってさまざまな課題があること、その課題の解決に向けて試行錯誤しながら取り組んでいることを知った。また、他の先生方との議論を通して、自分が学校現場で感じている違和感をうまく言語化した意見を聞くことや、新しい視点にも触れることができた。
海外移住資料館では、自分が訪れたことがある南米のイグアス移住地（パラグアイ）についての情報を目にすることができた。また、日本人が初めて海外に移住した地がハワイであることを知った。ハワイは来年度の本校の修学旅行先の一つであり、そこを訪れることは、かつて多くの日本人が移住し多文化共生の社会を築いた歴史を学ぶことにつながると考える。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

一人一人の違いを受け入れ、異なる価値観を認め合える文化だと考える。理解できない発言や行動があったとき、その背景に何があったのかを考えることが大事だと思う。しっかり対話をするのが大事だが、自分の思いをうまく言語化できない人の気持ちに寄り添うことも必要だと考える。

学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

- 教員向けの取り組み・アイデア
学校現場で「多文化共生の文化」を推進するためには、教員の意識や理解を深めることが重要である。そのために講演会や実践的ワークショップなどの教員研修が必要だと考える。
 - ・多文化共生や国際理解について
 - ・LGBTQ や障がい者支援などマイノリティへの理解について
 - ・発達障害への理解と対策について
 - ・学校のルールの見直しについてなど
- 生徒向けの取り組み・アイデア
 - ・「総合的な探究の時間」において（今年度実施予定）外部講師による、世界の文化に触れ（多様性の体験）、自分の好きなこと・やりたいことを深掘り（自己理解）、自分と向き合うきっかけ作りのワークショップ
 - ・青年海外協力隊の経験を持つ本校教員数名による国際理解講座
- 「ロングホームルーム」における取り組み
 - ・株式会社マザーハウス講演会（今年度実施予定）
「途上国から世界に通用するブランドをつくる」という理念を社会貢献活動などを通して、多角的な視点から多文化共生について考える。その事前学習として、
 1. 映画『The True Cost』の予告編視聴：ファストファッション業界の問題とその社会的影響について考える。
 2. 企業のCSR（社会的責任）調査：いくつかのアパレル企業やフェアトレード商品を扱う企業のCSRについて調べる。
 3. ラナ・プラザ（バングラデシュの縫製工場・商業ビル）の崩壊事故について調べる。英語の教科書にラナ・プラザの崩壊事故に関する記事が掲載されている。上記の事前学習を通して、アパレル業界の裏に潜む労働環境や倫理的な課題を掘り下げ、持続可能なファッションに向けた意識を高める。
- LGBTQ や障がい者支援などマイノリティへの理解について
具体的にはLGBTQ 当事者による講演を通して、性的マイノリティへの理解、SOGI（性的指向・性自認）は自由であるという考えを深め、その他のマイノリティへの理解や自己認識につなげる。
- 「化学基礎」（私自身の担当教科）における取り組み
国際理解教育の実践（JICA 地球ひろば主催「開発教育 / 国際理解教育指導者研修」での実践授業）を通して、水問題や衛生環境に対する理解を深め、日本の技術が世界で活用される意義や、多文化共生の大切さを学び、共に課題に取り組む姿勢を育む。授業の内容は、軟水・硬水の利き水テスト（世界の地域による水の硬度の違い）、浄水場の浄化処理の学習、世界の水問題（水系感染症）について、日本の浄水場の技術が世界で活躍している例（プノンパンの奇跡）。

外部機関との連携

多文化共生、国際理解教育についての実践共有、情報交換や相談

- ・JICA 関西 京都デスク
- ・京都市国際教育グローバルキッズ研究会
- ・関西 OV 教員・教育研究会
- ・滋賀県国際協会、国際教育研究会 Glocal net Shiga

互いを尊重し理解しようとする多文化共生の文化をめざして

福井 千華 兵庫県立兵庫工業高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：xxx 名 外国につながる児童 / 生徒数：x 名（全体の x％）

学校背景



歴史と伝統をもつ兵庫県でも代表的な全日制工業高校である。特色ある 7 つの学科（建築、機械工学、電気工学、総合理化学、都市環境工学、デザイン、情報技術）を有し、各学科において多様で高度な学習ができる環境が用意されている。6割から7割の生徒が高校卒業後、就職をする。外国につながる生徒は、把握できているのは各学年5名程度。ベトナム、中国、韓国が多い。増加傾向にある。

現在の課題



外国にルーツを持つ生徒は増加傾向にあるが、学校全体での多文化共生の取り組みはあまりない。担当者によって多文化共生の取り組み内容・有無が変わってくる。本校に在籍している外国にルーツを持つ生徒は、他の生徒と同じ日本語の入試を受験し合格していることもあり、日本語指導などの特別な配慮は必要ないと考えられているが、様々な文化・背景を持つ生徒がいることを学校全体で共有しておく必要がある。お互いの文化・考え方を尊重する環境づくりが必要である。

現在の取り組み



- ・家庭科の授業で開発教育の実施
- ・食の文化交流会
 - 韓国にルーツを持つ先生を講師として、韓国の雑煮（トック）と日本の雑煮の食べ比べをしながら日本・韓国の文化について対話した。韓国の民族衣装、楽器の体験をさせてもらった。日本でも雑煮は地域によって違い、日本国内でも様々な文化があることに気付いた。
 - ベトナムにルーツを持つ生徒を講師として、ベトナムの揚げ春巻きを作った。講師となった生徒は寡黙で目立たないが、得意の料理を披露することができ、自身につながったようだ。参加生徒は、いろんなルーツの生徒が学校にいることを気づききっかけになった。
- ・外国にルーツがある、海外で活躍している人を講師として、人権講演会の実施
- ・昨年度、台湾の工業高校の生徒との交流会（本校）今年度、韓国・中国の生徒来校予定



食の文化交流の様子



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

違う考え方、価値観にワクワクしながら、いろんな風に物事を見ることができることは豊かな人生につながるから。



学校にとって

多様なニーズ背景を持つ生徒が過ごす学校の中で安心して過ごすことができる居場所を作るため。生徒の個性・特性を生かすことができるようにするため。



世界・社会にとって

みんなが生きやすい社会、みんなが幸せで、平和な世界にするため。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

- ・生徒一人一人多様な背景があり、個別の対応が必要になってくる。教師は生徒が必要とする外の組織につなげていく必要がある。生徒それぞれ多様な背景があり個別の対応が必要になってくる。教師がすべて対応するのは難しく、外の組織・人とその生徒をつなげて行くことが求められている。つなげたあとも、連携して情報交換していくことも大切であるということをつっかの会の取り組みを聞いて感じた。
- ・内田さんのお話で、先生にしてもらってうれしかったこと、「元気がないとき話しかけてもらえたこと」というのを聞いて、特別なことではなく他の生徒と同じ対応が求められていると感じた。これまで通り、生徒へ積極的に声をかけていこうと思った。
- ・当事者と対話することによって、新たなニーズ、課題が見えてくる。日本に住む外国にルーツを持つ人々も高齢化している。ニーズも変化・多様化していることに気づいた。

- ・学校内外の多文化共生に関する取り組みは、担当が変わっても続けていく仕組みが必要で、つながり続けて活動を進化・深化させていく方法を模索していく必要があると感じた。
- ・「やさしい日本語」は日本人にもわかりやすい。保護者への煩雑な案内文書を見直そうと思った。
- ・多文化共生、日本人同士でも文化の違いがある。違いを知ることは自分のルーツを知ることにもつながる。
- ・移民博物館を見学し、まだ知らないことが多数あり、知ること、関心を向けることの大切さを改めて感じた。生徒には、授業や課外活動を通して、外に目を向けるきっかけ作りが大切だと思った。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

- ・国籍、宗教、言語などにかかわらず一人一人すべてが異文化であることに気付き、互いを尊重し理解しようとする文化
- ・自分のことを、相手のことを大切にすることができ、みんなに居場所がある文化
- ・違いを楽しむことのできる文化
- ・多文化共生の文化、視野を広げることは豊かな人生につながると考える。

学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

● 生徒、保護者に対して

- ①生徒と積極的に交流するように心がけ、一人一人の個性の理解に努める。また、生徒一人一人が多様なルーツを持っていることを認識し、個別に声掛けを行う。生徒の思いを共感的に受け止め寄り添いながら、それぞれのニーズを把握し必要な支援をする。状況に応じて外部の組織・支援とつなげる。教職員間での情報共有をする。
- ②生徒・保護者向けの文書に「やさしい日本語」の要素を取り入れる。誰にでも分かりやすい案内文となる。

● 多様なルーツ、文化的背景の生徒がいることを先生方に知ってもらう

- ＊日本語がわかって文化的背景が違い、授業での話が通じないこともあることを知って欲しい。

- ①日々の会話の中で（対話）。多様なルーツ文化的背景を持つ生徒がいることをエピソードなど交えて伝える。
- ②先生方の研修を実施。興味を持ってもらうため、負担にならない、ポジティブで楽しい内容にする。

例）ワークショップ教材を用いて体験型の研修

例）JICA 関西訪問

例）食：キンパづくりなど

● 生徒へ多文化共生の種まき

①食の文化交流（継続）

＜実施予定＞日韓粉もの

- ・お好み焼きのレシピ募集を行い、その中から2つ選ぶ。
- ・選ばれたお好み焼き2種類とチヂミ2種類を作り食べ比べをする。
- ・似ている部分や、違う部分に気づく。国や地域、家庭によって様々で、国内にも様々な文化が存在することに気付くきっかけとなる。

②日々の授業で視野を広げる（国際理解・開発教育）

- （例1）家庭基礎 単元：衣生活 持続可能な衣生活をつくる
「服の一生」DEAR の教材を取り入れる
（開発教育協会「服・ファッション 開発教育アクティビティ集5」）

- （例2）家庭基礎（食生活）、フードデザイン
写真集「世界の子どもが食べるもの」を用いてフォトランゲージ
指導案 https://www.jica.go.jp/cooperation/learn/case/n_files/katei_02.pdf



兵庫県高等学校教育研究会家庭部会地区研修としてJICA 関西を訪問



フォトランゲージを使っでの授業

- （例3）外国に目を向ける工夫（外国に目を向けることで、国内の文化にも新たな視点から気付く）
住居分野・・・外国で撮影した家の写真を見せる。靴を脱ぐ習慣について考える
家族分野・・・外国での事実婚、苗字など名前にまつわるエピソードを話す
＊今後、家庭科の授業のどの部分に開発教育を取り入れることができるか整理していきたい。
- ③図書室で多文化共生に関する展示、本の紹介を行う。
- ④ゲストを呼んで、人権講演会を実施する。（引き続き）

● 学校全体での多文化共生に向けての取り組み

- 多文化共生に向けての取り組みを、人権 HR に積極的に取り入れ、組織的・大系的に計画・実施する。＊必要に応じて柔軟に対応し、持続可能な取り組みを目指す。

外部機関との連携

JICA 関西	訪問プログラム、講師派遣を活用する。
留学生との交流	近隣大学の留学生と生徒がやさしい日本語を用いて交流をする。
韓国料理教室	講師の先生を招いて生徒・教師向けに実施する。

高校生と日本語学校の留学生による教科学習を通した学び合い

島 由佳 鹿児島高等学校

所属先情報

全校児童 / 生徒数：1,700 名 外国につながる児童 / 生徒数：10 名（全体の 0.5%）

学校背景



異なる文化背景を持つ生徒は非常に少ない。しかし、鹿児島県内では留学生や技能実習生を中心に外国人人口は増加しており、令和 5 年度は前年より 2,484 人（20.70%）増えている。少子高齢化や転出超過により鹿児島県全体の人口は減少しているが、県内の在留外国人は 11 年連続で増加しており、鹿児島を支える人材として欠かせない存在となっている。

現在の課題



グローバルリーダーの育成を目指した国際交流は促進されているが、多文化共生を目指した取り組みは行われていない。しかし、本校では学校を卒業したあと、多数の生徒が鹿児島県内で進学・就職しており、地域社会で外国人と接触する場面は避けて通れない。ところが、生徒の発言から外国人に対する偏見や差別を感じる瞬間があり、多様性を理解し認め合う資質・能力が十分に育っているとは言えない。将来、異なる他者と協働していくためにも、高校在学中から多文化共生の取り組みを行う必要があると考える。

現在の取り組み



学校全体としての取り組みは行われておらず、教員の個人的な実践に限られている。外国人児童・生徒が多い学校では多文化共生の実践が盛んに行われている。一方、異文化色の少ない学校では、海外志向のグローバル教育は促進されているが、多文化共生に対する意識は高まっていない。しかし、今後ますます外国人と協働していく場面は増加すると予想される。高校生が学校を卒業後、偏見や差別意識を持つことなく外国人とコミュニケーションを取れるようになるためにも、多文化共生の取り組みが必要である。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

孤独な在留外国人を減らしたい

日本人との交流が少なく、孤独を抱えて暮らしている外国人が大勢いる。孤立している外国人の状況を一人でも多くの人に知ってもらいたい。



学校にとって

「多文化共生」の種まき

同じ空間で一緒に生活するだけでは何も変わらない。異文化を理解し、交流を促すきっかけ作りが必要である。そして、その場を提供できるのが学校！多文化共生の中心的な役割を担うことが期待されている。



世界・社会にとって

次世代のための平和な社会作り

人間は自分とは異なる他者を拒否する傾向があり、外国人に対して偏見や差別を抱きやすい。しかし、それでは平和な社会を作ることとはできない。交流を通して互いを知り、違いを乗り越えて変容していく必要がある。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

日本からの海外移住の歴史

戦前から戦後にかけて、ハワイやブラジル、カナダなどの国々に多数の日本人が移民として移住した。日本では現在、外国からの移民の受け入れに対して賛否両論が巻き起こっているが、日本人の海外移住は 150 年以上もの歴史があり、決して新しい課題ではない。日本人移民の中には卓越した技術で重宝された者もいたが、多くの場合、差別を受けながら苦労して未開の地を開拓していった。現在の日本では、外国人移民を「日本で稼いだ金を母国に仕送りする人」「日本の秩序を乱す人」というように否定的に捉える声も聞かれる。これはまさに、私たちの先祖が移民先で受けた状況と一致している。日本人移民は移住先でどのような待遇を受け、地域社会に溶け込んでいったのか。日本人移民の歴史を学ぶことで、日本が直面する多文化共生の課題に対してヒントを得ることができるかもしれない。

やさしい日本語

全ての外国人が日本語を完璧に理解できる訳ではない。そのため、外国人にも分かりやすい「やさしい日本語」の使用が求められている。日本人はつい、外国人に対しても高い日本語能力を求めてしまうが、多文化共生の時代においては互いに歩み寄る姿勢が大切である。外国人は日本語のどのような点に困難を感じているかを理解し、「やさしい日本語」を使用する習慣を身に付けていく必要がある。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

人間は自分とは異なる他者を拒否する傾向にある。そのため、外国人に対して偏見や差別意識を抱いてしまう。しかし、グローバル化が進行する中、異文化との接触は避けて通ることはできない。相互理解が不足したままでは差別や憎しみが広がってしまう。異なる文化背景を持つ者同士が互いの相違を理解して、違いを乗り越えて受容する。そして、異文化に対する考えや行動を変容させていく。このような「多文化協働」の文化を学校を中心に創造していきたい。

多文化協働

異文化を理解

違いを受容

行動・思考の変容



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイディア



日本語学校の留学生との交流

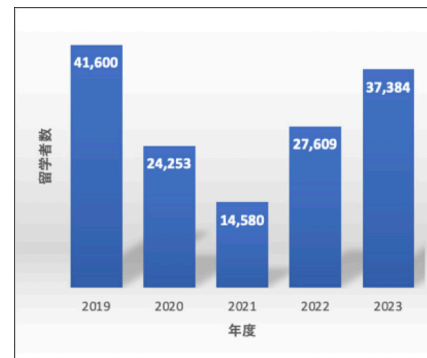
日本語学校とは？

日本語を教える機関。パンデミックの影響で減少傾向にあったが、現在では再び増加している（図 1）。

ビジネスマンや日本人の配偶者など様々な人々が在籍しているが、大半を占めるのが「留学生」。留学生の出身国は、アジア圏の国々が大半を占める（表1）。留学生は高校を卒業した後に来日するため、20歳前後の学生が多い。高校生とは年齢が近く、進路選択を控えているという点で似た立場にある。留学生が日本語学校に在籍できる期間は最大2年間。卒業後は日本の大学や専門学校へ進学したり就職したりする学生が多いため、外国人を日本社会へと送り出す「橋渡し」的な存在として日本社会に貢献している。

	人 (%)			人 (%)	
中国	11,879	(31.8)	バングラディシュ	1,414	(3.8)
ネパール	8,670	(23.2)	台湾	891	(2.4)
ベトナム	4,696	(12.6)	インドネシア	789	(2.1)
ミャンマー	2,351	(6.3)	タイ	505	(1.3)
スリランカ	1,750	(4.7)	モンゴル	497	(1.3)

（表1）留学生の出身国・地域別内訳（2023年度）



（図 1）日本語学校の留学生数

出典：両図表ともに下記調査をもとに筆者が作成
一般財団法人日本語教育振興協会（2024），“日本語教育機関の概況”
<https://www.nisshinkyo.org/article/pdf/20240401s.gaikyo.pdf>
（2024 年 10 月 20 アクセス）

教科での実践例

【目的】

異文化色の少ない学校で生徒の変容を促すのは難しい。

まずは、地域に住む外国人は遠い存在ではなく、自分と共通点があるということを知ってもらいたい。

①英語 [speaking]

タイトル：世界の多様な英語に触れよう！

活動内容：留学生の出身国や日本での生活について質問する

使用言語：英語 and 日本語

交流形式：対面 or オンライン

- 日本語学校には、英語を公用語や外国語として使用する留学生が在籍している。留学生と英語を使って会話することで、「国際共通語」としての英語に対する意識を高めることができる。また、世界の様々な英語の発音に触れることで、英語を通して世界の多様性を感じることもできる。
- 交流開始時に「Which language shall we use, Japanese or English?」と質問することで、相手の状況に合わせて言語選択を行う姿勢を身に付けることができる。
- 日本語学校の留学生は日本語を話すため、英語初級レベルの生徒にとっては心理的な負担を感じることなく交流することができる。

②英語 [writing]

タイトル：留学生のお悩み相談

活動内容：手紙を通して留学生の悩みを聞いてアドバイスする

使用言語：日本語や英語など

交流形式：手紙

- 日本語学校の留学生は、来日直後でカルチャーショックに直面することもあり。留学生の悩みに耳を傾け、日本での生活についてアドバイスをすることで、今まで当たり前と感じていた文化やルールを客観的に考える機会となる。
- 高校 2 ～3年生は、互いの進路について話すのもいい。
- 英語だけでなく日本も併記すると、留学生の日本語の勉強になる。その際には難しい漢字にルビを振るように指示する。また、来日したばかりの留学生には「やさしい日本語」を使用して、分かりやすい表現を心掛けるように指導する。
- 日本語をやさしい日本語にする作業は、英作文の練習にもつながる。

③数学

タイトル：日本留学生試験（EJU）チャレンジ！

活動内容：日本留学生試験（EJU）を解いてみる

使用言語：英語 or 日本語

交流形式：対面 or オンライン

- 留学生の中には、日本の国公立大学への進学を希望している学生がいる。外国人留学生が日本の国公立大学へ進学を希望する際には、「日本留学試験（EJU）」の受験が求められる。EJU の試験は日本の学習指導要領に基づいて作成されているため、高校生でも解答することができる。共通テストに近い試験と考えるとよい。
- 英語が苦手な生徒でも、数式を通してコミュニケーションを促進することができる。
- 数学は国境を越えた普遍的な学問であるが、割り算などの計算方法や学習内容など国によって若干違いがある。なぜ、日本との相違点や歴史的な背景を考えることで、異文化理解を促進することもできる。
- 高校生は自分の説明が通じない時、留学生に分かりやすく伝えようと試みる。自然な状況の中で「やさしい日本語」を使用する大切さを学ぶことができる。
- 留学生が解く問題にチャレンジしてみることで、留学生の立場に立って物事を考える機会となる。

④地理・公民

タイトル：ミャンマーについて知ろう

活動内容：ミャンマーの情勢を学び、ミャンマー人留学生の思いについて聞く

活動形式：対面 or オンライン

- 近年、ミャンマーからの留学生が増加している。「ミャンマー情勢が悪化したため学校が閉鎖し、復学の目途が立たずに来日した」という留学生の声を耳にする。日本語学校の留学生の中には、ミャンマーでは大学に在籍していたが、大学を諦めて来日し、企業奨学金を受給して卒業後は日本で就職する学習者もいる。彼らの留学生の思いを知り、彼らと今後どのように日本社会で共生していくかを考える機会となる。

⑤ホームルーム

タイトル：日本語学校の授業を受けよう！

活動内容：留学生と一緒に日本語学校で日本語の授業を受ける

使用言語：日本語

交流形式：対面

- 日本語学校を訪問して留学生の日常を体感することで、地域の外国人に対する理解を深めることができる。
- 留学生と一緒に日本語の授業に参加することで、普段何気なく使っている日本語について考えるきっかけになる。日本語のどのような点が難しいかを知り、「やさしい日本語」の使用に対する意識を高めることができる。

その他にも、物理、体育、美術などの様々な授業で実践可能！

外部機関との連携

日本語学校	多くの日本語学校の先生たちは、「高校と交流したいけれど閉鎖的でアクセスしにくい」と感じている。社会に開かれた学校を目指して、地域の日本語学校との交流の機会を増やしていく必要がある。
JICA	地方から JICA を訪問するのは難しい。修学旅行などでの機会を利用して海外移住資料館などを訪問し、日本の海外移住の歴史について学ぶ機会を提供したい。
地域の国際交流センター	日本語学校の他にも、地域社会には多くの外国人が住んでいる。国際交流センターの協力を得ることができれば、技能実習生や地域で働く外国人との交流も可能になる。高校生が多様な外国人と交流できる活動と一緒に考えたい。

多文化共生の文化を醸成しようというきっかけの種をまくために

樋口 里子 福岡県教育センター

所属先情報

学校背景



福岡県では、令和6年6月末現在、在留外国人数は 105,049 名（県人口の約2％）であり、国別ではベトナム（約 2.1 万人）、中国（約2万人）、ネパール（約 1.6 万人）の順に多い。令和3年度はコロナ禍のため減少したものの、以降は増加し続けている。県内の在留外国人数のうち半数程度が福岡市に集中しており、県全体として地域による違いが大きい。

現在の課題



県としては希望する外国人が身近な場所で日本語教育を受けることができる環境を整備することを目的に令和2年度から「日本語教育環境整備事業」を実施している。具体的な取組として、やさしい日本語研修や、「FUKUOKA IS OPEN センター」の開設、「日本語教室立ち上げ事例集」を作成する等がある。多文化共生（留学生・在住外国人支援）のための環境整備が整えられてきているといえる。
「多文化共生の文化」推進に関する取組は、地域間差が非常に大きい。地域の人口の 2.4％を在留外国人が占めるある町では、「多文化共生推進計画」を策定し、在留外国人を対象に地域の祭りやスポーツ教室、着物の着付け体験を開催する等、多文化共生の取組を推進している。

現在の取り組み



県教育センターでは、県内（政令都市を除く）の教職員対象の研修を実施している。令和6年度では県内の教職員対象に、「外国人児童生徒等への日本語指導の充実～支援体制と授業づくり～」講座を実施した。長期派遣研修や県の教育論文においても、過去5年の研究において多文化共生教育に関する研究は非常に少ない。県内の実施状況は、地域の実態に応じて違いがあり、それに応じて関心も地域によって大きく異なると考えられる。
令和6年度福岡県教育施策実施計画には、「1 学力、体力の向上」項目に、（2）異文化理解と外国語能力の向上」が位置付けられている。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

多文化とは、国や地域ではない。一人一人の背景が文化であり、国籍は関係ない。自分は、母と父の多文化共生から生まれた結果。自分の信念やメンタルモデルに気づくことが多文化共生の文化醸成の一步だから。



学校にとって

多文化共生の文化醸成のためには、今自分がいる場所で、気づきを生むためのきっかけの場をつくることができたなら、SOS のシグナルを出している人への気づきにつながるかもしれないから。



世界・社会にとって

人間が豊かに生き続けるためには、国や地域で閉ざして、そこだけの豊かさを求めているは持続可能とはいえないギリギリの時代にきているから。

上記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

ストーリー

見える部分ではなく、人それぞれにバックボーンがあり、それによって信念や価値観が形成され、思いや願いがあるということに気づいた。見えないところに思いをはせることができれば、奥底では同じ平等な人間なのだということを実感しながら分かることができた。

フェーズ

人はこれまでのストーリーがあるために無意識で大切にしたいこと、守りたいことがある。それを無視して変化を求められると反射として拒否反応を起こすと思う。だからこそ、じわじわと染み入るように人の心に働き掛けないといけない。それが多勢になったときにやっと次のフェーズに入るのだと思う。焦らないこと。力づくではどうにもならないことを理解する。次のフェーズに進むためには、安心して自分がさらけ出せるところで対話するしかないと思う。



自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

互いに守りたいものを守る土壌がある場所で、違いがあるのが当たり前だからこそ、対話によって分かりあい、話し合ってルールを作っていくことのできる文化。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

1. 「多文化共生の文化」醸成へのきっかけとなる異文化理解に関する授業

中学校における家庭科の授業

協 力：保護者、JICA 九州、国際協力推進員、栄養教諭

連 携：地域の多文化共生担当課、社会科

ねらい：食からその国のバックグラウンドに興味をもち、中学生の1日の献立を工夫し、各国の食文化を大切にしていこうとすることができる。

一次 (1時間)	1 給食の献立作成に対しての見通しを持つ。 (1) 国際協力推進員からフォトランゲージを行う。 ・海外の食事の写真から、日本と違うと思うところを挙げ、国際協力推進員からなぜそのような特徴がみられるのか解説してもらう（宗教や歴史、地理的要因等） (2) 食材を手がかりに朝食写真を白地図に貼る。 ・理由とともに朝食写真を白地図に貼る（ICT 機器） ・解説は国際協力推進員に行ってもらう (3) ハラル認証マークの意味を知る。	・食文化とその形成要因に関心を持つことができるように、フォトランゲージ後に、使用されている食材を手がかりに朝食写真を地図に貼る活動を設定する。
二次 (3時間)	2 パフォーマンス課題に取り組む。 1月に実施する「世界の食事」給食イベントで、食事から、その国の特色を考えることができる献立を出したいと思います。紹介したい国を選び、これまでに学習したことを思い出して、その国の文化や歴史、地理等がわかる一食分の給食献立を提案してください。 (1) 献立作成の手順を考える。 (2) 調べ学習を行う。 (3) 献立を立案し、相互評価を行う。 〔評価の観点〕 ・栄養面・給食であることへの配慮（安全面） ・嗜好 ・文化的、地理的、文化的背景	・中学生の1日の献立を栄養、嗜好及び文化的背景などの視点から考え、工夫することができるように、栄養教諭とTTでパフォーマンス課題に取り組む活動を設定する。 ・中学生の1日に必要な食品の種類と概量が分かるように、栄養教諭が講義を実施する。 ・個人で1つの国を選択し、グループ活動とする。
三次 (1時間)	3 立案した献立を交流する。 ・日本と海外の食文化の共通点と違い ・日本の食文化の特徴 ・これから大切にしていきたいこと	・栄養を考えた食品の組合せを中心に献立を工夫し、各国の食文化を大切にしていこうとすることができるように、献立を交流する活動を設定する。

2 「多文化共生の文化」醸成へのきっかけとなる異文化理解に関する職員研修（一例）

回 数：2回（間に1週間おく）

協 力：JICA 九州、JICA デスク福岡（国際協力推進員）

ねらい：自身の当たり前を問い直し、多文化共生への気づきのきっかけを生むことができる。

事前	〔事前アンケートの実施〕 ・海外にルーツのある子どもとの関わり・多文化共生に関する実践・「やさしい日本語」のイメージ
----	---

一日目	〔チェックイン〕わたしと多文化共生の文化 〔ワークショップ：国際協力推進員〕 ・「ひょうたん島問題」（藤原孝章著（2021）「新版シミュレーション教材『ひょうたん島問題』」明石書店） ・対話「わたしと多文化共生」 〔パネルディスカッション：国際協力推進員、在留外国人、多文化共生に取り組んでいる地域の方〕 ・テーマ「多文化共生を語る」 〔リフレクション〕「私がみたい『多文化共生の文化』が醸成された学校」 〔今後に向けて〕当たり前ではないと気づいたこと、気づき、見える風景に関する報告
二日目	〔ワークショップ：国際協力推進員〕 ・ReaderとLeader・コンセンサスゲーム 〔本質観取〕「多文化共生とは」 〔今後に向けて〕対話：多文化共生の文化醸成のために取り組みたいこと 〔チェックアウト〕これからの自分



外部機関との連携

JICA 九州

展示物、研修プログラムの協働企画（講義・演習の実施）

JICA デスク福岡、国際協力推進員

JICA「多文化共生の文化共創プログラム」

多文化の背景をもつ子ども・若者たちへの支援
ー横浜での取り組みから

2024年10月5日
公益財団法人 横浜市国際交流協会
多文化共生推進課長 門 美由紀(かど みゆき)
m.kado@yoke.or.jp

公益財団法人横浜市国際交流協会
(YOKE・ヨーク)

◆横浜市の外郭団体
◆総務省認定の地域国際化協会
◆ミッションステイトメント

私たちは、国際都市横浜の歴史的・文化的特性を継承しつつ、異なる文化や価値観をともに認め尊重し合える豊かな社会づくりを目指します。

事業体系

- ◆多文化共生のまちづくりを支援する事業
 - ・在住外国人の自立を支援する事業
 - ・グローバル人材育成を支援する事業
- ◆国際協力・交流に関する施設を管理運営する事業

活動拠点：横浜市内5か所
(西区・中区・南区・鶴見区)

YOKEが目指す多文化共生
中期4か年計画 (2022~2025)

中期4か年計画
2022-2025

施策1 地域多文化共生を「ささえる」
在住外国人や地域への支援

施策2 人と人を「つなぐ」
地域や学びの場におけるつながり

施策3 相互理解を「ふかめる」
お互いの国の文化、国際的な課題への理解を深める

施策4 外国人が「かつやくする」
各分野で外国人が社会参加し活躍する環境づくり

団体運営 政策を進めるにあたって土台となる持続可能な団体運営の取組

2つのセンターで
外国人住民のくらしを支えます

12言語での生活相談

横浜市多文化共生総合相談センター

ワンストップセンターとしての機能
・市内在住外国人へ総合的な情報提供・相談対応を行う拠点
・12言語対応
・2019年8月開設

日本語を学ぶ

よこはま日本語学習支援センター
Yokohama NIHONGO support Center

・地域日本語教育の総合的な体制づくりを進める基盤となる拠点
・外国人住民の日本語習得支援のための拠点
・2020年8月開設

国際交流ラウンジ相談・情報・交流等、地域の国際交流・多文化共生の拠点

地域日本語教室 一家の近くで、職場の近くで日本語を学ぶ、仲間を作る

市内にはボランティア団体やNPOによる日本語・学習支援教室が約140

横浜の
多文化の背景をもつ
子ども・若者たち

多文化の背景をもつ外国につながる外国にルーツをもつなど、いくつかの表現があります

具体的な背景、状況の説明はのちほど...

横浜市に暮らす外国人住民 117,922人 約170か国地域 (人口の約3.13%) 2024年3月末現在

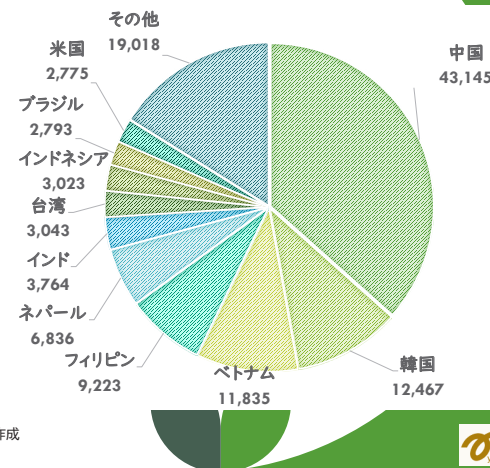
1	2	3	4	5(人)
中国	韓国	ベトナム	フィリピン	ネパール
43,145	12,467	11,835	9,223	6,836

6	7	8	9	10
インド	台湾	インドネシア	ブラジル	米国
3,764	3,043	3,023	2,793	2,775

<参考>在留資格別 2024年3月末現在

1 永住者	34.0%
2 技術・人文・国際業務	13.3%
3 家族滞在	11.4%
4 留学	6.4%
5 特別永住	6.0%
6 定住者	5.2%
7 日本人の配偶者	4.8%

横浜市統計資料をもとに作成



横浜の今一学校で

- ◆「外国につながる子どもの支援に関わるYOKEの取り組み」(別紙Ⅰ、裏面)「(Ⅰ)横浜市の現状」
- ◆「ようこそ日本の学校へ」横浜市教育委員会
<https://www.city.yokohama.lg.jp/kosodate-kyoiku/kyoiku/plankoho/kyoikukoho/nihongoshido-tebiki.html>
「Ⅰ 日本語指導が必要な児童生徒受入れの手引 - 横浜市」など
- ◆「外国につながる子どもたちへの支援」
<https://kyoinsaiyo.city.yokohama.lg.jp/education/kaigai>

横浜の今一地域で

- ◆学習支援教室 横浜市内に40教室ほど
日本語・学習支援 教室データベース (横浜) <https://yokeweb.jp/>
主な対象者:「子ども」で検索
- ◆多文化の背景をもつ若者を支援する団体、当事者団体など
 - ◆認定NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ (Me-net)
 - ◆神奈川県立地球市民かながわプラザ (あーすぶらざ) 外国人教育相談
 - ◆多文化ユースプロジェクト

横浜のこれまで一参考書籍

- ◆菊池聡2018『〈超・多国籍学校〉は今日もにぎやか!』岩波ジュニア新書
- ◆山脇啓造・横浜市立いちよう小学校編2005『多文化共生の学校づくりー横浜市立いちよう小学校の挑戦』明石書店
- ◆外国人山脇啓造・服部信雄編著2019『新 多文化共生の学校づくりー横浜市の挑戦』明石書店
- ◆「外国につながる子どもたちの物語」編集委員会(編集), みなみなみ(イラスト)2020『まんがクラスメイトは外国人課題編ー私たちが向き合う多文化共生の現実』明石書店他にも2冊

YOKEでの取り組みのはじまり

- ◆2000年『共に生きる地域を目指して』
共通の課題意識を持つボランティアら、YOKE、コーディネーター(有識者)で構成される実行委員会による講座実施:パネルディスカッション、分科会、各団体見学(Ex. 中学校国際教室、地域の学習支援教室、中国帰国者定着促進センターなど)
ーボランティアからの提案による講座の企画と開催
ー教育委員会からの情報提供
ー共にフィールドを歩き課題を共有
外国人児童生徒2,094人(2000年5月1日現在,教育委員会資料)
学習支援教室5団体
- 参考:ニューズレター「ヨークピア」2001年3・4月号
特集「ニューカマーの子どもたちー学習支援・居場所づくり」未配布

YOKEの取組ーそれから

- ◆2001年『共に生きる地域を目指して PART2』(講座)
- ◆2002年『外国人児童生徒の学習支援に関するネットワーク会議』
- ◆2003年 母語を生かした学習支援モデル事業
～
- ◆2017年 にじいろ探検隊による居場所 Rainbowスペース
<https://nakalounge.jp/nurturing>
- ◆子ども・若者支援事業(別紙Ⅰ、表面)

子どもたちによりそう視点

参加者のみなさんの自治体には、いま、多文化の背景をもつ子どもたちがどれくらいいるでしょうか

ぜひ、時間を見つけて調べてみてください

多文化の背景をもつ子どもたち

【親の国籍】

両親とも同じ外国籍
両親の国籍が異なる
親の一人は日本国籍

【どこで生まれ育っているか】

両親の母国生まれ、母国育ち
母国生まれ、日本育ち
日本生まれ、日本育ち
他の国で生まれ、母国育ち
他の国で生まれ、日本育ち

ひとくくりにはできない
多様性

【移動の経験】

ずっと日本
親と一緒に来日
親より後に呼び寄せ
往還
複数の国を移動

【主な言語】

親の(いずれかの)母語
日本語
両方
ダブル・リミテッド

【来日時期】

ずっと日本
就学前に来日
就学後に来日

「普遍性・共通性」
「個別性」
双方を捉える眼が必要

外国につながる子どもたちはどのくらいの数、公立の学校で学んでいる？

文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（令和5年度）」の結果（速報）について

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/1421569_00006.htm

本調査における「日本語指導が必要な児童生徒」とは、日本語で日常会話が十分にできない児童生徒、もしくは、日常会話ができていても学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じている児童生徒を指す。

- （参考）公立学校に在籍している**外国籍の児童生徒数**（出典：文部科学省「学校基本調査」）
- 日本語指導が必要な**外国籍**の児童生徒数→**子どもの来日時期は様々**
- 日本語指導が必要な外国籍の**言語別**在籍状況
- 日本語指導が必要な**日本国籍**の児童生徒数→日本語だけでなく、生まれる前から現在、さらにはその先を見据え、**ライフステージ**ごとに生じがちなニーズを把握し、支援を考える必要がある

「多文化共生」とは

国籍や民族などの異なる人々が、
互いの文化的なちがいを認め合い、
対等な関係を築こうとしながら、
地域社会の構成員として**共に生きていくこと**

「多文化共生の推進に関する研究会報告書」総務省2006より抜粋

多文化共生の“文化”とはなんのでしょうか？

“文化”を共創するために、私たちはどんなことができるのでしょうか？

そもそも“文化”とは？

文化的背景の異なる人と生活してみると・・・ 私たちの常識が相手の常識でないことに直面！

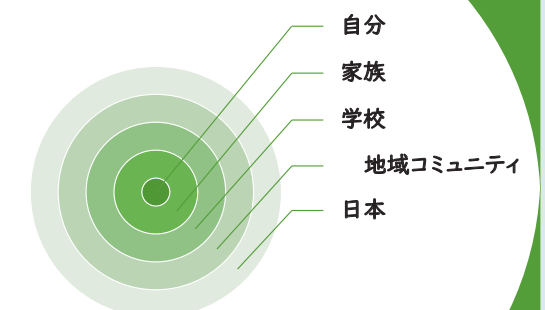
Ex.風邪をひいたとき／祈りの時間／待ち合わせ etc.

人が生活を営んでいく上で
文化は重要な要素

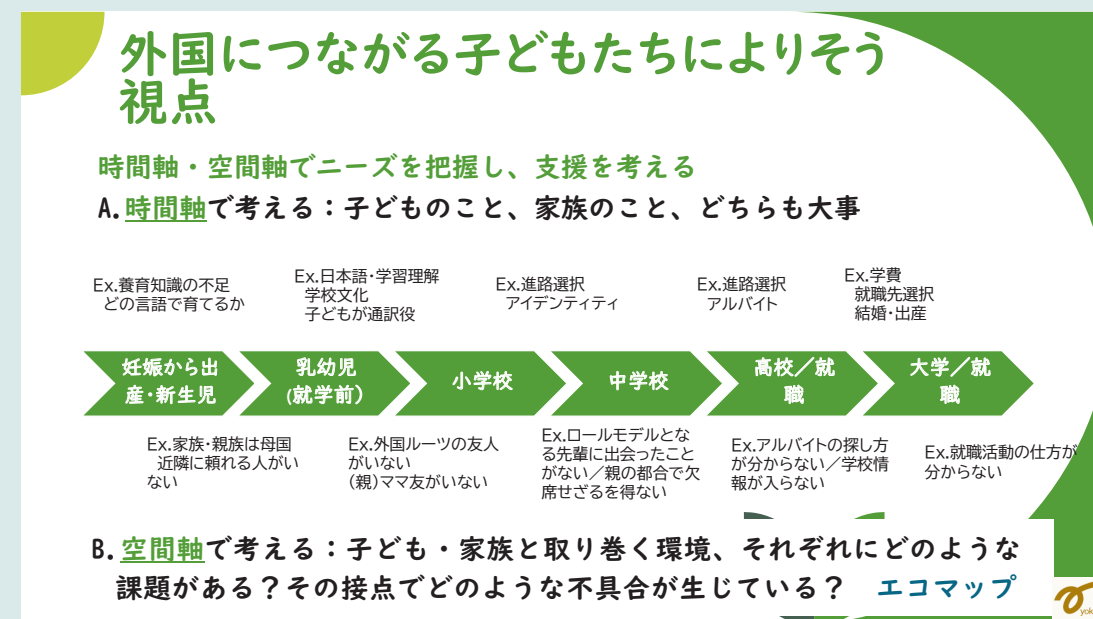
文化とは

- 1 学習されるもの
- 2 集団によって共有されているもの
- 3 普段意識しないもの
- 4 世代から世代へと受け継がれるもの

八代京子・町恵里子・小池浩子・磯貝友子著1998『異文化トレーニング
ボーダーレス社会を生きる』三修社



かつ、人はそれぞれ
複数の「文化」を持っている



やさしい日本語にチャレンジ

冊子「みなさんに知ってもらいたい言葉_やさしい日本語_第6版」
<https://www.yokeweb.com/yasashiinihongo/#toc1>

生活を営む地域の状況と社会資源を知り、つながる

多文化にかかわる社会資源

- 自治体の国際課
- 国際交流協会
- 自治体の多言語相談窓口
- 多文化共生のキーパーソン
- 外国人生活支援NPO
- 日本語ボランティア団体
- 学習支援団体
- 国際交流団体
- 外国人ママの会
- 宗教施設 (教会等)
- エスニックショップ (レストラン等)
- 大学留学生センター
- 監理団体

子どもにかかわる社会資源

- 自治体の各窓口: 子育て支援課など
- 子育て支援拠点
- 児童相談所
- 保健所
- 教育委員会
- 各小中学校、高等学校
- 保育園、幼稚園
- 外国人学校
- 社会福祉協議会
- 民生委員・児童委員

横浜市では2014年から「やさしい日本語」の活用推進開始

「やさしい日本語」で伝える
分かりやすく 伝わりやすい日本語を目指して 第4版
2017年4月
横浜市 国際政策総務課 市長局広報課

City of Yokohama
Language: Japanese site
重要なお知らせ (Important Notice)
「やさしい日本語」について
「やさしい日本語」で伝える
分かりやすく 伝わりやすい日本語を目指して 第4版
<https://www.city.yokohama.lg.jp/lang/residents/ej/daiji/kijun.html>

(2) 講演資料 ユツカの会

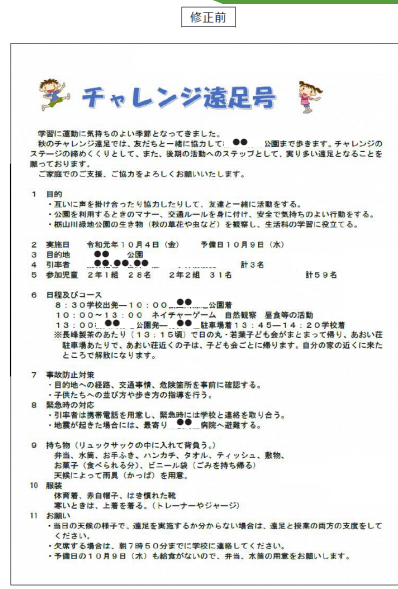
学校のお知らせ

やさしい日本語、分かりやすいお知らせ
に書き換えてみましょう

どの情報が必要？
足りない情報は？
どのように表現したらいい？

学校における「やさしい日本語」活用促進事業実施報告書
https://www.pref.shizuoka.jp/_res/projects/default_t_project/_page_/001/052/439/yasanichi.pdf
 p.19 を一部改変

必要なのは
やさしい日本語の知識とスキル？
そして“やさしい日本語”だけでできれば
OK？



多文化の背景を持つ子どもたちにとって、学校内外に安心できる人や居場所が存在すること、切れ目のない支援があることは、大きな支えになります。

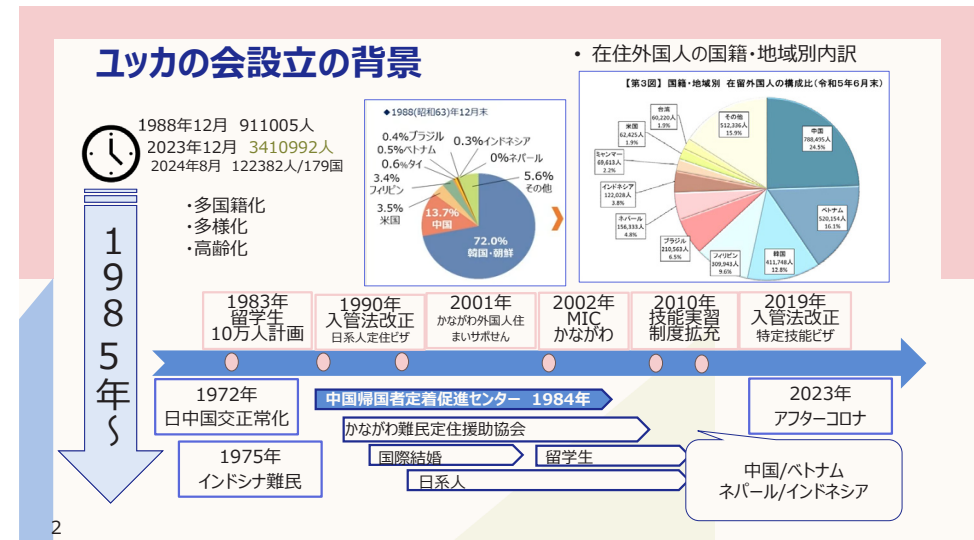
様々な場面で直面する“壁”にかれらが挑戦できるよう、現場での実践に役立つ考え方やアプローチを一緒に学び、私たちにできることを、これからも一緒に考えましょう。

参考文献等

鍋倉健悦1997『異文化間コミュニケーション入門』丸善ライブラリー
星野ルネ2018『まんがアフリカ少年が日本で育った』毎日新聞出版他にも数冊
毎日新聞取材班編2020『にほんでいきるー 外国からきた子どもたち』毎日新聞
出版

熊本市外国人総合相談プラザ「学校からのお知らせ『やさしい日本語』例文集」
<https://www.kumamoto-if.or.jp/plaza/kiji0031568/index.html>
 最終更新日：2023年3月3日

学校における「やさしい日本語」活用促進事業実施報告書
https://www.pref.shizuoka.jp/_res/projects/default_project/_page/001/052/439/yasanichi.pdf



ユツカの会 4本の柱

代表 — 運営委

設立 1988年10月4日
補習教室現況調査 2023年6月

●ボランティア数

20代以下	38
30	19
40	44
50	49
60	59
70	48
合計	257

* 活動休止中、イベントの。

成人学習者：173人（ボランティア休止39人）

●滞日年数別学習者数

滞日年数	来日	人数
1年未満	2023年	21
1～3年	2020～2022	37
4～5年	2018～2019	20
5～10年	2013～2017	9
10年以上	2012年以前	3
日本生まれ		28
来日前		3

合計		127
----	--	-----

```

graph LR
    A[勉強会] --- B[補習教室]
    A --- C[日本語教室]
    B --- D[パソコン教室]
    B --- E[交流会]
  
```

●学年別補習学習者数

● 国別学習者数

● 国別補習学習者数

国名	人数	うち日本籍
中国	70	11
フィリピン	11	8
ベル	10	
ベトナム	7	
イラン	3	2
インドネシア	3	2
ネパール	3	
バクスタン	3	
インド	2	
日本	2	
香港	2	1
その他	6	1
合計	122	

学年	人数
小1	7
小2	8
小3	11
小4	8
小5	11
小6	11
中1	7
中2	16
中3	23
既卒	4
高1	10
高2	2
高3	4
合計	122

＜私たちはともに暮らしている 仲間＞

補習教室での気づき

未来を担う子どもたち

- | | | |
|---|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・日本語ができますか ・学齢と学年 ・学習言語と生活言語
(母語と第二言語)
ダブルリミテド ・授業中 頭の中は？ ・お知らせ/配布物/提出物 ・学校のお知らせがわからない ・入園手続きができない ・既卒者/就職/進路の壁 | <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ日本に来たの？ ・親と会わない/独りぼっち ・地域に学ぶ場がない ・提出物 ・大丈夫は 要注意 ・お弁当 ・家は母文化 (テレビも中国語) <p>情報収集の困難さ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・発達障害？ ・先生との連携 ・高校進学 (在県卒)
文化の違い
制度の違い ・基礎学力 ・連れ子の増加 ・おなかやすい子どもたち ・ボランティアの多くの目 <p>・地域の機関との連携</p> |
|---|--|---|

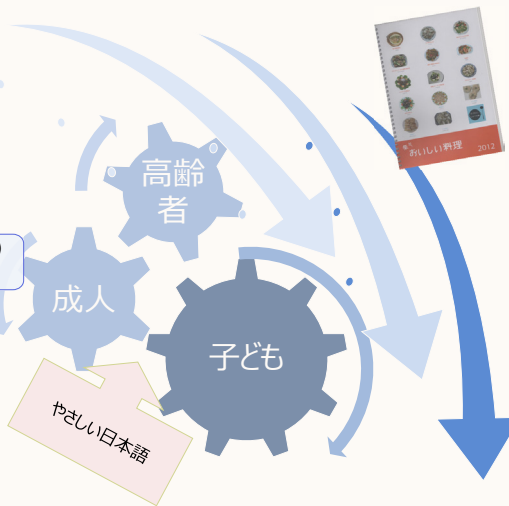
正しい生活情報を伝えたい

～補習教室ボランティアとして見てきたこと～

- ・滞在の長期化と多様化
 - ・ 来日背景、国籍、
 - ・ 滞在理由、家族構成等
- ・情報収集の壁
 - Ex. 高齢者・障害者・外国人
- ・情報へのニーズの高まり
 - ・ 多言語対応の限界
 - ・ 日本語力アップ

広がりつつながり

- 子ども対象の補習教室
- 成人対象の日本語教室
- ワーク教室
- やさしい日本語生活情報発信（233号）
- 中国残留邦人しゃべり場
- こどもひろば/世界の家庭料理
- 多文化高齢社会ネットかながわ
- ひろば/ともじびカフェほけっと
- やさしい日本語の普及活動



やさしい日本語

～具体的な情報ニーズ～

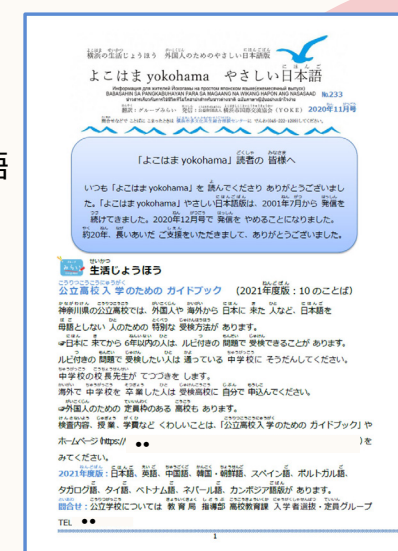
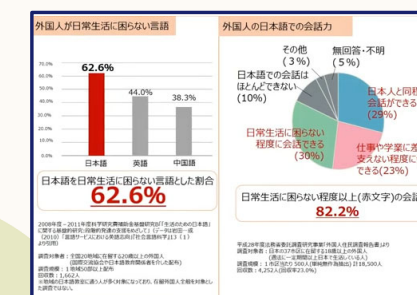
- 正確な情報が欲しい
 - 学校からのお便りが読みたい
 - 幼稚園の募集はいつから？
- 情報入手できれば、自身で解決できる！
- 現実とは・・・
 - 知らないばかりに 不安と背中合わせ

当事者の思い：内田さんのお話

- 自己紹介
- これまでのライフヒストリー
- 小中学生の頃、学校やコミュニティで、助かったこと、うれしいなと思ったこと
- 親として子どもへの思いや願い
- 今だからこそ思うことーやってみたかったこと、学校やコミュニティにあれば良いなと思うこと
- 学校の先生へのメッセージ

やさしい日本語 横浜でのあゆみ

緊急伝達（阪神淡路大震災）
⇒生活情報発信（書き言葉）
⇒共通言語（話し言葉）＝やさしい日本語
多言語生活情報誌（よこはま＆横浜）
⇒やさしい日本語版



やさしい日本語の取り組み

～「願い」と「ねらい」～

- ①「分かりそうだ 読んでみよう」
 - ・ 良く出る漢字や ことばに慣れる
 - ・ 生活のためのサービスや、地域の仕組み・ルールなどの知識を増やしてほしい
- ②「もっと知りたい 聞いてみよう」
 - ・ やさしい日本語が、外国人と地域の人とが コミュニケーションするきっかけに
⇒月刊多言語 生活情報誌「よこはま・横浜」 やさしい日本語版
⇒翻訳作業の軽減

伝える思いと姿勢

～「やさしい日本語」の「やさしさ」とは？～

- ① 語りかけるようなやさしい言葉
- ② 適切な分量
- ③ 内容が分かった

⇒「行動してみよう」「誰かに聞いてみよう」
「申し込んで見よう」という気持ちになれる

ご事情があり、定められた期日までに手続きできない場合でも、随時受け付けています。

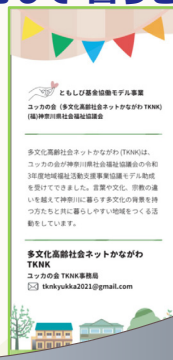
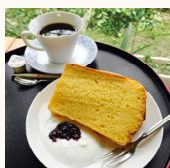
手続きがおそくなくても大丈夫です。

誰もが 住みなれた町で その人らしく 安心して 暮らせますように！



★人をつなぐことば
やさしい日本語

★人がつながる場所
ぽけっと



ユッカの会

ありがとうございました

(3) 多文化共生のための参考文献・教材・資料リスト

※児童生徒向け

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格（税込）	出版日	関連 サイト
ひとことレビュー							
1	エッセイ	ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか？	ロビン・ディアンジェロ	明石書店	¥2,750	2021年6月1日	
			ホワイトフラジリティとは「白人の心の脆（もろ）さ」。差別を否認することはマジョリティの特権性につながる・・・どうしたらお互いを理解できるのかを問いかけます。				
2	教育実践	多文化クラスの授業デザイン——外国につながる子どものために	松尾知明	明石書店	¥2,420	2021年3月19日	
			外国につながる子どもたちへの学びの支援は何が必要か。教科をベースに学習言語と学習方略の支援へのアプローチを紹介しています。				
3	教育実践	多文化共生のためのシティズンシップ教育実践ハンドブック	多文化共生のための市民性教育研究会編著	明石書店	¥2,200	2020年4月2日	
			日本社会の多文化共生に向けたシティズンシップ教育の実践を提案しています。「違いを認める」ことは大切だが、個人の「思いやり」だけでは解決しない。アクティブラーニングの具体的なテーマから考えます。				
4	研究書	「人種」「民族」をどう教えるか—創られた概念の解体を目指して	中山京子他編著	明石書店	¥2,860	2021年1月8日	
			社会的に創られた概念であるのに、実体化されて差別や偏見を生んでいる「人種」「民族」をどう教えるか。学術的見地からみた正しい認識と、これまでに日本や海外で行われた授業実践の蓄積を踏まえて、教師が教えるための小・中・高の授業プランを提案する。				
5	国際理解教育	国際理解教育を問い直す—現代的課題への15のアプローチ	日本国際理解教育学会	明石書店	¥2,750	2021年4月2日	
			国際理解教育の原点を問い直す・・・国際理解教育の歴史をたどると共に、これからの国際理解教育はどうあるべきか、授業のあり方などを考えます。				
6	※ 作品集	横浜 (koko) ——「外国につながる」ではひとくくりできない中高生の作品集	Picture This Japan (監修), 横浜インターナショナルユースフォトプロジェクト写真集編集委員会 (編集)	明石書店	¥1,980	2021年5月7日	
			外国につながる子どもたち（インターナショナルユース）の目線で切り取った「横浜」の写真集。見た目や言語にとらわれず、自分らしい表現がたくさんあります。とてもステキな写真集です。				
7	実践ガイド	Q&A でわかる外国につながる子どもの就学支援「できること」から始める実践ガイド	小島祥美 (編著)	明石書店	¥2,420	2021年3月1日	
			何から取り組めば良いのか？ Q&A でわかりやすく伝えます。				
8	実践ガイド	外国人児童生徒受入れの手引 改訂版	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課		無料 (HP から DL)	2019年3月	
			外国人児童生徒の公立学校への円滑な受入れに資することを目的として、文部科学省が作成した「外国人児童生徒受入れの手引き」です。				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格（税込）	出版日	関連 サイト
			ひとことレビュー				
9	ノンフィクション	芝園団地に住んでいます；住民の半分が外国人になったとき何が起きるか	大島 隆	明石書店	¥1,760	2019年10月1日	
			埼玉県川口市芝園団地は住民の半分が外国人。一つの団地に二つの世界。どんな感情が芽生え、それをどうしていけば良いのか、実際に芝園団地に住む著者の記録です。				
10	ノンフィクション	にほんでいきる	毎日新聞取材班 編	明石書店	¥1,760	2020年12月20日	
			外国籍の子ども達が日本でいきるためには何が必要なのか、その実態取材しました。子ども達の「学ぶ権利」は守られているのでしょうか。差別や格差について考えます。				
11	ノンフィクション	アンダーコロナの移民たち——日本社会の脆弱性があらわれた場所	鈴木 江理子	明石書店	¥2,750	2021年6月1日	
			現在のコロナ禍は外国につながる子ども達とその家庭にとって大きな危機となっています。どうやって支援をすべきなのかを考える一冊です。				
12	評論	日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション——人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別	デラルド・ウィン・スー	明石書店	¥3,850	2020年12月18日	
			いろいろな場面で現れる無意識でありながら重大な差別と言われるマイクロアグレッション。マジョリティとマイノリティが共に尊重し合うためにはどうすれば良いのかを考えます。				
13	エッセイ	他者の靴を履く アナーキック・エンパシーのすすめ	ブレイディ みかこ	文芸春秋	¥1,595	2021年6月25日	
			アナーキーとエンパシーはつながっている。自分の靴を脱げなければ、他者の靴は履けない。共感だけではとどきつけない、生き抜くために必要な力とは何か、作者は様々な場面から問いかけます。				
14	教材・読み物	未来の授業 SDGs ダイバーシティ BOOK	佐藤直久監修	宣伝会議	¥1,980	2021年12月28日	
			「ダイバーシティ」というテーマを通して自身のあり方を深める教材です。みんなが活き、活かされる社会を創るためにはどうすればいいのか、小学生から大人まで、豊富なマンガやイラストを通して学べます。				
15	評論	海外ルーツの子ども支援 言葉・文化・制度を超えて共生へ	田中宝紀	青弓社	¥2,000	2021年5月25日	
			日本の学校で学ぶ海外ルーツの子どものうち、1万人以上が何の支援もない状態にあり、地域ボランティアたちによる日本語教室の活動にも限界が迫っています。日本語を母語にしない子どもたちへの支援活動を続けてきた経験に基づく現状と提言です。				
16	実践ガイド	学級担任のための 外国人児童指導ハンドブック	菊池 聡	小学館	¥1,980	2021年3月16日	
			教室での「困った！」をズバリ解決！国際教室のスペシャリスト菊池先生がマンガで登場、指導のコツとポイントをわかりやすく解説します。				
17	マンガ	まんが アフリカ少年が日本で育った結果	星野ルネ	毎日新聞社	¥1,100	2018年8月20日	
			カメルーン生まれ、日本育ちのアフリカ少年のニッポン観察日記。「あたりまえ」って何だろう？前向きなパワーに元気が出ます！ ※星野ルネさんの本は、教材として使用することができます。（申請不要）				
18	マンガ	まんが アフリカ少年が日本で育った結果 ファミリー編	星野ルネ	毎日新聞社	¥1,100	2019年3月30日	
			ファミリー編はフルカラー＆総ルビでさらにパワーアップしています！ ※星野ルネさんの本は、教材として使用することができます。（申請不要）				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格（税込）	出版日	関連 サイト
			ひとことレビュー				
19	マンガ	まんが アフリカ少年が見つけた 世界のことわざ大集合 星野ルネのワンダフル・ワールド・ワーズ！	星野ルネ	集英社	¥1,210	2020年5月26日	
			単なる世界のことわざ辞典ではありません。星野ルネさんの体験を通じたことわざから、世界が広がります。 ※星野ルネさんの本は、教材として使用することができます。（申請不要）				
20	ノンフィクション	外国ルーツの若者と歩いた 10 年	海老原周子	公益財団法人東京歴史文化財団 アーツカウンシル東京	無料 (HP から DL)	2021年3月15日	
			本研修でもお話いただいた海老原周子さんの著書。外国ルーツの若者を取り巻く現状やワークショップの現場で見えてきた課題、次の10年に向けて取り組むべきことの提案などを、活動の記録と共に記しています。リンクからPDFがDLできます。				
21	教育実践	多文化社会で多様性を考えるワークブック	有田佳代子、志賀玲子、渋谷実希〔編著〕／新井久容、新城直樹、山本冴里〔著〕	研究社	¥2,420	2018年12月17日	
			様々なバックグラウンドを持つ人々が一緒に生きる社会で、仲間と考えを伝え合いながら理解を深め、あらためて多様性を考え得るワークが掲載されています。子どもから大人までアレンジして使えます。				
22	教育実践	〈超・多国籍学校〉は今日もにぎやか！ 多文化共生ってなんだろう	菊池 聡	岩波ジュニア新書	¥902	2018年11月20日	
			国際教室での取り組みを現場からお伝えします！困難や問題を解決するヒントがたくさんあります。				
23	マンガ	となりの席は外国人	あらた真琴	ぶんか社	¥1,047	2012年4月2日	
			もと小学校教員の作者が外国につながる子どもがたくさんいる学校に赴任した！気軽に読めるマンガです。				
24	教育実践	チャレンジ！多文化体験ワークブック：国際理解と多文化共生のために	村田晶子／中山京子／藤原孝章／森茂 岳雄 編	ナカニシヤ出版	¥2,420	2019年6月30日	
			授業や学生主体の交流活動、地域の国際交流活動でも使える Chapter は「問い」と「活動」で構成されています。ワークシートもついているので振り返りや報告会にも活用できます。				
25	エッセイ	ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー	ブレイディ みかこ	新潮社	¥1,485	2019年6月30日	
			ここはイギリス、中学生の「ぼく」はイエローでホワイト、その中で考える多様性とは、アイデンティティって何だろう？？読みやすいエッセイから考えます。成長した「ぼく」の親離れを描く「2」もあります！				
26	教材・読み物	WE HAVE A DREAM 201 カ国 202 人の夢×SDGs	市川太一編	いろは出版	¥2,860	2021年6月12日	
			世界 201 カ国の若者たちが語るそれぞれの夢。その夢がつながるところに何が見えるでしょうか。それぞれの夢がどの SDGs に関連しているかも考えます。英語版もあります。				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格（税込）	出版日	関連 サイト
			ひとことレビュー				
27 ※	写真集	Daily Bread: What Kids Eat Around the World	Gregg Segal	powerHouse Books	（\$40）	2019 年 6 月 4 日	
			世界の子ども達は、何を食べているのでしょうか？セネガルやブラジル、インドネシアなど世界の子ども達と彼らが 1 週間で食べたものを美しい写真で紹介しています。				
28	報告書・ ワーク ショップ集	教師国内研修報告書 & ワークショップ集 多文化共生 ～困難さを豊かさに変 えるプロセス～	—	JICA 横浜	無料 (HP から DL)		
			誰一人取り残さない持続可能な社会へ向けて、日本から海外に渡った日本人移住者の歴史や、海外から日本に戻ってきた人々の暮らしに触れることを通して、多文化共生について理解を深め、研修で得た知識や経験をもとに、「持続可能な社会」「誰一人取り残さない」をテーマとした参加型学習教材（ワークショップ）を作成しました。				
29 ※	教材・ 読み物	世界の教室から	—	JICA 東京	無料 (HP から DL)		
			世界 14 カ国の教室の様子を写真とメッセージで紹介。外国につながる生徒の背景がわかります。				
30 ※	実践ガイド	今日から私も パディさん	—	JICA 中部	無料 (HP から DL)		
			外国の人たちは「地域で共に生きる仲間です」パディさんは、地域で外国の方が安心して暮らすことができるように手助けをする仲間・相棒です。パディさんになるための入門書！				
31	報告書・ ワーク ショップ集	多様な社会を考える 学びのプログラム集	—	JICA 中国	無料 (HP から DL)		
			はじめて開発教育・参加型の学習を実践しようとしている方や、多文化共生、多様な社会の構築について考えたいという方が、すぐに活用できるように作成しました。				
32 ※	雑誌	JICA 広報誌 JICA Magazine	—	JICA 広報部	無料 (HP から DL)	偶数月発行	
			偶数月に発行される JICA の広報誌です。中高生向けの記事もたくさん掲載！美しい世界の写真はスマホや PC のオリジナル壁紙として DL 可能です。電子書籍でも購読できます（無料）				
33 ※	ポッド キャスト	「世界は可能性で いっぱい」 presented by JICA Magazine	—	JICA 広報部		隔月配信	
			国際協力のゲートウェイ JICA Magazine 編集部のポッドキャスト番組です。世界各地、多種多様な職種で活動する JICA 海外協力隊員や、専門家などを毎回ゲストに迎え、生の声をお届けします。現地で見た、聞いた、食べた、感じたことを編集部員がインタビューし、世界に目を向けるきっかけとなることを目指したトーク番組。				
34 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」 アフリカ篇（アフリカ全体）	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			主に中学生を対象とした開発教育用の教材です。知っているようで知らないアフリカのことと、アフリカ全体とアフリカの 10 か国について紹介しています。生徒向けの冊子、教員用の指導書および導入用の動画の 3 本立てで公開しています。ご希望の方には冊子を送付いたします。 問い合わせ先：広報部地球ひろば推進課 mptgp@jica.go.jp				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格（税込）	出版日	関連 サイト
			ひとことレビュー				
35 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」アンゴラ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			〈アンゴラ編〉海辺に広がる大都会！石油とダイヤモンドの国の内線のきずあとと復興				
36 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」ジブチ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			〈ジブチ編〉中東とアフリカ、アジアとヨーロッパをつなぐ「海上輸送の要」ジブチ！！				
37 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」ベナン	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			〈ベナン編〉行ってみたい！「ICT 産業」「観光産業」二つの顔を持つベナン！				
38 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」南アフリカ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			〈南アフリカ篇〉なぜラグビーが人々の心を厚くするのか。南アフリカが目指した「ワンチーム・ワンカントリー」とは？？				
39 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」南スーダ ン	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			〈南スーダン〉武器ではなくスポーツで競いあうことを体験。若者が活躍する国へ！南スーダン共和国！				
40 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」モザンビ ーク	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			〈モザンビーク編〉日本との不思議な縁を結んだ海野シルクロード。織田信長の家臣、黒人の侍「弥助」はモザンビークの出身だった！？？				
41 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」リベリア	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			〈リベリア編〉内戦やエボラウイルス、多くの困難に立ち向かう、たくまじきリベリア。国民の平均年齢は 19 歳！！！！				
42 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」ルワンダ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			〈ルワンダ編〉内戦を乗り越えて・・・ICT による国づくりがぐんぐん進む「アフリカの奇跡」ルワンダ！				
43 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」ウガンダ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			〈ウガンダ編〉「困ったときはお互い様」寛容な心を持った人々の国、ウガンダ！				
44 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」サントメ・ プリンシペ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021 年 5 月 1 日	  
			〈サントメ・プリンシペ編〉知る人ぞ知る幻の島。青い海に浮かぶ生き物の楽園！！				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格（税込）	出版日	関連 サイト
			ひとことレビュー				
45	報告書・ ワーク ショップ集	学校や地域で活用できる！ 多文化共生ワークショップ集	JICA 横浜	—	無料 (HP から DL)		
			「多文化共生と移民」のテーマで実施した 2019 年度 JICA 横浜教師海外研修の参加者が、研修の一環として作成した参加型アクティビティ教材を掲載しています。国内事前・事後研修や、ブラジル連邦共和国での現地研修で学んだこと、気付いたこと、疑問に思ったことなどを基に作られたワークショップ集です。学校や地域で、多文化共生の環境づくりのために活用ください。				
46	報告書・ ワーク ショップ集	総合的な学習（探求） の時間のアイデア集	JICA 東京	—	無料 (HP から DL)		
			総合的な学習（探究）の時間で、国際理解教育／開発教育／ESD をどのように進められるか、学習指導案・ポイントをまとめたアイデア集です。多文化共生の項目では、「難民」、「幸せの定義」、「隣の席の友達」などのテーマから多文化共生社会の実現をジブンゴトとして捉えるためのワークショップなどを紹介しています。				
47	報告書・ ワーク ショップ集	JICA 中国 開発教育 支援事業ー 20 年をふり かえり、これからを 考える	JICA 中国	—	無料 (HP から DL)		
			JICA の開発教育支援事業 20 年をふりかえり、これまでの成果と課題を見つめ、今後の開発教育支援事業のあり方を考える機会として作成しました。中国センターにおける開発教育支援事業の実績や本事業を活用された先生方を対象に実施したアンケート結果、継続的に国際教育に取り組まれている先生方の寄稿文等が紹介されています。				
48	教材	多文化共生ってなんだろう？（本編）	JICA 九州	—	無料 (HP から DL)		
			同じ地域に暮らす外国人住民の存在をより身近に感じていただくことを目的に作成した教材です。本教材では、身近に起きているかもしれない問題を取りあげた 5 つのケーススタディと地域での取り組みや九州に多く住んでいる外国人の「国」について紹介しています。				
49	教材	多文化共生ってなんだろう？ ～データブック～（資料 集編）	JICA 九州	—	無料 (HP から DL)		
			「多文化共生ってなんだろう？（本編）」の別冊です。九州の外国人材に関する統計データや、九州各県での多文化共生に対する取り組み事例をまとめています。本編の参考資料としてご活用ください。				
50	教材 （紙芝居）	カリナのブラジルとニッポン	落合佳江子	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出		
			来日 5 年目、小学 6 年生の日系ブラジル人 3 世を主人公にした物語です。前半は、ブラジル移民の歴史、後半は主人公が現在抱えているの学校生活・家族の問題を実話をもとに描いています。				
51	教材 （紙芝居）	弁当からミックスプレー トへ	中山京子 / 森茂岳雄	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出		
			100 年以上前のハワイ生活、さとうきびプランテーション、様々な国からの移民との交流、ハワイの多文化社会、移民の食文化変容を日系移民史を通して描いています。				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格（税込）	出版日	関連 サイト
			ひとことレビュー				
52	教材 （紙芝居）	ハワイにわたった日系 移民	中山京子 / 森茂岳雄	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出		
			ハワイへの移民体験を持つ祖母と小学生の主人公を描いています。ハワイ日系移民の戦前戦後のファミリーヒストリーを知ることができます。				
53	教材 （紙芝居）	海を渡った日本人	中山京子	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出		
			写真で日系移民の歴史全般を概説をしたものです。紙芝居の写真はすべて JICA 横浜にある海外移住資料館に展示してある物・写真です。				
54	教材	移民カルタ	—	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出		
			日本人の海外移住の歴史、移住者の生活や心情、日本に住む日系人の生活や思いなど、子どもたちにも知ってほしい移民に関する様々な事柄をかるたにしました。絵札の裏には読み札の解説がありますので、遊びを通して楽しみながら学ぶことができます。				
55	教材	日本ーブラジル移民カ ルタ	—	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出		
			日本の学校に多く在籍する日系ブラジル人児童生徒、教室内で彼らとともに学ぶ日本人児童生徒、ブラジルにおいて日本語を学習する生徒を対象として教材開発を行いました。日本語学習者はことばの獲得だけでなく、歴史や文化保持／変容を学びながらエスニック・アイデンティティを高めることができ、共に学ぶ日本人生徒は日系ブラジル人の友人の背景を理解することができます。				
56	教材	移民スゴロク	—	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出		
			4 択のクイズに答えながら、遊びを通して日本人のブラジル移住および移住一般に関して学ぶスゴロクを作成しました。日本から船に乗って出発し、長い航海の後ブラジルに到着、そしてブラジルでの生活になじんでいく、その体験をクイズで学べます。				
57	教材	いみんトランク	—	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出		
			移民に関する授業や事前学習をサポートする貸出教材です。国際的な人の移動から多文化共生を学ぶことのできる楽しい教材で、日本と世界をつなげたいとの思いから作られました。移住者の歴史や経験、貢献などにかかわるハンズ・オン教材や先生方向けの解説書などを多数取り揃えています。				
58	教材 （DVD）	Monica and Friends 日本とブラ ジル友情の絆	Mauricio de Sousa Productions Japan	—	JICA 横浜 海外 移住資料館 資料 貸出		
			昔の日本人はどうして海外に移り住んだのか？移り住んだ先でどんな生活を送っていたのだろう？まずは、ブラジル人の女の子モニカといっしょに移住の歴史を見てみよう！（11 分）				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格（税込）	出版日	関連 サイト
			ひとことレビュー				
59	教材	教材で使えるショート映像集	JICA	—	無料 (HP から DL)		
			中学・高校生が対象の教材です。JICA 事業の映像や、NHK や世界の報道映像及び独自のインタビュー映像を、授業でそのまま使えるよう再編集したアクティブラーニング用の映像教材です。「水と世界」「国際協力」「難民」「人間の安全保障」のテーマを、それぞれ数分にまとめました。				
60	教材	つながる世界と日本	JICA	—	無料 (HP から DL)		
			対象は小学校高学年～高校生です。途上国と日本とのつながり、世界共通の目標「SDGs」や国際協力について、クイズを交えながら分かりやすく紹介しています。				
61	教材	共につくる 私たちの未来	JICA	—	無料 (HP から DL)		
			SDGs の基本を、日本の国際協力や各国の子どもたちの紹介も交えて学べる教材です。各ゴールについて、関連データや最初の一步となる問いも掲載しており、学校などで SDGs を扱う際にそのまま活用できます。				
62	教材	SDGs を学ぼう、SDGs で学ぼう！	JICA	—	無料 (HP から DL)		
			JICA 地球ひろば作成の SDGs 関連教材を 1 冊にまとめた教材ガイドブック (DVD 付) です。授業で役立つ映像教材やアレンジして使えるデジタル教材をぜひご利用ください。				
63	書籍	新大久保に生きる人びとの生活史——多文化共生に向けた大学生による社会調査実習の軌跡	箕曲在弘	明石書店	¥2,750	2022 年 3 月 31 日	
			2000 年代韓流ブームに沸いた新大久保の街は、今や多国籍タウンへと変貌を遂げています。本書では、新大久保の概要をはじめ、そこで生活を営む外国ルーツの人々の生活史に着目します。12 名の当事者への大学生による聞き取り、さらには社会調査実習の授業実践ノウハウまでを網羅した素晴らしい一冊！（参照：明石書店）				
64	書籍	新版 日本の中の外国人学校	月刊イオ編集部	明石書店	¥1,760	2022 年 2 月 10 日	
			日本の公立学校では包摂が困難な外国につながる児童生徒の教育を支え、引き受ける外国人学校。コロナ禍で生じた「教育の継続」などに関する新たな差別。子どもたちがアイデンティティを失わず日本社会で共生していくために奮闘する学校現場に迫ります。（参照：明石書店）				
65	書籍	外国人の子ども白書【第 2 版】——権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から	荒牧重人	明石書店	¥2,750	2022 年 2 月 25 日	
			約 30 万人の外国籍の子どもたち。彼らは今、どのように生きているのだろうか……。現代日本における「外国につながる子ども」の現状と課題がわかる画期的な入門書。第 2 版では、新型コロナウイルスの拡大が外国人の子どもの生活に及ぼした影響、入管政策の変化など最新の情報に触れています。（参照：明石書店）				
66	書籍	わたしからはじまる！SDGs	川延昌弘 / 辰野まどか	風鳴舎	¥1,760	2022 年 6 月 27 日	
			自分の好きや想いを SDGs とつなげて考えることが、自分や自分の周りの世界とつながるきっかけになるとしたら？世界中の人とつながり、新しい未来をつくっていくためのツールとして SDGs を捉え、実際にアクションを起こせるようになる本です！本書の sections2 では、ワークにもと取り組みます。探求学習・課題図書としても最適な一冊！（参照：風鳴舎）				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格（税込）	出版日	関連 サイト
			ひとことレビュー				
67	書籍	異文化間教育事典	異文化間教育事典	明石書店	¥4,180	2022 年 6 月 20 日	
			異文化間教育学の「知」を結集した事典。異文化間教育の理論と方法、対象、領域の 3 部構成で、研究・実践において基礎となる幅広い 204 の重要項目を置いています。多文化化する社会における近年の課題や学問的な成果を取り上げ、今後の社会づくりの課題とヒントを示す一冊。（参照：明石書店）				
68	書籍	日本語×世界の課題を学ぶ 日本語で PEACE [Poverty 中上級]	奥野由紀子 / 小林明子	凡人社	¥2,640	2022 年 8 月 20 日	
			日本語学習の中で、世界の問題のつながりに目を向け、自分ごととして捉えやすいように、「貧困」をテーマにより良い世界の実現について考えます。日本語と同時に世界の平和について学び、日本語能力だけではなく、深い思考力、互いを理解し協調していく力を身につけます。（参照：凡人社）				
69	書籍	事典持続可能な社会と教育	日本環境教育学会 日本国際理解教育学会	教育出版	¥3,080	2019 年 9 月	
			現行の学習指導要領の前文には、「持続可能な社会の創り手」を育むことが明記された。予測不可能なこの世界において、持続可能な社会の構築のために、今、何をすべきなのかを[持続可能な社会の構築] [社会的・文化的課題] [地域をめぐる課題と取り組み] [教育方法の革新] などの観点から考えます。「未来の教育」の姿を模索する人に読んでほしい一冊。（参照：教育出版）				
70	書籍	学校と博物館でつくる国際理解教育 新しい学びをデザインする	中牧弘允 / 森茂岳雄 / 多田孝志	明石書店	¥3,080	2019 年 8 月 1 日	
			2002 年の「総合的な学習の時間」の創設によって模索されるようになった、博物館と学校の連携。では、学校・博物館・学会の 3 者が連携・協働することでのどのような学びが創造できるのだろうか。「新しい学びをデザインする」をテーマに、国立民族学博物館をフィールドにした総合的な学習の時間や社会科の授業実践の実例を紹介し、そこから見えてくる課題について検討します。（参照：明石書店）				
71	書籍	社会科における多文化教育 多様性・社会正義・公正を学ぶ	森茂岳雄 / 川崎誠司 / 桐谷正信 / 青木香代子	明石書店	¥2,970	2019 年 6 月 20 日	
			多文化教育について、学校教育のカリキュラムにある社会科（地理・歴史・公民）に焦点を当て、その背景となる理論の検討と具体的な実践の分析、提案を行います。小中高での実践事例や北米の事例研究を収録した多文化社会における社会科のあり方を考える一冊です。（参照：明石書店）				
72	書籍	カラフルな学校づくり ESD 実践と校長マインド	住田昌治	学文社	¥1,980	2019 年 1 月 15 日	
			気合を入れて ESD を実践するよりも、気付いたら実践していた・・・!じわじわと浸透していく学校、教員、子ども、保護者、地域の変容。横浜の普通の公立小学校が元気を取り戻していくその日常と学校づくりを住田校長が語ります。すべての教職員に読んでもらいたい公立小学校の挑戦を描きます。（参照：学文社）				

海外移住資料館

入館無料



日本人の海外移住、日系人の歴史はもちろん、多文化共生や人権についても学べます！
学校の授業や様々な学びの場に活用できる教材も充実！

海外への移住者たちは、慣れない土地でどのような困難を乗り越えてきたのか。また、移住先国の人びとどのようにお互いを尊重し、共存を目指してきたのか。展示を通して、多文化共生について考えましょう。

SDGs学習にも最適！

日本人移住者は現地の持続可能な開発に貢献してきました！



健康 & 教育

日本人移住者による病院や施設は、良質な医療や福祉を現地の人々に提供しています。また、日本式教育の良さを取り入れた学校には、日系人でない子どもたちも多く通っています。



農業 & 経済

日本人移住者は原生林を開拓して、その土地を守りながら、地元の人と協力してさまざまなイノベーションに取り組みながら作物をつくり地域経済に貢献しています。



多文化共生

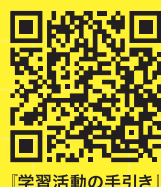
日本人移住者は、差別や困難を乗り越えて、異なる文化や価値観を受容、尊重し合いながら、多様な出自や背景をもつ人々との共生を実現してきました。

事前予約は、海外移住資料館HP「団体訪問」から！

おすすめPoint! ①

歴史・地理・公民、etc. 各教科の探求学習に！

「人口の変化と海外への移民」(中学歴史)、「南アメリカ州」(中学地理)、「共に生きる共生」(中学公民)などの学習にも最適です。探求学習のアイデアはこちら！



「学習活動の手引き」

おすすめPoint! ②

しっかり充実館内ガイド！



ジュニア版の音声ガイドはもちろん、見学の際に役立つ「パスポート」(ワークブック)もご用意しています。

おすすめPoint! ③

五感を通して体験できる！



触れて、聞いて楽しむ展示、ゲームやクイズもあるので、楽しみながら学ぶことができます。3D写真スポットもおすすめ！



校外学習や修学旅行に当館をご活用ください。リクエストや相談がございましたらお気軽にお問合せください！

■ 海外移住資料館

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2-3-1

アクセス：「馬車道」駅から徒歩8分、「みなとみらい」駅から徒歩15分、「桜木町」駅から徒歩15分

お問合せ先：045-663-3257(代表) jicayic_jomm_info@jica.go.jp

資料館HP



【外国につながる児童の教育に携わるみなさまへのお役立ち情報】

11 か国の教育制度・学校文化ガイド集

JICA 横浜では、東南アジア・南アジア・中南米各国のうち、神奈川県内の小中学校に多く在籍する 11 か国を対象として、各国の教育制度・学校文化に関する調査を実施し、ガイド集としてとりまとめました。

内容

教育制度

- 学校体系と取得可能な資格・学位
- 就学手続き・学校区域指定の有無
- 学校教育費
- 進学要件
- 障害のある子どもの就学

教育内容

- カリキュラムの特徴
- 教科
- 進級制度

● 算数カリキュラム

学校文化

- 1 年間の学校行事
- 1 日の流れ
- 学校のルール・習慣
- 学校生活に必要なもの
- 保護者の関わり



指導上の留意

< 東南アジア 5 か国 >



フィリピン



タイ



カンボジア



ラオス



ベトナム

< 南アジア 4 か国 >



バングラデシュ



ネパール



パキスタン



スリランカ

< 中南米 2 か国 >



ブラジル



ペルー

SCAN ME !



お問い合わせ先

JICA横浜 市民参加協力課

電話：045-663-3253 (代表) メール：yictpp@jica.go.jp

〔 発行 〕

独立行政法人 国際協力機構（JICA）横浜センター

TEL：045-663-3251 FAX：045-663-3265

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港 2-3-1

〔 編集 〕

JICA 地球ひろば・教員向け研修運営事務局

一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）

E-mail：jica-edu@j-gift.org

TEL：03-4577-6767

〒108-0014 東京都港区芝5丁目26-24 田町スクエア 2F

〔 発行 〕 2025 年 2 月